高知県香南市発掘調査報告書　第４集

兎田柳ヶ本遺跡

うさいだ　やなぎがもと

－中山田地区農業集落排水事業に伴う発掘調査報告書－

2010.3

香南市教育委員会

兎田柳ヶ本遺跡

－中山田地区農業集落排水事業に伴う発掘調査報告書－

2010.3

香南市教育委員会

下面の遺構・周溝墓と土坑群

SD4・墓域を区画する溝

出土した庄内式土器・SK37

木製品（鋤）出土状況・SK41

序

香南市は、平成18年３月に、赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村の５町村が手をつなぎ合併したまちです。青い空・碧い海・深い緑、そして実り豊かな大地と温暖な気候風土の恩恵を受け、早くから先人達が歴史を創ってきた地域です。

この兎田柳ヶ本遺跡のある野市町は香南市で最も遺跡が集中しており、中でも当遺跡のある兎田地区は、国の重要文化財に指定されています絵画銅剣が発見された地域であることから、特に出土する遺物に期待が集まるところであります。

当遺跡は、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺跡であり、検出されました「方形周溝墓」を含む墓域は、高知県内では出土例が少なく大変貴重なものであると聞きます。

香南市では、平成21年４月に香南市文化財センターを開設し、遺跡の発掘調査や整理作業を行うとともに、市内で発掘した数多くの土器や民具等の文化財を展示し一般に公開しております。広く市内外の方々に香南市の歴史や文化に触れていただき、大切な遺産である文化財を保存・保護するとともに、啓発及び活用に努めております。

本書は、香南市の歴史を広く知っていただくとともに、埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただきますことを願って刊行するものです。文化財保護の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、高知県教育委員会、高知県埋蔵文化財センターをはじめ多数の方々のご協力をいただいたことに心からお礼申し上げます。

平成22年３月

高知県香南市教育委員会
教育長　島　﨑　隆　弘

例　　言

1．本書は、平成14年度に実施した中山田地区農業集落排水事業に伴い野市町（現香南市）教育委員会が実施した兎田柳ヶ本遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．兎田柳ヶ本遺跡は、高知県香南市野市町兎田字柳ヶ本60番地他に所在する。

3．試掘調査は平成14年3月18日から3月28日に実施し、本調査は平成14年5月13日から8月30日まで実施した。

4．調査対象面積　　4,670㎡
　試掘調査面積　　120㎡
　本調査面積　　2,000㎡

5．調査体制（平成14年度）
　事務担当　　久家　英生　　野市町教育委員会　生涯学習課　　主幹
　調査員　　更谷　大介　　（財）野市町開発公社　埋蔵文化財調査員

6．兎田柳ヶ本遺跡の整理作業及び報告書作成作業は平成20年度まで更谷大介（香南市教育委員会生涯学習課嘱託）および溝渕真紀（同）が担当、平成21年度は松村信博（香南市文化財センター主任調査員）と宮地啓介（香南市文化財センター嘱託）が20年度までの成果を引き継ぎ、分担して行った。また、報告書作成作業全般について伊野広高（生涯学習課　主幹）の協力を得た。

7．報告書刊行時（平成21年度）の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制は以下のとおりである。

課　長	吉田　豊	嘱託職員	宮地　啓介
係　長	山本　八也	臨時職員	小松　経子
主任調査員	松村　信博	〃	宮本　幸子
主　監	竹中　ちか	〃	水田　紀子
主　幹	伊野　広高	〃	福島　賀代子

8．本書の編集は松村が行った。執筆分担は以下の通りである。
　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ章、第Ⅲ章第1節（松村）、第Ⅲ章第2節（宮地）

9．本報告書中で使用する方位は真北であり、公共座標は世界測地系第Ⅳ系による。なお、調査の際に設定したグリッドの座標軸は真北から16°東に傾いている。なお、方位確認のため調査の際には磁北を使用した。調査地付近では、磁北は真北から西に6°43′傾いている。

10．発掘現場作業員は下記の方々である。精力的に作業に従事された方々に対し、記して敬意を表す。
　佐野宣重・橿尾俊喜・河村みさ子

11．重機による表土剥ぎ、排土運搬、埋め戻しについては清藤勝秀氏の便宜、助力を得た。

12．遺物整理、報告書作成においては下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
　小松経子・宮本幸子・福島賀代子・水田紀子・山口知子・岩崎佐枝

13. 下記の方々には現地での調査、報告書作成過程を通じて貴重なご助言・ご教示をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略・所属は2009年度）

出原恵三（高知県埋蔵文化財センター）、清家章（高知大学教授）、中原計（徳島大学埋蔵文化財調査室）

また、出土木製品についての樹種鑑定及び保存処理を（株）吉田生物研究所に依頼した。

14. 出土遺物、写真その他図面類の関係資料は香南市文化財センター（香南市香我美町山北1553-1）で保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の経緯及び方法
第１節　調査の経緯…… 1
第２節　試掘調査…… 2
第３節　調査の方法…… 5
第４節　調査の経過（調査日誌抄）…… 7

第Ⅱ章 遺跡周辺の地理・歴史的環境
第１節　地理的環境…… 11
第２節　歴史的環境…… 13

第Ⅲ章　調査の成果
第１節　基本層序…… 18
第２節　遺構と遺物…… 20
１．上面（1面目）の遺構…… 20
２．中面（2面目）の遺構…… 36
３．下面（3面目）の遺構…… 40
４．遺構の新旧関係…… 60

第Ⅳ章　まとめ
第１節　遺構と遺物…… 71
第２節　兎田柳ヶ本遺跡の性格…… 77

第Ⅴ章　付編　自然科学分析
香南市野市町兎田柳ヶ本遺跡出土木製品の樹種調査結果　－（株）吉田生物研究所－…… 79

挿　図　目　次

第１図　香南市及び兎田柳ヶ本遺跡位置図…… 1
第２図　試掘トレンチ位置図（S=1/1,000）…… 2
第３図　試掘トレンチ TR10～14セクション図（S=1/80）…… 3
第４図　試掘調査　出土遺物実測図（S=1/4）…… 4
第５－１図　調査区の位置と公共座標（S=1/1,000）…… 5
第５－２図　調査区の位置と設定した４ｍグリッド（S=1/500）…… 6
第６図　兎田柳ヶ本遺跡周辺の旧地形（昭和8年）…… 11
第７図　兎田柳ヶ本遺跡周辺の地形（S=1/5,000）…… 12
第８図　兎田柳ヶ本遺跡周辺の主な遺跡（S=1/30,000）…… 14
第９図　Ａ区の遺構及びセクション図（S=1/120、1/50）…… 17
第10図　Ｃ区基本層序（S=1/50）…… 19
第11図　上面遺構配置図（S=1/200）…… 21
第12図　SK１平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 22
第13図　SK２平面・断面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 23
第14図　SK３～６平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 25
第15図　SK７・８・10・12・13平面・エレベーション図（S=1/40）…… 26
第16図　SK９平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 27
第17図　SK11・14平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 29
第18図　SK15・16平面・断面・エレベーション図（S=1/40）…… 30
第19図　SK17平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 31
第20図　SD１平面・エレベーション図（S=1/60）…… 33
第21図　SD１出土遺物実測図（S=1/4）…… 34
第22図　SD２平面・エレベーション図（S=1/60）…… 35
第23図　SD３平面・エレベーション図（S=1/60）…… 35
第24図　中面遺構　マウンド遺構と周辺トレンチの位置（S=1/200）…… 36
第25図　マウンド１・２平面エレベーション図（S=1/80）…… 37
第26図　マウンド状遺構付近のセクション図（S=1/50）…… 38
第27図　マウンド２　出土遺物実測図（S=1/4）…… 39
第28図　下面遺構配置図（S=1/200）…… 41
第29図　SK18・19平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 42
第30図　SK20～22平面・断面・エレベーション図（S=1/40）　SK20・21出土遺物実測図（S=1/4）43
第31図　SK23平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 45
第32図　SK24～27平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 46
第33図　SK21・25出土遺物実測図（S=1/4）〈木製品〉…… 47

第34図　SK28～34平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 49
第35図　SK35・37・38平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 51
第36図　SK39～41平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 53
第37図　SK41遺物出土状況平面・エレベーション図（S=1/20）　出土遺物実測図（S=1/4）…… 54
第38図　SK45遺物出土状況平面・エレベーション図（S=1/20）　出土遺物実測図（S=1/4、1/6） 55
第39図　SK42～44・46・47　平面・エレベーション図（S=1/40）…… 56
第40図　SD４出土遺物実測図1（S=1/4）〈木製品〉…… 57
第41図　SD４平面・エレベーション図（S=1/80）…… 58
第42図　SD４出土遺物実測図2（S=1/4）…… 59
第43図　SD５平面・エレベーション図（S=1/60）　出土遺物実測図1（S=1/4）…… 60
第44図　SD１・４と周辺遺構の新旧関係・平面・エレベーション図（S=1/80）…… 61
第45図　マウンド１・２と周辺遺構の新旧関係・平面図（S=1/80）…… 62
第46図　マウンド１・２と周辺遺構の新旧関係・エレベーション図（S=1/80）…… 63
第47図　包含層出土遺物実測図（S=1/4）…… 63
第48図　下面検出２基１組の土坑…… 72
第49図　上面と下面の土坑の重なり…… 74
第50図　兎田柳ヶ本遺跡　出土遺物（古墳時代初頭、壺・甕）…… 75

表　目　次

表１　新旧遺構対照表…… 9
表２　兎田柳ヶ本遺跡周辺の遺跡（時代別）…… 15
表３　遺構計測表…… 64
表４　遺物観察表（弥生土器・土師器・近世陶器・土製品・石器）…… 67
表５　遺物観察表（木製品）…… 70

写真図版目次

巻頭カラー１　下面の遺構・周溝墓と土坑群　SD４・墓域を区画する溝
巻頭カラー２　出土した庄内式土器・SK37　木製品（鋤）出土状況・SK41

図版１　三宝山スカイラインより見た調査区と周辺の景観（北西方向より）・調査前風景（南から）
図版２　遺跡周辺の地形（空中写真・平成元年撮影）・調査前風景（西から）
図版３　試掘調査・Ｃ区堆積状況（SK17東トレンチ）
図版４　Ａ・Ｂ区の調査
図版５　１面目　遺構面完掘状況・１面目　遺構検出状況
図版６　SD１　検出状況・SD１　完掘状況
図版７　SK１の調査
図版８　SK１・SK２の調査
図版９　１面目　遺構（SD および SK）
図版10　SK17の調査
図版11　マウンド状遺構（東から）・TRZ　西壁セクション・マウンド状遺構（南から）
図版12　SK18・19　完掘状況
図版13　SK23・24　遺物出土状況・SK36・３面目遺構面完掘
図版14　SK41・45　遺物出土状況
図版15　遺物出土状況（土器）
図版16　木製品出土状況
図版17　SD４　検出状況・調査に参加した人々
図版18　試掘調査出土遺物
図版19　SK１・２・４　出土遺物
図版20　SK９・11・14・17　出土遺物
図版21　SD１　出土遺物
図版22　マウンド２　出土遺物
図版23　SK20・21　出土遺物
図版24　SK23～27　出土遺物
図版25　SK33～38・TRZ・土器集中　出土遺物
図版26　SK39・41・SD４　出土遺物
図版27　SD４　出土遺物
図版28　出土遺物　－木製品－

第Ⅰ章　調査の経緯及び方法

第１節　調査の経緯

本調査は野市町（現香南市野市町）中山田地区農業集落排水事業[1)]の処理施設建設に伴う記録保存のための緊急発掘調査である。

平成14年度に、中山田地区農業集落排水事業が計画された。事前に事業区域内の埋蔵文化財の有無を確認し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、野市町（現香南市）教育委員会が主体となって試掘調査が行われた。

調査対象地内に14ヶ所のトレンチを設定、調査の結果、調査対象地の西側に弥生時代後期末の土器を確認、また、当該期の土器が出土する溝状及び円形の平面プランを持つ遺構も検出した。試掘調査期間は平成14年３月18日から３月28日にかけてであり、調査面積は約120㎡である。

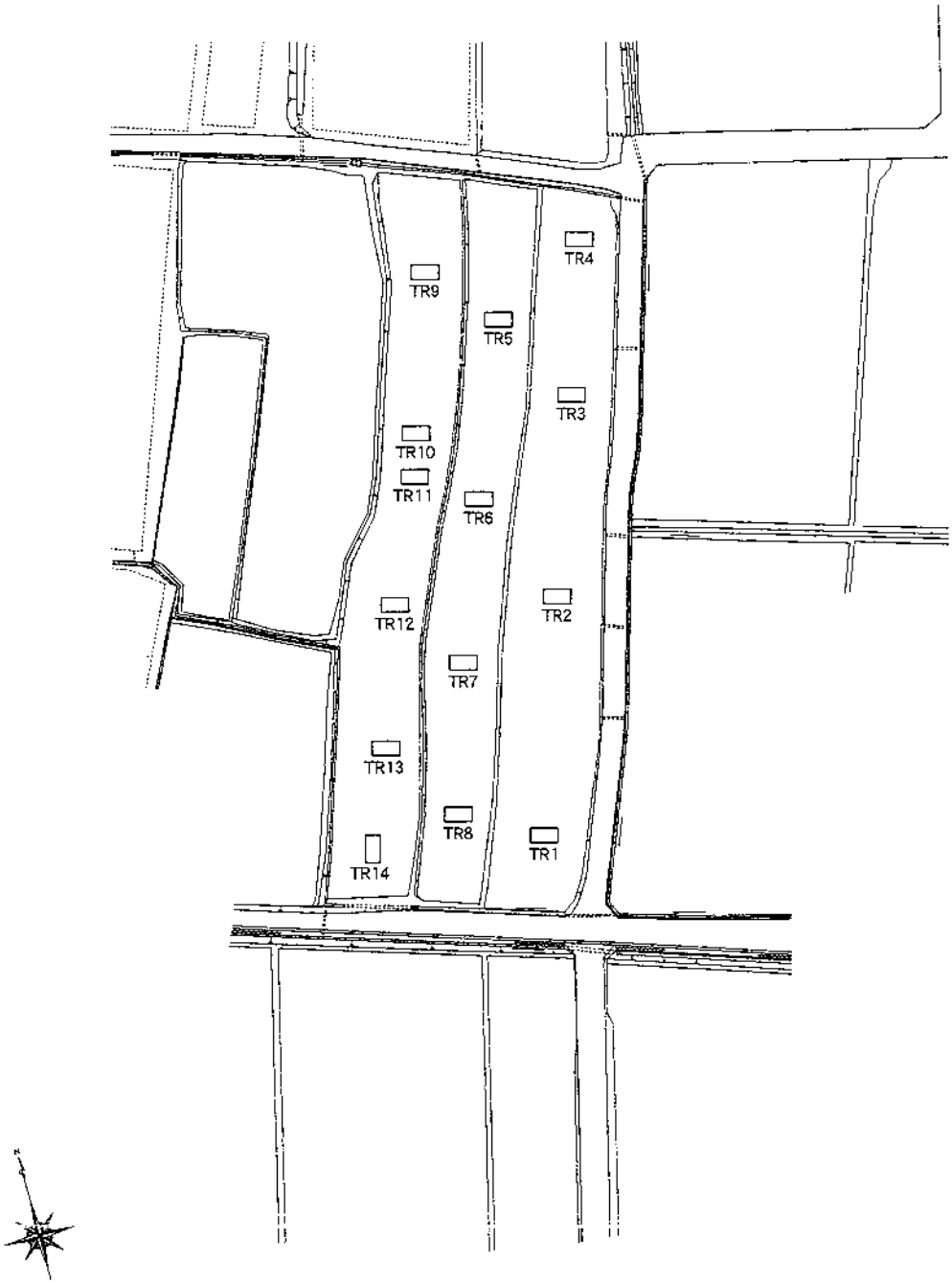
試掘調査の結果を受けて、平成14年度に本発掘調査の範囲を確定、平成14年５月13日から８月30日にかけて、調査対象面積4,670㎡のうち、約2,000㎡について本発掘調査を実施した。試掘調査対象地外であった隣接する西側の土地についても、今後開発の予定が入るということ、試掘調査地点より標高が高いという立地条件を考慮し、遺構・遺物の残っている可能性は極めて高いと判断、本発掘調査の範囲に含めた。

1）農業集落排水事業は農林水産省による下水道整備事業であり、平成14年当時、国の補助金50％で県負担が5％、残りを起債により地元市町村が負担していた。国土交通省の下水道設置基準に満たない農村地帯における下水道整備を推進する上で重要な事業だった。他に漁業集落環境整備事業・林業集落排水事業（ともに管轄は農林水産省）など、都市部以外の集落での下水道整備が進められてきた。

第１図　香南市及び兎田柳ヶ本遺跡位置図

第２節　試掘調査

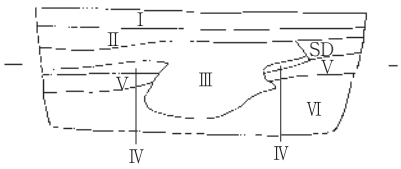
調査対象地内に14ヶ所の試掘トレンチを設定した（第2図）。調査対象地の東側から着手し、重機及び手掘りにより遺構・遺物の有無を確認する。TR1～TR9までは遺構・遺物ともに確認できなかったが、調査区西側のTR10から弥生時代後期末の土器片が出土した。これらの土器片は検出した遺構から出土したもので、遺構の平面プランは溝状のものと円形のものが確認された。隣接するTR11からも同じような遺構と土器が出土、周辺に集落の存在が予想された。



第２図　試掘トレンチ位置図（S ＝ 1/1,000）

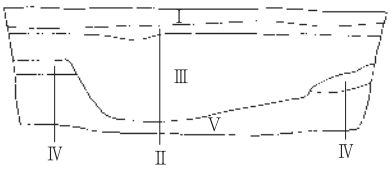
試掘トレンチの中でTR1・4・8・12～14からは近現代の陶磁器・瓦片など数点の遺物が確認されたものの、遺構は検出されていない。遺物が集中して出土し、遺構が検出されたのはTR10と11の周辺からである。出土遺物はいずれも弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてのタタキ目をもつ土器である。TR10～14の堆積状況について図3に示す。

DL＝9.50m



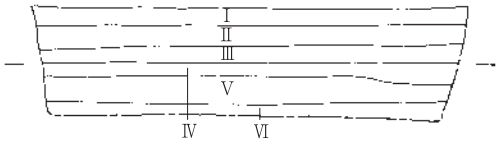
TR10　南壁

Ⅰ　表土
Ⅱ　灰茶色シルト質土
Ⅲ　黒色粘質土に橙色粘土・灰色粘土が混じる
Ⅳ　灰色粘質土に茶色粘土が混じる
Ⅴ　橙色粘土
Ⅵ　灰色粘土



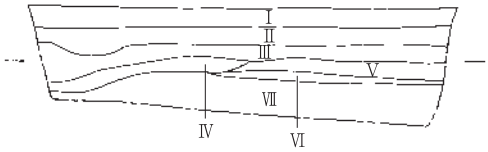
TR11　北壁

Ⅰ　表土
Ⅱ　灰茶色シルト質土
Ⅲ　黒色粘質土に橙色粘土・灰色粘土が混じる
Ⅳ　橙色粘土
Ⅴ　灰色粘土



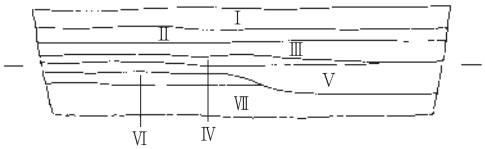
TR12　北壁

Ⅰ　表土
Ⅱ　灰茶色シルト質土
Ⅲ　茶褐色粘質土
Ⅳ　橙色粘土
Ⅴ　灰色粘土に黄色粘質土が混じる
Ⅵ　灰色粘土



TR13　北壁

Ⅰ　表土
Ⅱ　灰茶色シルト質土
Ⅲ　茶褐色シルト質土～砂質土
Ⅳ　橙色シルト質土～砂質土
Ⅴ　灰茶褐色シルト～粘土
Ⅵ　濃茶褐色粘土
Ⅶ　灰色粘土



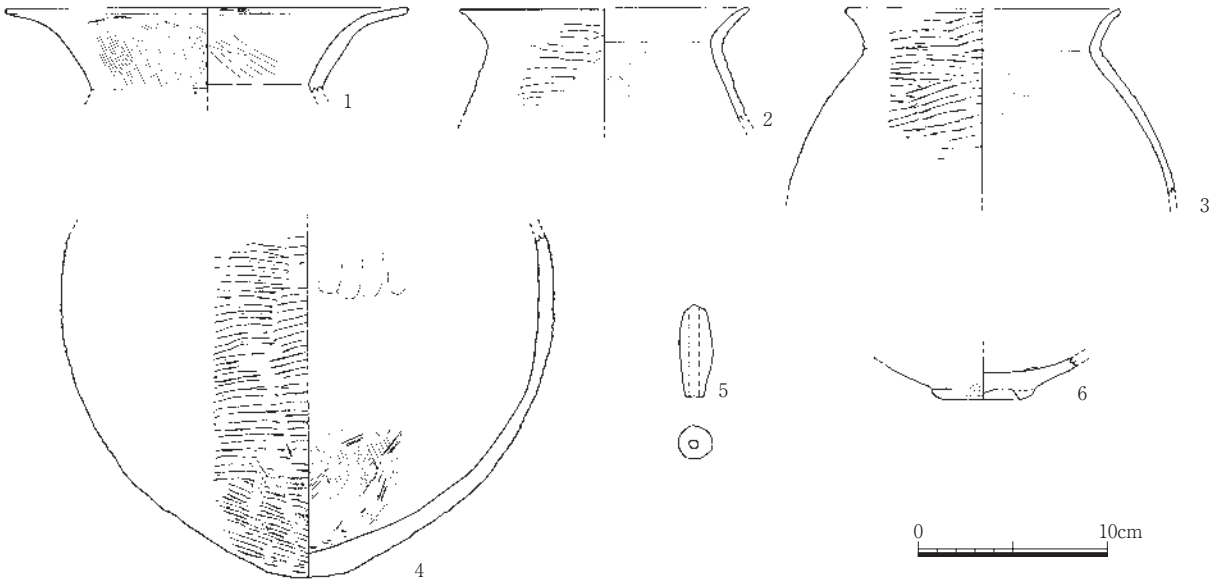
TR14　東壁

Ⅰ　表土
Ⅱ　灰茶色シルト質土
Ⅲ　淡灰色粘土
Ⅳ　灰色粘土に淡黄色砂岩が混じる
Ⅴ　橙色粘質土
Ⅵ　灰色粘土に淡黄色砂岩が混じる
Ⅶ　灰色粘土

0　2m

第３図　試掘トレンチ TR10～14セクション図（S=1/80）

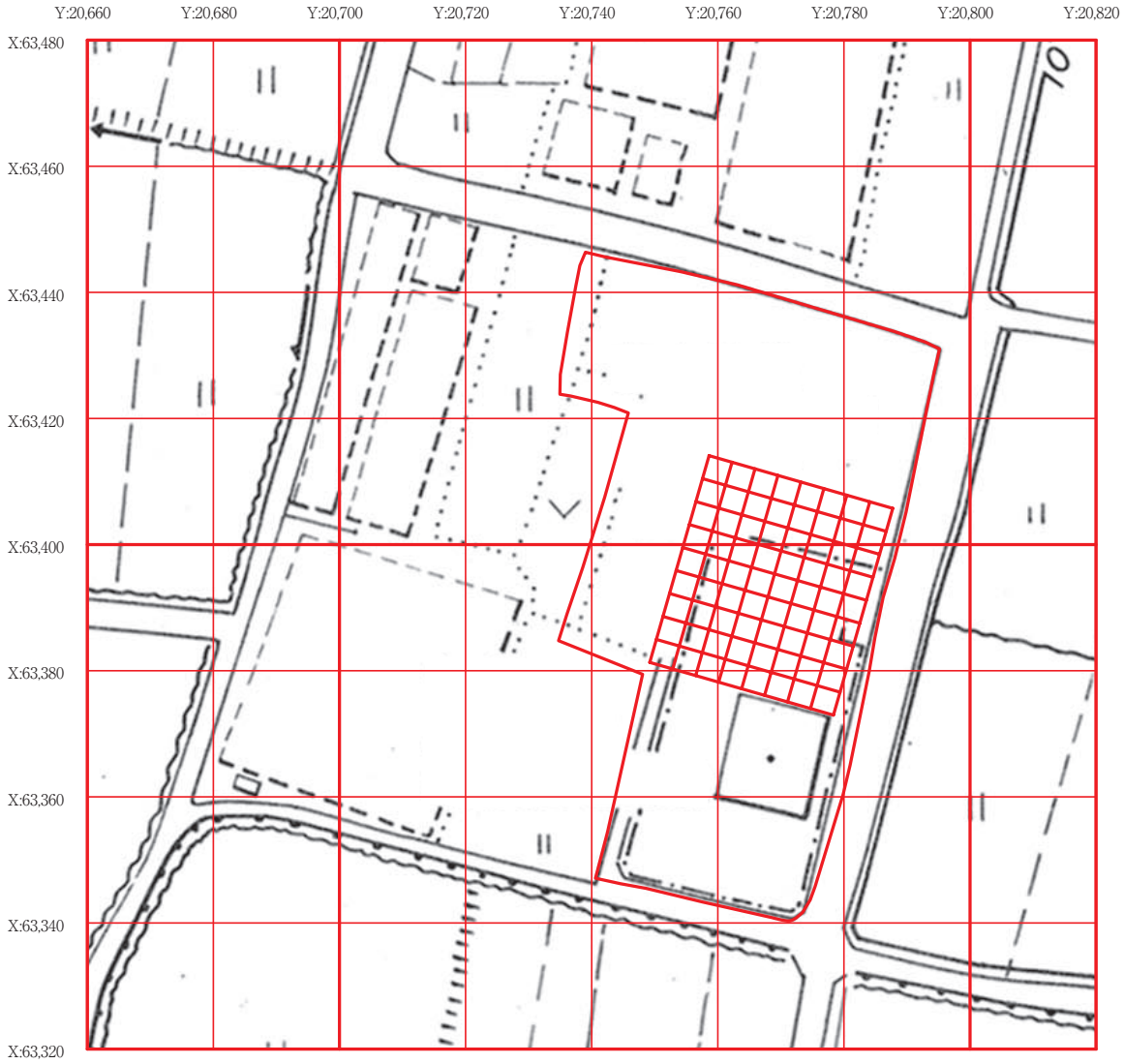
第4図が図示し得た遺物である。1・4は壺形土器であり、2・3が甕形土器、弥生時代終末から古墳時代はじめにかけての遺物である。1～4はTR10 と11の間から出土しており、周辺に当該期の遺構の広がりが予想される。1はラッパ状に大きく開く壺の口縁で、口唇は面をなしている。2・3の甕はくの字状に強く屈曲する頸部を持ち、外面には水平方向のタタキ目のみを残す。口縁はナデにより仕上げており、丸みを帯びている。4の壺底部は、丸底に近いものの、底面付近にわずかに平坦面をのこしている。底面方向からのタタキ目が観察され、底面付近のみハケ調整がある。5はTR12から出土した管状土錘で、弥生時代以降の遺物だと考えられるが詳細な時期は特定できない。6は近世の唐津灰釉皿の底部で、TR14から出土している。高台の内外面はケズリにより造り出し、外面は露胎している。陶磁器や瓦片など、近世以降の遺物（細片）が確認されるものの、遺構は形成されておらず、遺跡周辺からの流れ込みによるものだと考えられる。



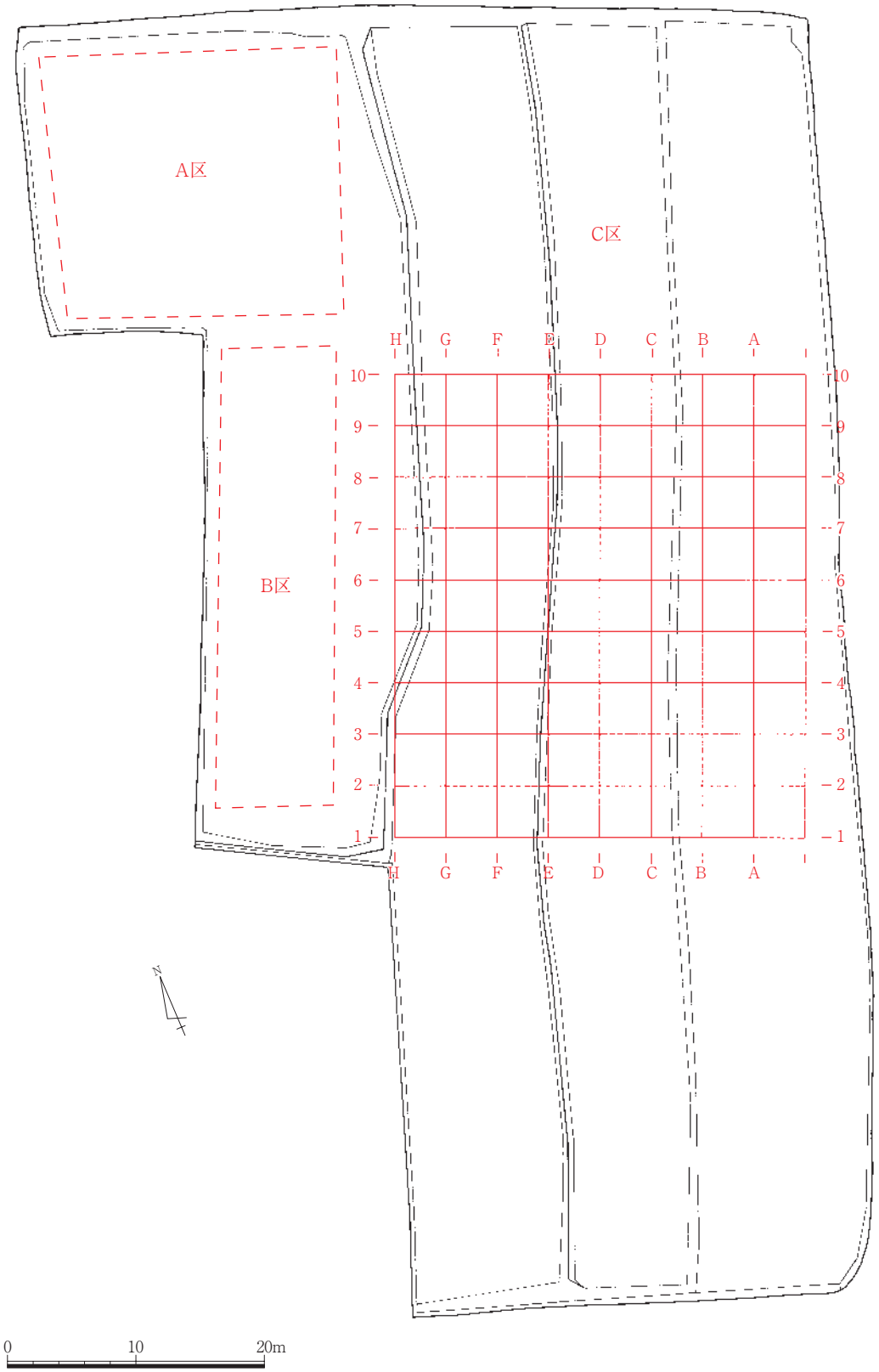
第４図　試掘調査　出土遺物実測図（S=1/4）

第３節　調査の方法

調査対象約2,000㎡についてＡ～Ｃ区の３つの調査区を設定した。調査の手順としては、耕作土、包含層直上まで重機を用いて堆積土を除去した後、包含層掘削、遺構検出、遺構埋土掘削を手作業で進める。Ｃ区については、水田等周辺の地形に即して任意に設定した座標軸に基づいて４ｍ方眼をかけ、グリッド№を付し、地点の記録及び実測を行った。測量杭には東から西方向へ向かって順番にＡからＨ、南から北方向へ向かって順番に１から10の番号を付し、北西端の杭番号を４ｍグリッドの呼称とする。平面実測及び土層断面図については、縮尺20分の１を基本とし、状況に応じて10分の１等、他の縮尺を用いた。第５－１図に示す公共座標は世界測地系に即した座標であり、今回設定した座標軸は真北より東方向に16度傾いている。



第５－１図　調査区の位置と公共座標（S=1/1,000）



第５－２図　調査区の位置と設定した４ｍ グリッド（S=1/500）

第４節　調査の経過（調査日誌抄）

平成14年

5/13　重機等搬入、発掘道具準備

5/14　草刈り、北側上段表土除去開始。上段をＡ区・Ｂ区、下段をＣ区と調査区の設定を行う。

5/20　調査区北側西から表土剥ぎ。Ａ区に東西にトレンチを入れる。遺物なし。表土下20cmから粘土、Ⅱ層（表土下）は埋め立て土か？瓦質土器・土師器出土。

5/21　上段（Ａ区）表層を剥ぐ。東西に2本のトレンチ。Ⅱ層は灰色シルトに黄褐色砂岩がブロック状に入る。

5/22　Ａ区Ⅲ層除去。

5/24　Ａ区、黄橙色粘質土層まで下げていく。自然流路（SR1）検出。SX1検出。埋土3層、Ⅰ：茶褐色シルトに砂岩混じる　Ⅱ：灰～黄灰色粘質土　Ⅲ：砂層。

5/27　Ａ区、SX1とSX2検出。自然流路（SR2・3）、不定方向に走るが、北西から南東方向を指向している。遺物出土せず。Ｂ区、表土剥ぎ開始。

5/28　SR2・3の調査。SX2完掘（遺物なし）。Ｂ区表土剥ぎ、Ａ区西壁セクション。

5/29　SR2の調査。Ａ区SR1～3、SX1・2。北西から南東に向かって標高が下がっている。流路も曲がりくねっているが、北西から南西に向かって走っている。遺構に関する遺物は出土せず、Ａ区調査終了。SR2平面図。

5/30　Ｂ区調査開始。南北方向と東西方向のＬ字に交差するトレンチを設定、東隣のＣ区も同様のトレンチを設定する。Ｃ区南北方向トレンチで試掘調査の時と類似する形態の遺構確認。

5/31　Ｃ区で遺構検出、周辺調査後に遺構番号をつける予定。試掘調査で遺物が確認できなかった部分にも遺構が延びているため、調査区を拡張する。また、東に向かう溝確認。試掘調査ではたまたま確認できなかっただけで、周辺への遺構の広がりが予想される。

6/3　Ｃ区、遺構検出面まで掘削。遺構埋土は黒褐色シルト質粘土。深掘りすると下層の灰色粘土層から出土する遺物もある。遺構埋土と検出面の土層が遺構の平面プランの検出が難しい。

6/4　雨が降ると遺構面はぐちゃぐちゃ、一日放置すれば地割れを起こす。全体で遺構を検出したいが、困難である。SD1・SK1から順番に調査を進めていく。

6/5　Ｃ区、SD1の調査。SD1の下に別の溝（SD2）を確認する。

6/6　Ｃ区の遺構検出を進める。3つの層（黒褐色シルト層、灰黄色粘土層、黒色シルトに橙色シルトが混じる層）の関係をはっきり捉えることが課題となっている。上面遺構と下面遺構がはっきりと分かれるのが確認できた。

6/7　サブトレを入れて層の確認を行う。茶褐色シルト質粘土が埋土の遺構の下に遺構がある。

遺構の切り合い確認。SK８を完掘、底面に土器あり。その下からSK９を検出。

6/10　SK５・７・９・11・12の調査を進める。埋土が黒褐色シルト層の遺構から順番に掘る。台風の接近に備え、遺物の取り上げを行う。

6/12　SK12完掘

6/13　Ｃ区北へ拡張。試掘TR北側に溝検出。

6/14　SK７の下層からSK15を確認する。Ｃ区の北側には、一部を除き遺構はほとんどない。

6/17　出原恵三氏（高知県埋蔵文化財センター）来跡、調査状況を見ていただく。SK16の調査。Ｂ区・Ｃ区と分けていたが、両区をまとめてＣ区として調査を進める。サブトレを入れて確認しながら遺構の平面プランを検出することを心がける。

6/19　SD５（上）・SK16・SD５（下）について埋土の違い・切り合い関係を確認、古い順にSD５（下）→SK16→SD５（上）となる。SD５（下）とSD５（上）は別の遺構である。SK17・18・19については地形的にくぼんだところに黒褐色シルトが堆積したと考えられる。

6/21　SD４が東へ延びていることを確認。SD５（上）とSK16が一連の遺構であり、SD５（下）が別遺構だと捉え直す。

6/27　層の確認と遺構検出のため、トレンチＺを設定する。トレンチＺからは集中１・土器Ａ・土器Ｂとまとまって出土する。兎田の山にある大岩はこの現場から北方向にある。磁北でちょうど北方向に当たることが確認できた。

6/28　出原恵三氏来跡。TR－ＹとTR－Ｚ、南北方向のサブトレを２本入れて調査を進める。TR－Ｚ西壁セクション。

7/2　Ｃ区水抜き、西側掘削。マウンド状の部分確認。

7/3　マウンドの検出開始。マウンド１は大きさがほぼ把握できた。マウンド２・３はサブトレセクションの観察を行うとわかるのだが、様々な土が混ざっているためわかりにくい。

7/4　池澤俊幸氏（高知県埋蔵文化財センター）来跡。中学生一日体験。Ｃ区サブトレ深掘り。混じり粘土上面検出。

7/5　出原恵三氏、山本純代氏（高知県埋蔵文化財センター）来跡。SK７・15の掘り残し部分から小型の壺（土器Ｃ）出土。

7/11　本日、水抜き！

7/12　サブトレ30を入れる。SK15の調査。ものすごく深いので、半裁をして調査する。底に土器がある。

7/16　SK31の調査。埋土は黒色腐葉土で底から土器Ｄが出土している。

7/17　SK16・SD5の調査。西側の落ち込みより、木製品（鋤）出土。土器もまとまって出土。

7/23　SD5の西にあるSX10より鋤が出土、南側に柄のついた鋤、その間に柄のみの出土確認。廃棄された状態ではない。

7/24　高知県文化財保護課現場視察。SX10から鋤3が出土。SD5、SX10・11の調査を進める。

7/26　SK10の調査。

7/29　SK10底面から土器が出土。廃棄されたような状況である。土器集中部も確認するものの、別遺構の可能性もある。

7/30　SK10西側にSD11検出。SD1の続きと考えられる土器が出土する。

7/31　SK11の下を調査。黄色と灰色粘土が埋土となる遺構（周溝墓か？）を検出する。溝だと考えているが、SK40とSK41に分けて調査を進めることにする。

8/1　出原恵三氏来跡。SK40とSK41は、名前はSKとしたが、東西に長い溝である。取り上げ時にこの遺構番号で行ってきたため、このまま調査を続け、整理作業段階で修正する。

8/2　SK40・41完掘。SK42・43（白緑砂～シルト層に掘り込まれる。埋土は灰・黄粘土-黒色粘土-灰色粘土に腐葉土。）を検出。SK40・41下に埋土が黒色粘土のSDを検出する。SD1下とSK40・41は同じ遺構である。

8/5　溝の調査。

8/8　SD10平面図、鋤取り上げ。草をしいた跡のようなものの写真。晴れた日に土坑・溝すべての平面図及びレベルをとること。最終に全体の遺構写真を撮る。

8/19　発掘調査終了。掃除。写真撮影。

8/20　写真撮影。

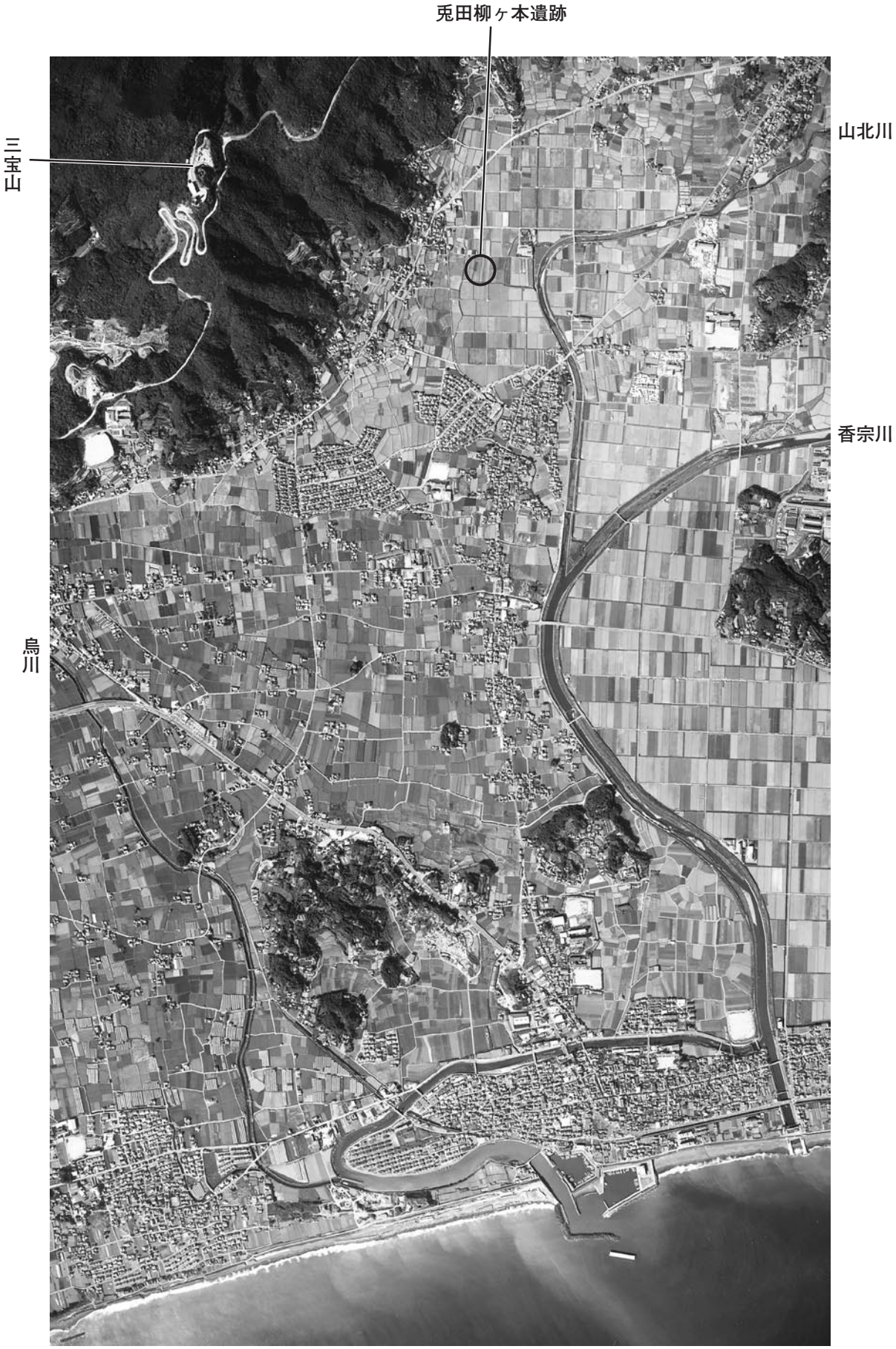
9/1　14：00より現地説明会。

9/2　埋め戻し作業。

表1　新旧遺構対照表

※調査日誌抄は調査時点の状況を可能な限り伝えるため、旧遺構名のまま掲載している。調査後に遺構名を変更、整理作業は変更後の新遺構名により進められた。

旧遺構	新遺構	旧遺構	新遺構	旧遺構	新遺構	旧遺構	新遺構	旧遺構	新遺構
SK 1	SK11	SK14	SK 3	SK27	SK41	SK37	SK36	SD10-2	SD4-2
SK 2	SK10	SK15	SK20	SK28	SK26	SK38	SK27	SD10-3	SD4-1
SK 3	SK12	SK17	SK 4	SK29	SK21	SK42	SK46	SD 3	SD5
SK 4	SK16	SK18	SK 7	SK29	SK33	SK43	SK47	SX10	SK18
SK 5	SK 6	SK19	SK 8	SK30	SK34	SK60	SK45	SX11	SK19
SK 6	SK 5	SK20	SK42	SK31-a	SK23	SD 1	SD1-1	-	SK38
SK 7	SK 2	SK21	SK37	SK31	SK24	SD 3	SD3	-	SK43
SK 8	SK14	SK22	SK31	SK32	SK30	SK40/SD 4-1	SD2-1	-	SK44
SK 9	SK15	SK23	SK35	SK33	SK25	SK41/SD 4-2	SD2-2	-	P1
SK10	SK17	SK24	SK28	SK34	SK32	SD 5	SK 1	-	P2
SK11	SK13	SK25	SK39	SK35	SK22	SD11	SD1-2	-	P3
SK12	SK 9	SK26	SK40	SK36	SK29	SD10-1	SD4-3	-	P4
								-	P5
								-	P6



兎田柳ヶ本遺跡より南　平野部の景観

第Ⅱ章　遺跡周辺の地理・歴史的環境

第１節　地理的環境

兎田柳ヶ本遺跡は高知県中央部に広がる高知平野の東端、香南市野市町（旧香美郡野市町）字柳ヶ本に所在する。平成18年３月に旧香美郡の香南五ヶ町村（赤岡町･香我美町･野市町･夜須町･吉川村）が合併、面積126.49㎢、人口約３万4,000人の香南市が誕生した。市域の西側には物部（ものべ）川が、東側には香宗（こうそう）川、夜須（やす）川が流れ、これらの河川により形成された扇状地や沖積平野など下流域には肥沃な平野が広がっている。平野部には標高100ｍに満たない低丘陵が点在、丘陵や自然堤防に沿って集落が点在する里山景観を呈している。

野市町域を中心に開発・都市化が進行、高規格道路である南国安芸道路の建設、平成14年には第３セクターによる鉄道ごめんなはり線が開通するなど､社会資本の整備も進みつつある。一方、市内では棒踊りや手結盆踊りなど伝統的な祭礼が継承されている地区も多く、民俗文化を次世代に伝えることが可能な地域社会が残っている。

香南市の南部は太平洋に面する海岸地帯であり、河川下流域には浜堤が形成されている。この浜堤上に発達した集落である赤岡から岸本にかけての海岸は、かつては製塩が盛んだった。赤岡から物部川上流の大栃へ抜ける峠越えの往還が現在「塩の道」として整備されている。

香南市の東、夜須川河口付近にある手結港は日本最古の掘り込み港である。手結港の東には、四万十帯の露頭が観察できる住吉海岸がある。ここは、日本列島の誕生がプレートテクトニクス理論により実証された場所として知られている。

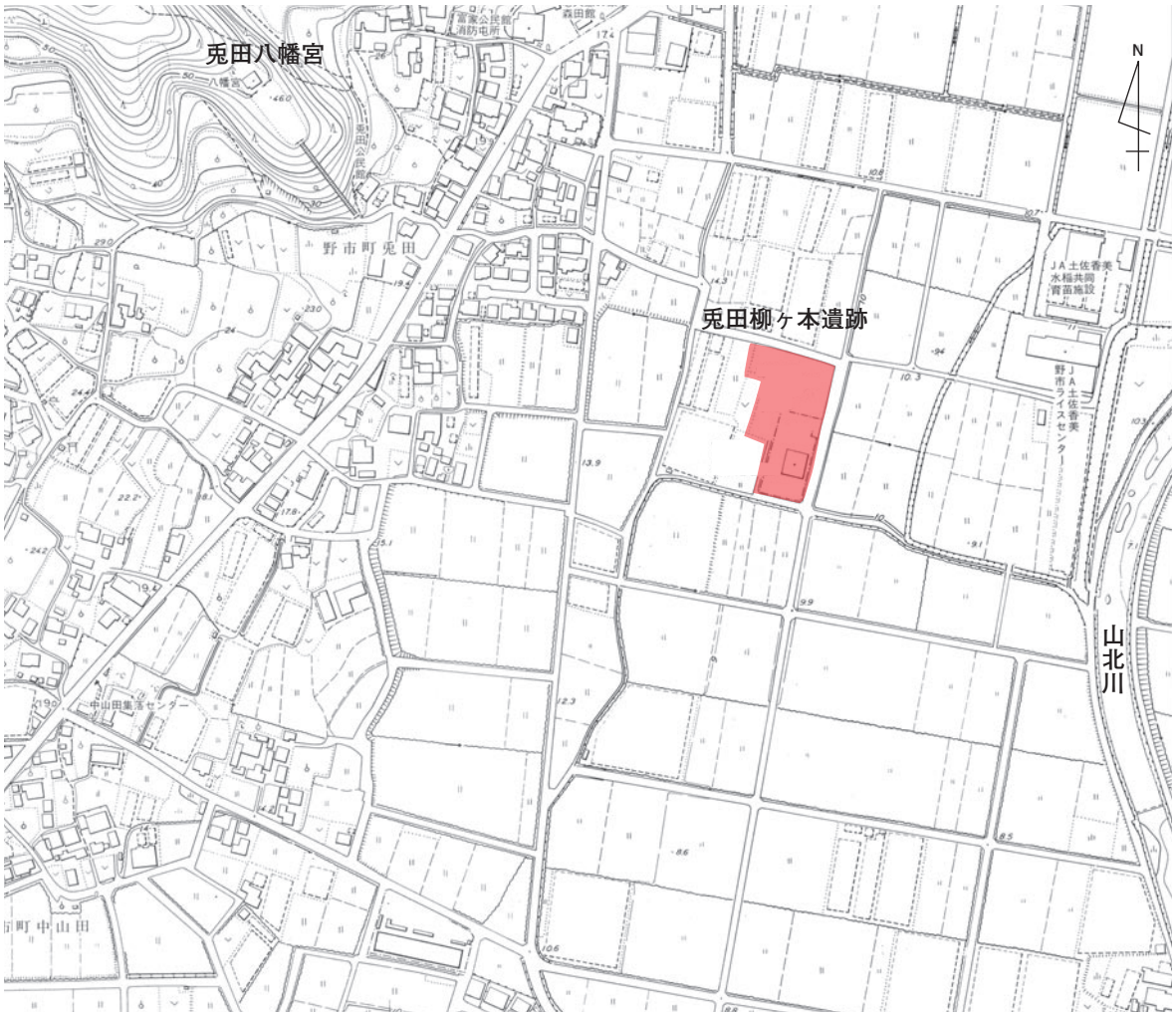
第６図　兎田柳ヶ本遺跡周辺の旧地形（昭和８年）

遺跡の西側には、県内でも有数の温州みかん生産地である香我美町山北地区がある。季節風をさえぎる南西に開く谷状の地形もあって、高知平野の中でも温暖な気候を利用して果樹の生産を盛んに行っている。香南市の平野部は年平均降水量2,276㎜、日照時間2,207時間、年平均気温16.2℃と、高知県内でも温暖で日照時間が長く、降水量は少ない地域である。

遺跡の南西には物部川の下流域に発達した古期扇状地が広がる。この扇状地は野市台地と呼ばれ、近世になるまで原野が広がっていたが、近世以降の開拓によって耕地化された。高知平野の東

端であり、一般に香長平野と呼ばれる平野の東半に当たる。野市台地は、秋葉山系の西端部の三宝山の山麓部でさえぎられた物部川の堆積物が南東側へ向かって放出されたためできた扇状地性堆積物によって形成されたものである。遺跡の西側3㎞の地点には物部川が、東側200m には香南市東半分の沖積平野を形成する香宗川の支流山北川があり、北側には秋葉山系の尾根が迫る。尾根が平野部に没する山麓から300mほど平野へ下った水田地帯にあり、新期扇状地の末端部と山北川によって形成された谷底平野の境界付近に位置している。遺跡から香宗川の河口、海岸線までは約4.5㎞、遺跡付近の標高は9～10m前後である。

北側の尾根上には仏像構造線が南西方向からから北東方向にかけて走っている。遺跡から見上げる尾根に連なる急斜面は、仏像構造線の断層によってつくられたものである。周辺は地帯構造的には四万十帯北帯にあたる。西1㎞にある標高213mの山が三宝山で、中生代の地質構造帯「三宝山帯」の名前の由来となった山である。尾根上より北部が秩父帯南帯（三宝山帯）であり、尾根に沿って石灰岩地帯が広がっている。北西約4㎞には鍾乳洞として著名な龍河洞がある。



第７図　兎田柳ヶ本遺跡周辺の地形（S=1/5,000）

第２節　歴史的環境

遺跡の西側には土佐３大河川の一つ物部川が、東側には香南市東半の沖積平野を形成する香宗川があり、遺跡分布はこの２つの河川沿いに集中している。遺跡の200m ほど東には香宗川の支流である山北川が流れている。ここでは、香南市の中で物部川と香宗川に囲まれた範囲の遺跡を中心に周辺の遺跡について概観する。

香南市内の縄文時代以前の遺跡の実態はほとんどわかっていない。有舌尖頭器が採集された手結遺跡、後期の土器片が確認された拝原遺跡、晩期の貯蔵穴が確認された十万遺跡、晩期末の突帯文土器が採集された深渕遺跡の４遺跡の例が知られているが、貯蔵穴以外は１～数点の断片的な出土状況である。高知平野全域に視野を広げても、今までは縄文・旧石器の空白地帯といわれるほど縄文時代以前の遺跡の例は少なかった。近年の調査によって、旧石器時代ナイフ形石器文化期～細石刃文化期・縄文早期にかけての岩陰遺跡である南国市奥谷南遺跡、小型のナイフ形石器が確認された香美市土佐山田町新改西谷遺跡、西日本有数の縄文早期の定住跡である香美市香北町刈谷我野遺跡など､高知平野周辺に縄文時代後期をさかのぼる遺跡の存在が明らかになりつつある。近い将来、香南市域から同時期の遺跡が確認される可能性は高い。

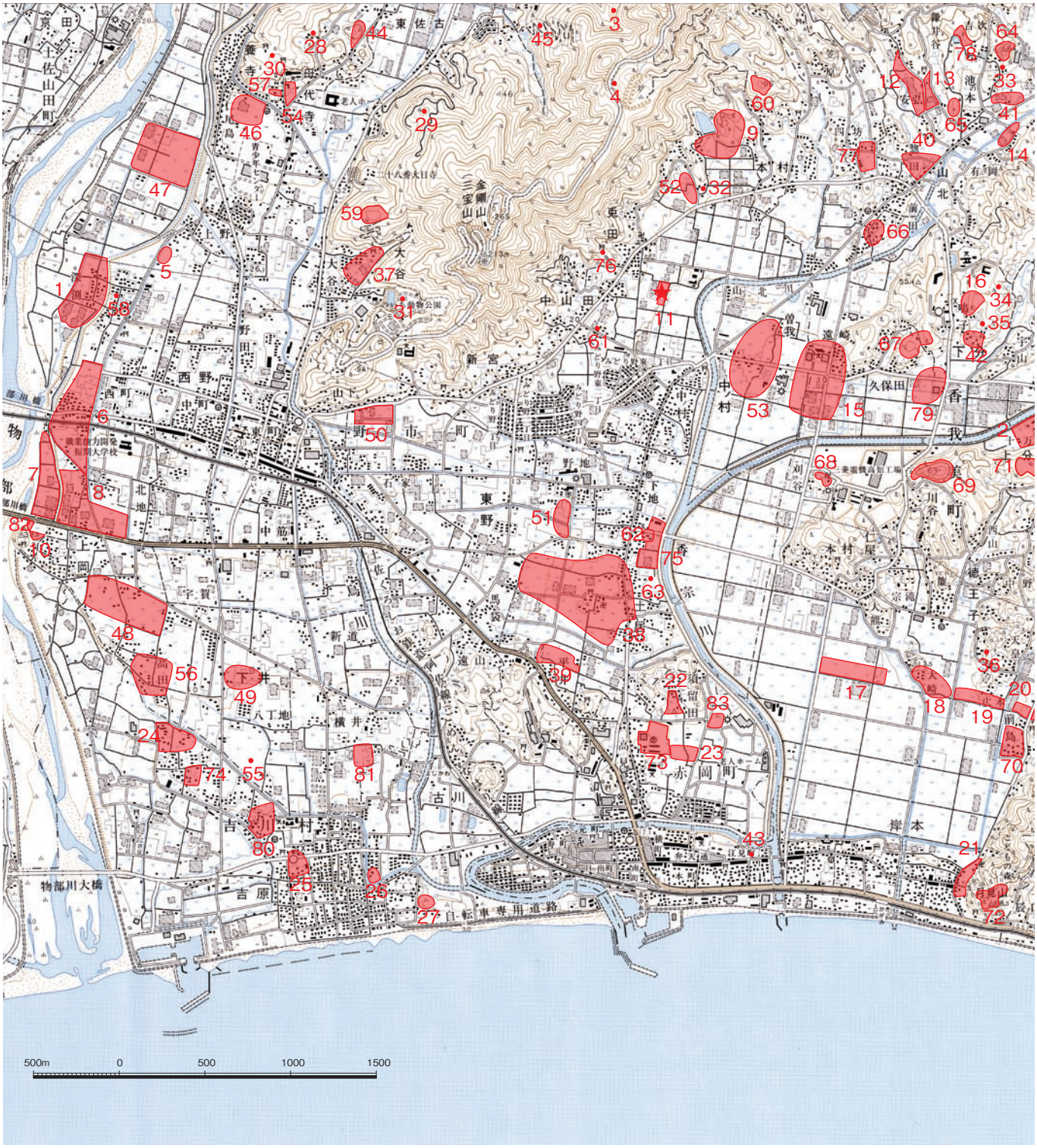
2008年、高規格道建設に伴い、物部川以東で確認例のなかった弥生前期前半の遺跡（徳王子大崎遺跡）が香南市域香宗川下流の沖積平野微高地で見つかった。前期の早い段階でも物部川左岸に集落が展開していたことを示す遺跡として注目を集めている。出土した土器は前期前半の西見当Ⅰ式（畿内Ⅰ様式古段階併行）であり、土坑も検出されている。

弥生時代前期末になると、下分遠崎遺跡、上岡遺跡、北地遺跡、拝原遺跡、十万遺跡など、集落数は急増する。南西約５㎞、物部川の対岸にある弥生時代の拠点集落田村遺跡群からの分村による集落数の増加だと考えられている。下分遠崎遺跡ではカツオの脊椎骨やツキノワグマ、シカ、イノシシ、イヌなど様々な魚骨・獣骨、多様な木製品、遺構出土の炭化米から熱帯ジャポニカの DNA が検出され注目を集めるなど、自然科学分析により多くの知見がもたらされた。

下分遠崎遺跡や北地遺跡などいくつかの遺跡では集落が前期末から弥生中期前半･中葉にかけて、継続して営まれるが、前期末のみの短命な遺跡も多い。香南市内からは中期中葉から後半（Ⅲ様式中段階からⅣ様式古段階）にかけての遺跡はほとんど確認されていない。

中期末から後期のはじめにかけては、兎田柳ヶ本遺跡の北方約１㎞の地点に、高地性集落（丘陵性集落）である本村遺跡がある。この遺跡からは、竪穴住居７棟、段状遺構など当該期の高地性集落の典型的な遺構群とともにガラスの勾玉も出土している。本村遺跡は標高30～40mに立地、土器は凹線文土器主体である。本村遺跡の北東に連なる山稜上には高地性集落である笹ヶ峰遺跡が、日本屈指の鍾乳洞龍河洞内には龍河洞遺跡が、同時期に営まれるなど、周辺一帯の土器の分布状況からもこの地域の集落が当該期には標高の高い地点に形成されていたことがわかる。

物部川西岸の物部川と香宗川に挟まれた香南市の西半部は青銅器についても注目される地域である。遺跡の北西約300mの地点には、絵画銅剣で知られる兎田八幡宮があり、約2.5㎞西方の物部川段丘崖上面には、銅鏡の出土した北地遺跡と銅矛の再加工品が出土した西野ルノ丸南Ａ遺跡があ



第８図　兎田柳ヶ本遺跡周辺の主な遺跡（S=1/30,000）

表２　兎田柳ヶ本遺跡周辺の遺跡（時代別）

縄文時代	
－集落・包蔵地－	
1	深渕遺跡
2	十万遺跡

弥生時代	
－集落・包蔵地－	
3	鬼ヶ岩屋洞穴遺跡
4	笹ヶ峰遺跡
1	深渕遺跡
5	西上野遺跡
6	西野遺跡群
7	下ノ坪遺跡
8	北地遺跡
9	本村遺跡
10	上岡遺跡
11	☆兎田柳ヶ本遺跡
12	宮の西遺跡
13	宮ノ前遺跡
14	北川原遺跡
15	下分遠崎遺跡
16	棒ヶ谷遺跡
2	十万遺跡
17	花宴遺跡
18	徳王子大崎遺跡
19	徳王子広本遺跡
20	徳王子前島遺跡
21	クノ丸遺跡
22	ハザマ遺跡
23	御所の前遺跡
24	野口遺跡
25	浜口遺跡
26	南中曽遺跡
27	住吉砂丘遺跡

古墳時代	
－古墳－	
28	日吉山古墳群
29	溝渕山古墳
30	父養寺古墳
31	大谷古墳
32	大崎山古墳
33	池の本古墳
34	棒ヶ谷古墳
35	鳴呼１号墳
36	徳善天皇古墳

古墳時代	
－集落・包蔵地－	
1	深渕遺跡
6	西野遺跡群
7	下ノ坪遺跡
37	大谷遺跡
38	東野土居遺跡
39	平井遺跡
11	☆兎田柳ヶ本遺跡
40	岡ノ芝遺跡
12	宮の西遺跡
13	宮ノ前遺跡
41	立花遺跡
14	北川原遺跡
42	鳴呼遺跡
22	ハザマ遺跡
23	御所の前遺跡
43	江見遺跡
24	野口遺跡
25	浜口遺跡
26	南中曽遺跡

古代	
－集落・包蔵地－	
46	母代寺遺跡
47	深渕北遺跡
1	深渕遺跡
6	西野遺跡群
7	下ノ坪遺跡
8	北地遺跡
48	高田遺跡
49	下井遺跡
50	山下遺跡
51	東野遺跡
37	大谷遺跡
52	西ノ谷遺跡
53	曽我遺跡
38	東野土居遺跡
39	平井遺跡
54	母代寺土居屋敷遺跡
55	八丁地遺跡
56	下高田遺跡
40	岡ノ芝遺跡
14	北川原遺跡
42	鳴呼遺跡
2	十万遺跡
19	徳王子広本遺跡
22	ハザマ遺跡
23	御所の前遺跡
24	野口遺跡
－窯跡－	
44	亀山窯跡
45	アゴデン白岩窯跡

中世	
－城館・寺社跡－	
57	城八幡城跡
58	深渕城跡
59	大谷城跡
60	富家城跡
61	中山田土居城跡
62	香宗城跡
63	宝鏡寺跡
64	吉次城跡
65	城山城跡
66	前田城跡
67	中城跡
68	刈谷城跡
69	国吉城跡
70	徳善城跡
71	十万城跡
72	姫倉城跡
73	須留田城跡
74	吉原城跡
－集落・包蔵地－	
46	母代寺遺跡
47	深渕北遺跡
1	深渕遺跡
6	西野遺跡群
49	下井遺跡
38	東野土居遺跡
75	香宗遺跡
76	兎田八幡宮遺跡
54	母代寺土居屋敷遺跡
56	下高田遺跡
50	山下遺跡
77	四坊遺跡
40	岡ノ芝遺跡
78	仁王堂遺跡
14	北川原遺跡
2	十万遺跡
18	徳王子大崎遺跡
19	徳王子広本遺跡
79	久保田遺跡
21	クノ丸遺跡
22	ハザマ遺跡
23	御所の前遺跡
24	野口遺跡
80	八反遺跡
81	小屋敷遺跡

近世	
－旧堤防跡－	
82	上岡北遺跡

近代	
－窯跡－	
83	大東遺跡

る。この段丘崖の下段面からも後期前半の住居（下ノ坪遺跡・上岡遺跡）が確認されており、下ノ坪遺跡からは高知平野最大級の竪穴住居１棟から約80点にものぼるガラス小玉が出土している。段丘崖の上下段に分かれて分布するこれらの遺跡は弥生後期前半に一連の集落を形成していたものと考えられる。

弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては、深渕遺跡・西野遺跡群・北地遺跡・幅山遺跡・野口遺跡・南中曽遺跡など集落数もさらに増加する。幅山遺跡・深渕遺跡では竪穴住居と土器棺墓も確認されるなど、ある程度の範囲について調査されているのだが、当地域において当該期の集落や祭祀空間など様相が十分把握できるほど資料の蓄積は進んでいない。西野遺跡群・北地遺跡などの調査成果の報告が待たれるところである。これらの集落は物部・香宗の両河川流域に展開している。他地域からの搬入土器の存在からも河川が当時の交通に果たしていた役割を推察することができる。

古墳時代前期の古式土師器Ⅱ期以降、高知平野では遺跡の確認例がほとんどなくなるなど、遺跡

数急減の可能性が指摘されている。その中で拝原遺跡は古式土師器Ⅲ期（4世紀）の竪穴住居が2棟確認されており、県内でも数少ない検出例として注目される。香南市では初期須恵器の出土は確認されていない。高知平野を通じて前期古墳もほとんどなくなる。丘陵先端部に立地していた徳善天皇（花散里）古墳は5世紀代の古墳である。それ以外は後期古墳であり、6世紀後半以降に築造された古墳が大半であり、存在が明らかになっているものの現在消滅しているものも多い。

大谷古墳・大崎山古墳など発掘調査の実施された古墳もあるが、調査が十分なされておらず、詳細な時期特定のできないものも多い。溝渕古墳や日吉山古墳群・父養寺古墳（消滅）など佐古地区周辺の丘陵頂部付近に立地するもの、大崎山古墳や池の本古墳、棒ヶ谷古墳など張り出した丘陵に単独で立地するものなどがある。

古墳時代については、4～5世紀前後の様相はほとんどわかっていないが、6世紀後半から7世紀はじめにかけての竪穴住居が、深渕遺跡と下ノ坪遺跡で確認されている。いずれも作り付けカマドを持つ住居が検出され、甑が出土している。

古代の遺跡としては、先述の下ノ坪遺跡がある。奈良時代に盛行し、古代の出土遺物は硯や丸鞆、全国的にも例の少ない四仙騎獣八稜鏡等が出土している。コの字状に配置された南四国最大級の規模を持つ総柱建物が検出されており、物部川に面した立地から、奈良時代から平安時代にかけて郡衙の津として機能していた遺跡だと考えられている。深渕遺跡も同様に官衙としての役割を果たしていたと考えられており、二彩陶器、緑釉陶器、墨書土器、硯、蛇尾等が出土している。深渕遺跡には瓦窯跡存在の指摘もある。

香宗川流域にも曽我遺跡や十万遺跡など官衙関連だと考えられる遺跡が点在している。

古代の窯跡として野市町佐古周辺に亀山窯跡、アコデン白岩窯跡、香我美町徳王子に徳善古窯跡群（7世紀後半～8世紀初頭）がある。亀山窯跡で作られた瓦は平安京大極殿、藤原氏の氏寺である法勝寺に使用されていた。また、窯は平安時代末ごろ（12世紀）まで操業していたと考えられ、南には亀山窯跡に関連した集落である母代寺土居屋敷遺跡がある。

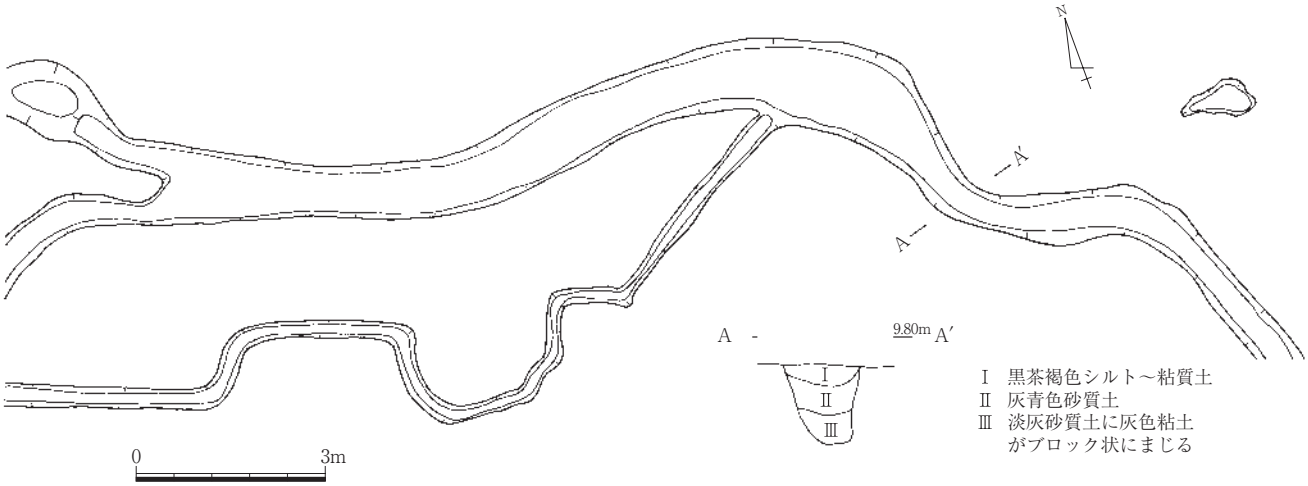
中世になると、中原秋家、秋道が地頭となり、香宗我部氏と名乗り勢力をふるった。しかし、関ヶ原合戦後山内氏入国によりその所領を失い、その後の一国一城制でその居城である香宗城は取り壊された。現在は八幡社と土塁の一部を残すのみである。その南東には香宗我部氏菩提寺の宝鏡寺跡と歴代の墓と観音堂が建っている。

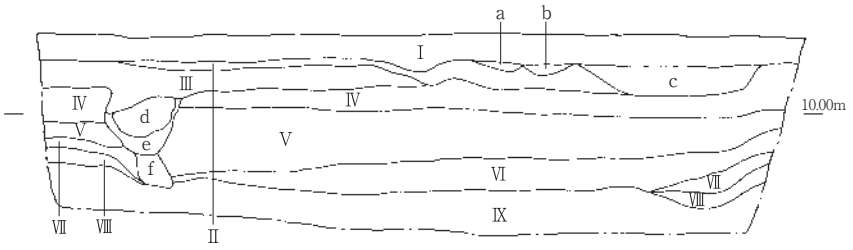
近世前期、物部川山田堰からの分水により原野の広がる野市台地の開墾が進み、豊かな穀倉地帯へと生まれ変わった。上岡北遺跡からは、物部川治水を手がけた野中兼山による築堤と推測される石積みの堤防（17世紀）が確認されている。野市町は、この旧堤防の持つ歴史的意義を認識し、工事計画を変更した。発掘された近世の堤防は埋め戻され、現地で保存されている。

第Ⅲ章　調査の成果

調査対象区の中で、一段高くなった部分をＡ・Ｂ区、下段の、試掘調査で遺物が集中したTR10・11周辺をＣ区として調査区の設定を行い、Ａ区から順番に調査を進めた。Ａ区では自然流路2条と性格不明遺構を確認したが、ほとんど遺物は出土していない。Ａ・Ｂ区では陶磁器、瓦片（近世以降）、瓦質土器、土師器が出土しているが、いずれも細片で、図示し得る遺物はなかった。検出遺構のうち溝状の遺構（SR1・2）は自然流路だと考えられるが、それ以外の遺構の性格については特定できず、形成時期も不明である。Ａ区の遺構と土層堆積状況については写真図版と第9図にまとめて示す。Ｂ区からは遺構も検出できなかった。

今回の調査で確認された遺構・遺物はＣ区から検出されたものが中心であり、第1節基本層序・第2節遺構と遺物の項ではＣ区の調査についての報告を行う。





A区　西壁セクション

Ⅰ　表土（灰色シルト）
Ⅱ　黒褐色シルト～粘質土
Ⅲ　黒褐色シルトに濃茶褐色シルトがまじる
Ⅳ　灰黄色粘質土
Ⅴ　灰色粘土～黄灰色粘質土
Ⅵ　灰色粘砂土
Ⅶ　黒褐色粘質土
Ⅷ　Ⅶ層に橙色粘質土がある
Ⅸ　黒色粘土
a　灰色シルトに茶褐色シルト
b　〃　に青灰色砂がまじる
c　明橙色シルトに1～3cm大の礫（覚乱）
d　SR2灰茶褐色砂に橙色砂岩がまじる
e　濃灰色砂質土
f　黒灰シルト～砂質土

第９図　Ａ区の遺構及びセクション図（S=1/120、1/50）

第１節　基本層序

兎田柳ヶ本遺跡の基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　表土（現耕作土）

Ⅱ層　灰色シルト層

Ⅲ層　黒茶褐色シルト～粘質土層（遺物包含層）

Ⅳ層　灰黄色粘土層（上面遺構検出面・第1段階）

Ⅴ層　灰色粘土層（中面遺構検出面・第2段階）

Ⅵ層　黒色粘土層

Ⅶ層　灰青緑色砂質土層（下面遺構検出面・第3段階）

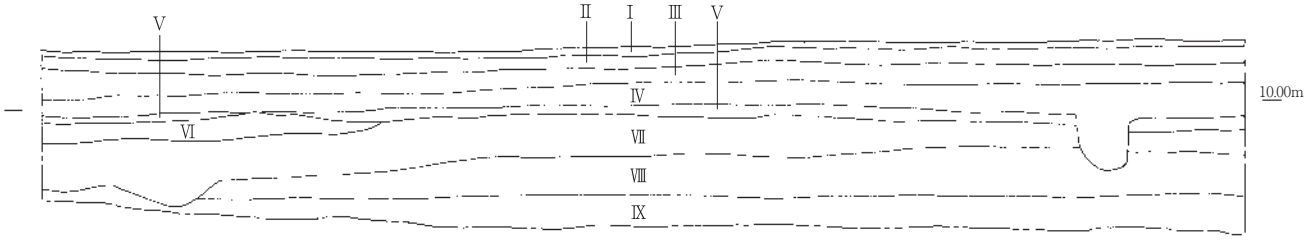
Ⅷ層　黒色粘土層

調査区東壁、西壁で堆積状況を確認した。ほぼ水平に堆積しており、粘土・シルト質粘土・シルト・砂混シルトの堆積が確認された。SK17東側に設定したトレンチでも粘土～シルトの堆積が確認されている。遺構埋土は黒色あるいは黒灰色の腐植土または粘土である。粘土、腐植土、砂が混じった埋土が認められる遺構もある。

「下面」と捉えているⅦ層灰青緑色砂質土には、ある一部の場所に集中して土坑がみられる。大別すると長丸形の土坑とやや小さめの円形・隅丸方形の土坑に分けられる。２つが並んでセットで検出される例が多い。

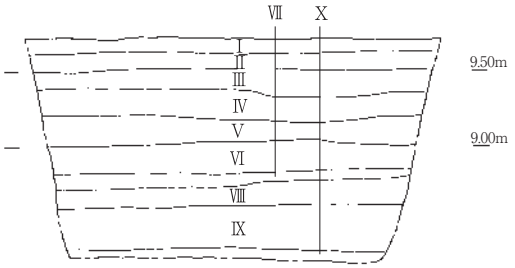
「中面」であるが、基本層序のⅣ層とⅤ層の間に、「灰色粘土・黄粘土・黒色粘土がブロック状に混じる」層がある。この層はマウンド状を呈しており、粘土のブロックの状態からも、明らかに人為的な層である。

「上面」の灰黄色粘土層の検出面からは、不規則な形状の土坑や溝が検出されている。埋土はⅢ層の黒茶褐色シルト～粘質土（遺物包含層）で、「下面の土坑」の直上に集中している。出土遺物から下面の遺構との時期差はほとんどない。



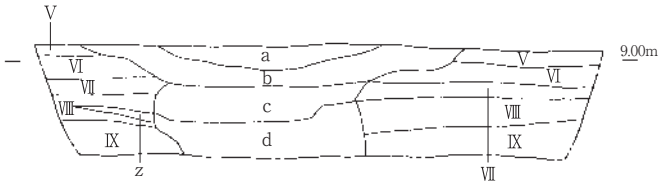
C区　西壁セクション

Ⅰ　灰黒色シルト
Ⅱ　灰橙色シルト
Ⅲ　灰色シルト
Ⅳ　黒褐色シルト～粘質土
Ⅴ　茶褐色シルト～粘質土
Ⅵ　灰黄褐色シルト～砂質土
Ⅶ　茶灰褐色シルト～砂質土
Ⅷ　黄灰粘土
Ⅸ　灰黄粘土



C区　東壁セクション

Ⅰ　表土
Ⅱ　灰青色シルトに茶褐色シルトがまじる
Ⅲ　灰色シルト
Ⅳ　灰茶色シルト
Ⅴ　黒褐色シルト～粘砂土
Ⅵ　茶褐色シルト～粘質土
Ⅶ　黄橙色シルト～粘質土
Ⅷ　黄灰粘土
Ⅸ　灰黄粘土
Ⅹ　黒色粘土



Ⅰ　表土
Ⅱ　灰青色シルトに茶褐色シルトがまじる
Ⅲ　灰色シルト
Ⅳ　灰茶色シルト
Ⅴ　黒褐色シルト～粘砂土
Ⅵ　茶褐色シルト～粘質土
Ⅶ　黄橙色シルト～粘質土
Ⅷ　黄灰粘土
Ⅸ　灰黄粘土
Ⅹ　黒色粘土

a　灰黒色粘質土
b　黒灰色腐植土
c　黒色腐植土
d　黄灰粘土・腐植土・灰色砂がブロック状にまじる
z　灰色砂～粘土

0　2m

SK17　東側トレンチ西壁セクション

第10図　C区基本層序 (S=1/50)

第２節　遺構と遺物

遺構はＣ区を中心に検出している。検出面は上面（9.23～9.66m）、中面（8.93～9.10m）、下面（8.42～8.88m）に分かれ、検出場所が重複する遺構が多数存在し、同一遺構である可能性も否定できない。遺物に大きな時期差は看取できず、ほとんどの遺構は弥生後期終末から古墳時代初頭頃（庄内式並行期）の時期幅に帰属すると考えられる。遺物（土器片）は太筋の平行タタキを有するものが大半を占め、下胴部外面に縦方向のハケ調整が施されているものもある。底部が欠損している場合が多く、口縁部の出土も僅少であるが、胴部の残存状況から、猶数個体分の遺物復元の可能性を含んでいる。出土した遺物の器表には煤けが認められるものもあり、また実用品ではない祭祀的な意味合いを持つと考えられる木製品も出土しており、当遺跡の性格を知る上での史料となると考えられる。

１．上面（１面目）の遺構

上層の遺構として確認できたものは、土坑17基（SK１～17）、溝３条（SD１～３）である。上面（１面目）遺構の配置は第11図に示した。

SK１（第12図）

調査区（上面）Ｇ８／Ｈ８・９グリッドに位置する。検出高は9.31mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径6.42m、短径1.81m、深さ52cmを測る。SK18とは切り合い関係にある。断面形態は台形状を呈し、部分的に段部を有する。埋土はＩ層で、黒色粘土に茶褐色粘土がブロック状に混じっている。SK19の上面に位置する。

遺物は細片を含めて約320点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（７・10）、甕（８・９・11・12）、鉢（13）と弥生後期土器（14）であり、床面からの出土がみられる。

SK２（第13図）

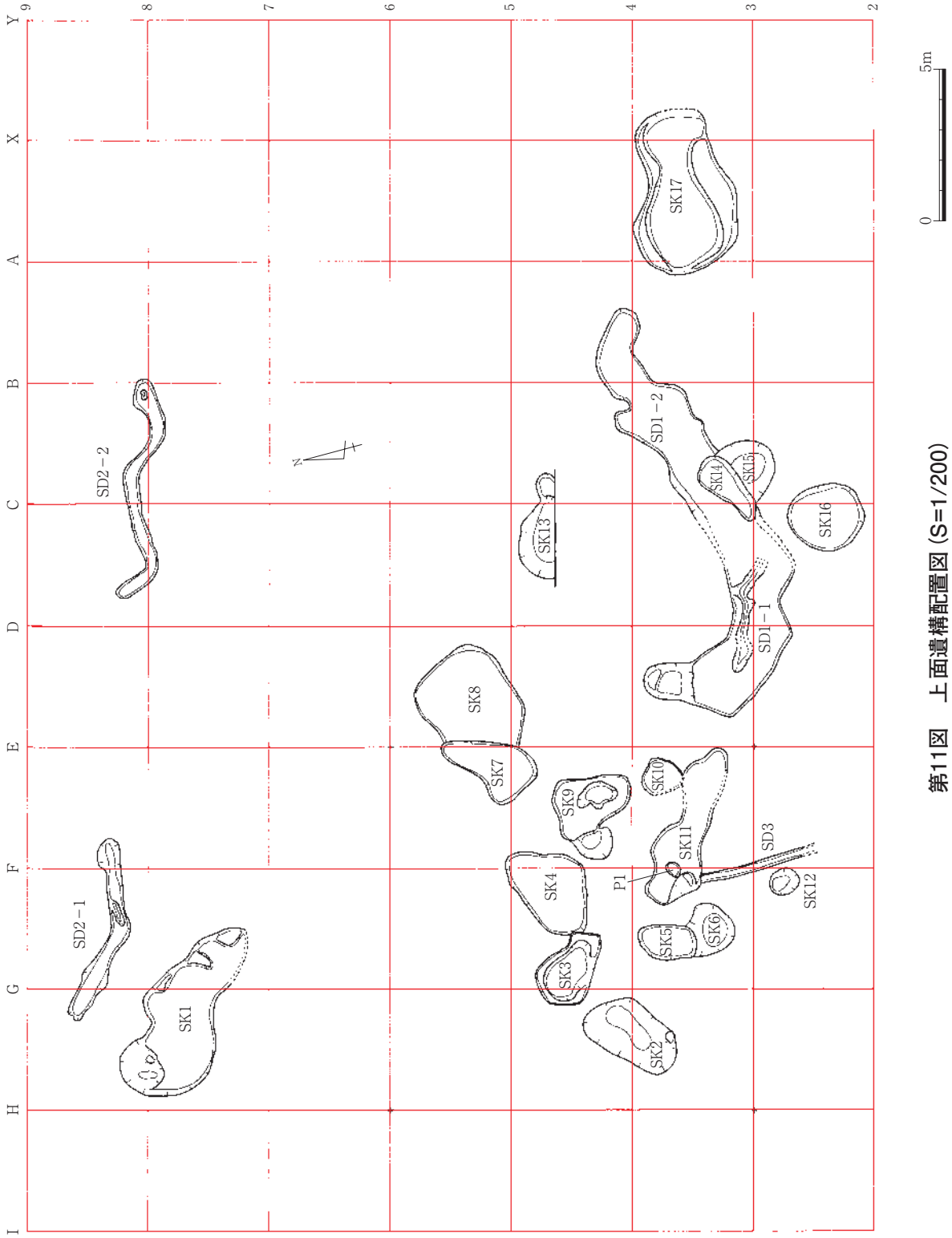
調査区（上面）Ｈ４・５グリッドに位置する。検出高は9.50mを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径3.26m、短径1.62m、深さ60cmを測る。断面形態は台形状を呈し、小段部から土師器の壺（15）を出土している。SK20の上面に位置する。

遺物は細片を含めて約70点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（16）、甕（17）であり、床面からの出土がみられる。

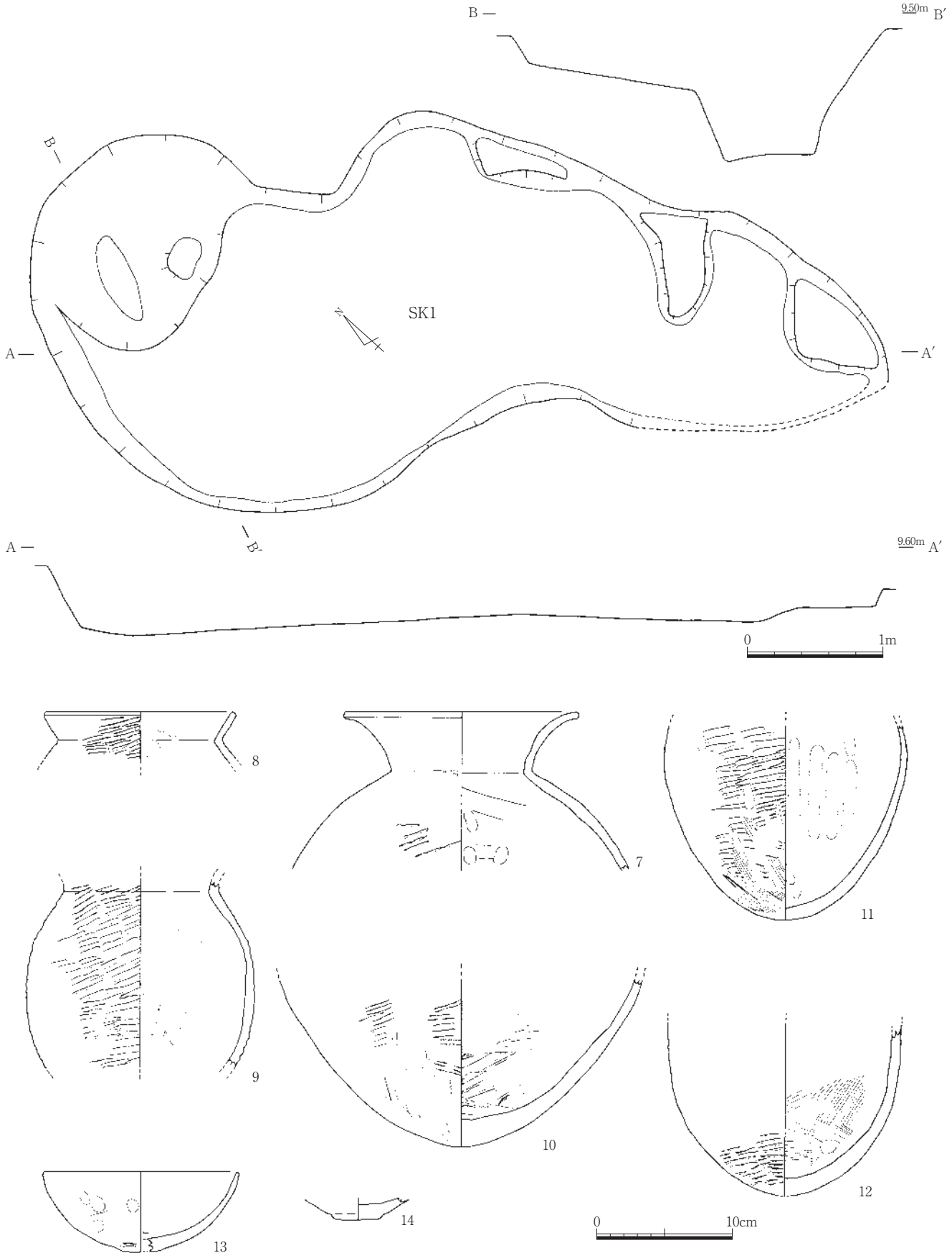
SK３（第14図）

調査区（上面）Ｇ５／Ｈ５グリッドに位置する。検出高は9.51mを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径2.57m、短径1.51m、深さ28cmを測る。断面形態は台形状を呈し、一部を除き周囲に段部を有する。SK21・22の上面に位置する。

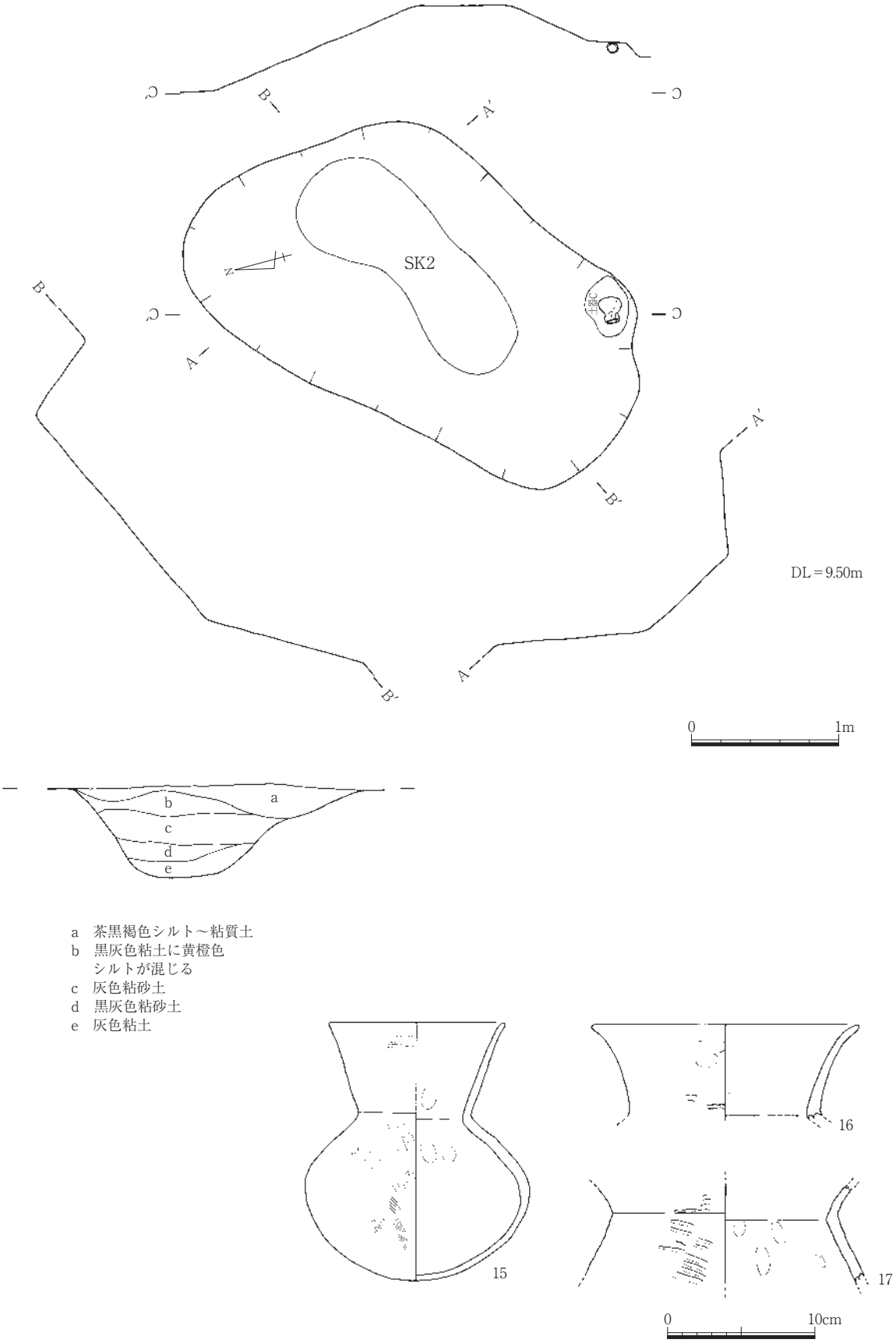
遺物は細片を含めて約20点を出土している。



第11図　上面遺構配置図 (S=1/200)



第12図　SK１平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）



第13図　SK２平面・断面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）

ＳＫ４（第14図）

調査区（上面）Ｆ５／Ｇ５グリッドに位置する。検出高は9.43mを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径2.65m、短径2.44m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈する。SK29の上面に位置する。

遺物は細片を含めて約50点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の甕（18）で、庄内式土器と考えられる。

ＳＫ５（第14図）

調査区（上面）Ｇ４グリッドに位置する。検出高は9.48mを測る。平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径1.88m、短径1.13m、深さ7cmを測る。SK6とは切り合い関係にある。断面形態は皿状を呈する。

遺物の出土は確認していない。

ＳＫ６（第14図）

調査区（上面）Ｇ４グリッドに位置する。検出高は9.59mを測る。平面形態は不整形状を呈し、短径1.72m、深さ38cmを測る。北側はSK5に切られている。断面形態は台形状を呈する。SK23・24の上面に位置する。

遺物は細片を含めて約50点を出土している。

ＳＫ７（第15図）

調査区（上面）Ｆ５・６グリッドに位置する。検出高は9.32mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径3.24m、短径1.97m、深さ12cmを測る。SK8とは切り合い関係にある。断面形態は皿状を呈する。

遺物の出土は確認していない。

ＳＫ８（第15図）

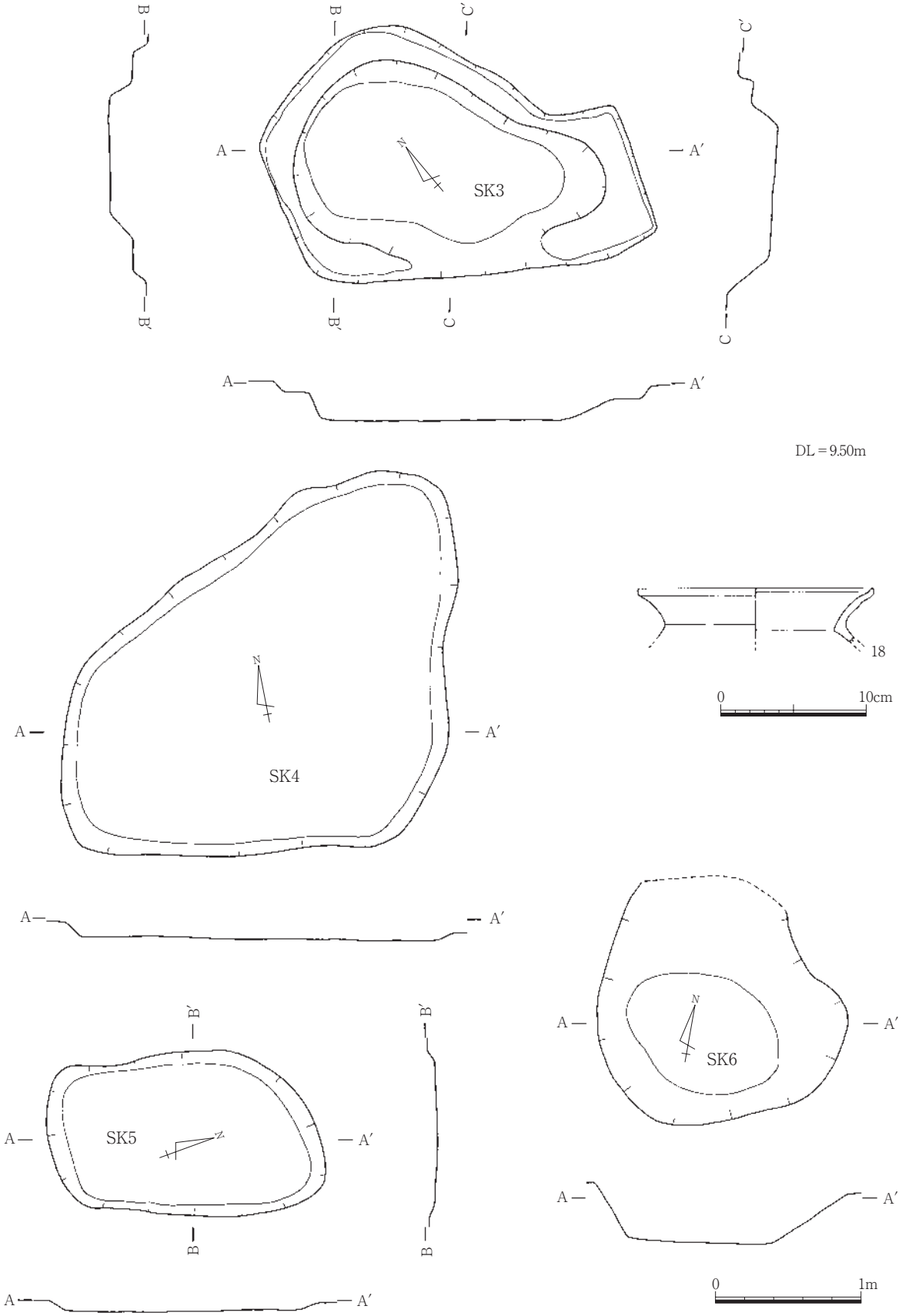
調査区（上面）Ｅ５・６グリッドに位置する。検出高は9.30mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径3.80m、短径2.87m、深さ7cmを測る。西側はSK7に切られている。断面形態は皿状を呈する。SK39～41の上面に位置する。

遺物は土器片４点を出土している。

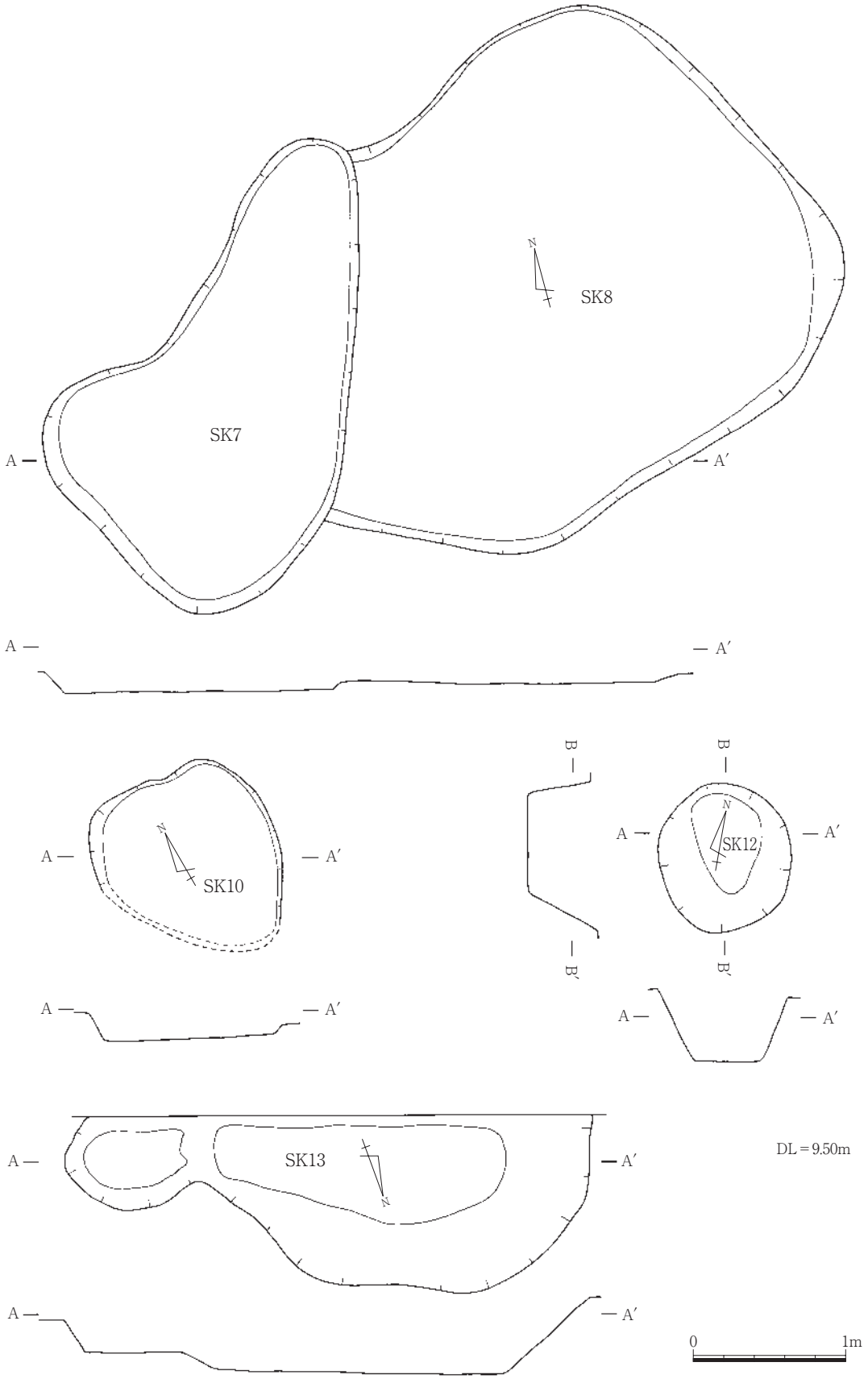
ＳＫ９（第16図）

調査区（上面）Ｆ５グリッドに位置する。検出高は9.43m を測る。平面形態は不整形状を呈し、長径2.74m、短径2.62m、深さ22cmを測る。西側は土坑と切り合い関係にあると考えられる。断面形態は台形状を呈し、床面に長径1.34m、短径0.94m、深さ12cmを測る不整形状の落ち込みを有している。SK33・35の上面に位置する。

遺物は細片を含めて約170点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（19～21）であり、床面からの出土がみられる。



第14図　SK３～６平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）

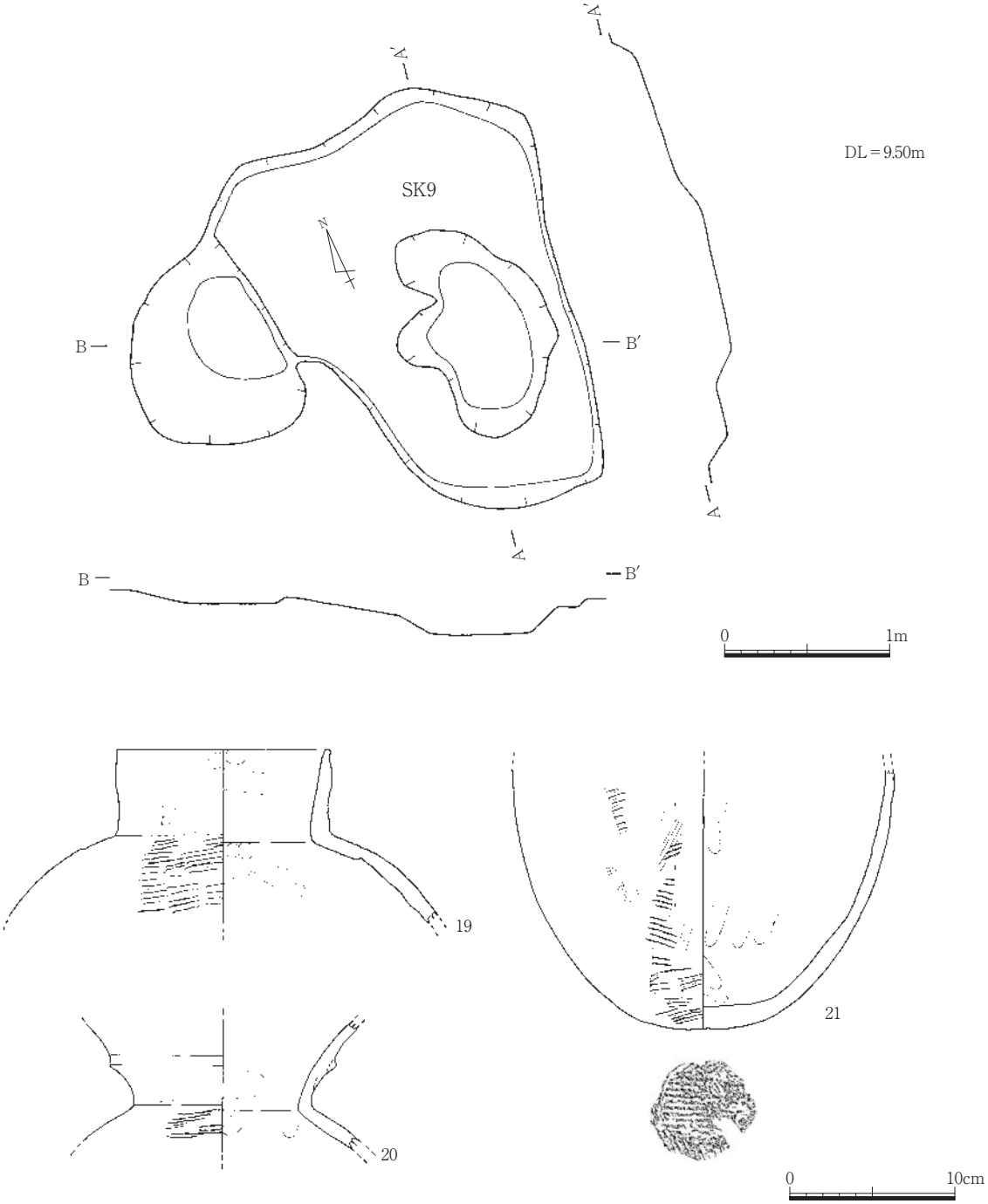


第15図　SK7・8・10・12・13平面・エレベーション図（S=1/40）

SK10（第15図）

調査区（上面）Ｆ４グリッドに位置する。検出高は9.44mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.26m、深さ17cmを測る。トレンチにより西側が未検出である。断面形態は箱形状を呈する。SK37の上面に位置する。

遺物の出土は確認していない。



第16図　SK９平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）

SK11（第17図）

調査区（上面）Ｆ４・Ｇ４グリッドに位置する。検出高は9.53mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径5.43m、短径0.92m、深さ９㎝を測る。SD３と切り合い関係にある。断面形態は皿状を呈し、溝状遺構の観を呈する。床面から長径1.25m、短径0.63m、深さ23㎝を測る土坑状の落ち込みと、Ｐ１（長径0.55m、短径0.40m、深さ９㎝）を検出している。SK38の上面に位置する。

遺物は細片を含めて約90点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（22）であり、床面からの出土がみられる。

SK12（第15図）

調査区（上面）Ｇ３グリッドに位置する。検出高は9.66mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径0.97m、短径0.88m、深さ45㎝を測る。断面形態は台形状を呈する。

遺物の出土は確認していない。

SK13（第15図）

調査区（中～下面）Ｄ５グリッドに位置する。検出高は9.08mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径3.46m、短径1.17m、深さ47㎝を測る。トレンチにより南側が未検出であり、東側は土坑と切り合い関係にあると考えられる。断面形態は台形状を呈する。SK45の上面に位置する。

遺物の出土は確認していない。

SK14（第17図）

調査区（上面）Ｃ４・Ｄ４グリッドに位置する。検出高は9.23mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径2.56m、短径1.03m、深さ10㎝を測る。SK15・SD1－2と切り合い関係にある。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質土である。

遺物は細片を含めて約20点を出土しており、タタキ目にハケ調整を施している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（23・24）であり、床面からの出土がみられる。

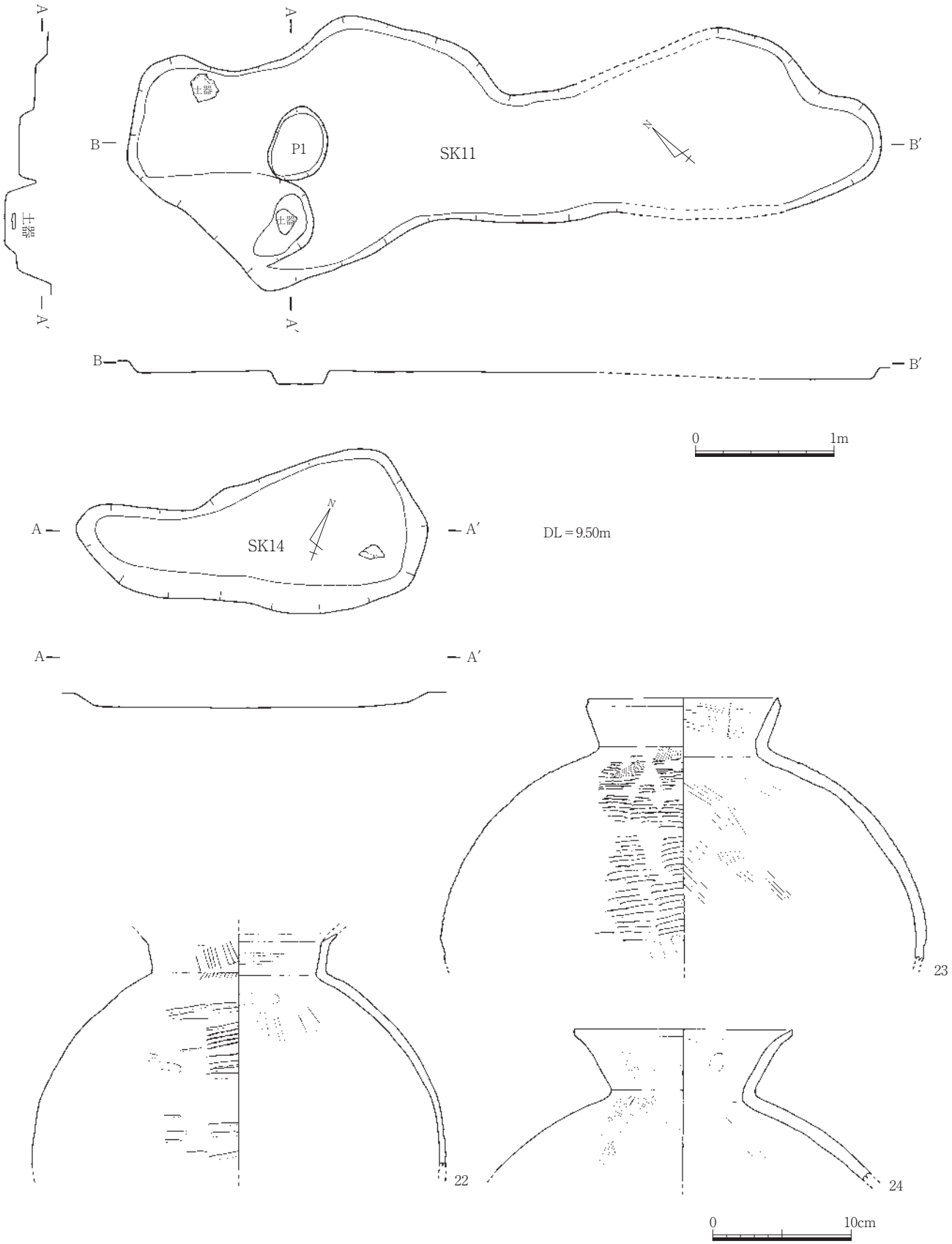
SK15（第18図）

調査区（上面）Ｃ３・４グリッドに位置する。検出高は9.25mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径2.16m、短径0.92m、深さ33㎝を測る。北側はSK14に切られている。断面形態は台形状を呈する。埋土は黒茶褐色シルト質土である。

遺物の出土は確認していない。

SK16（第18図）

調査区（上面）Ｃ３・Ｄ３グリッドに位置する。検出高は9.25mを測る。平面形態は歪な円形状を呈し、長径2.36m、短径2.18m、深さ56㎝を測る。断面形態は半月状を呈する。埋土はＩ層で、黒褐色シルトに灰茶色粘質土がパック状に堆積している。



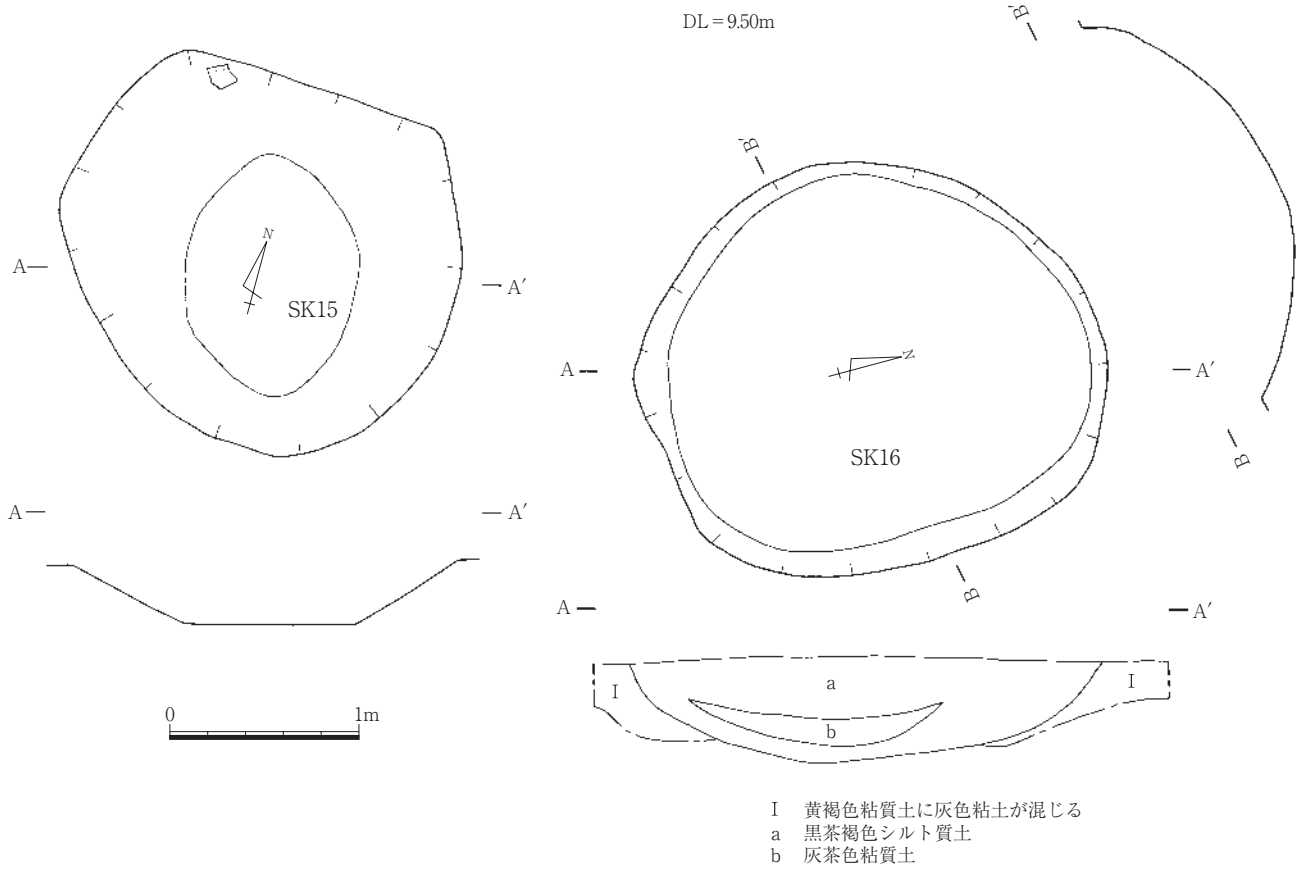
第17図　SK11・14平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）

遺物の出土は確認してない。

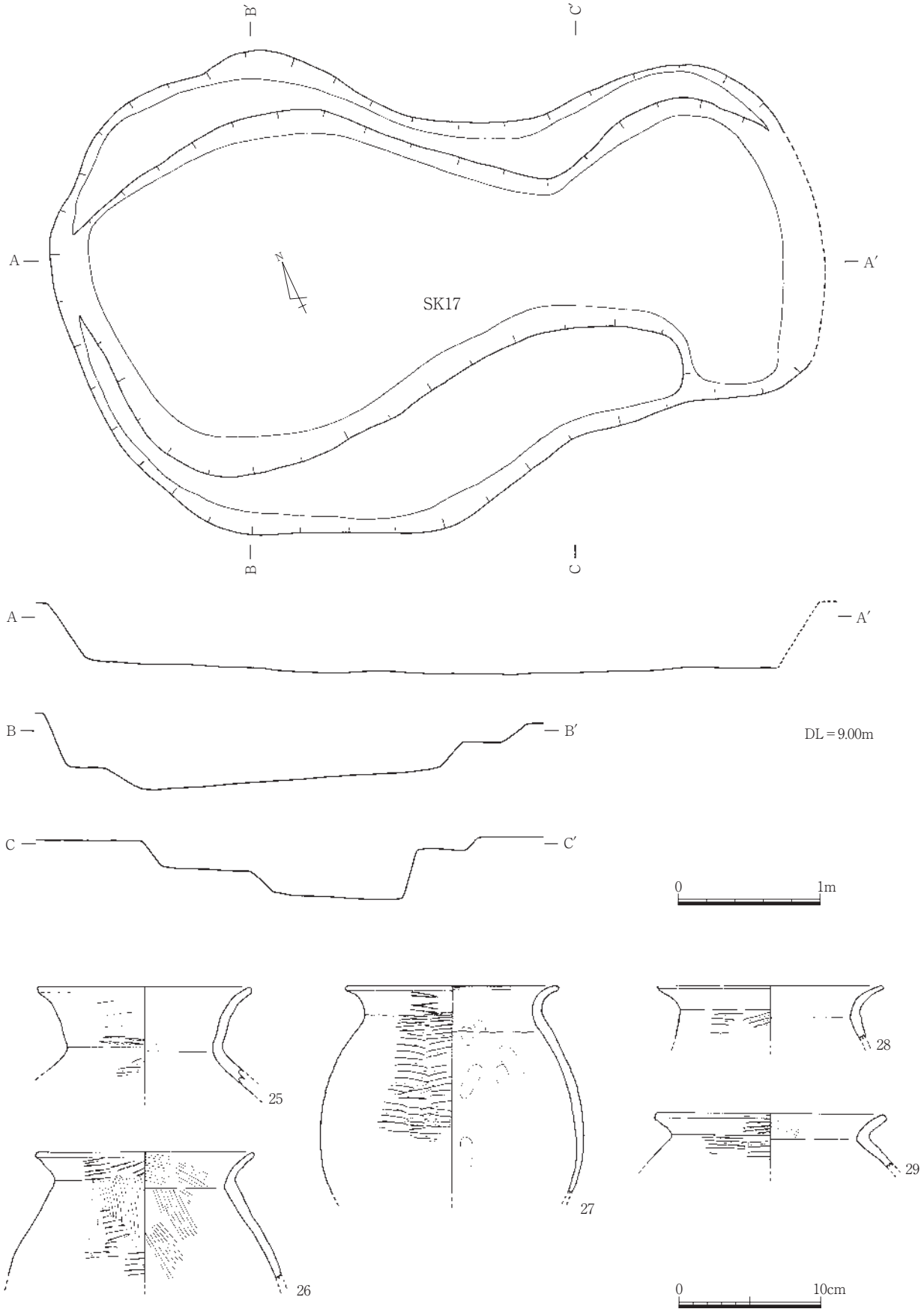
SK17（第19図）

調査区（中～下面）Ａ４グリッドに位置する。検出高は9.08mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径5.49m、短径2.40～3.44m、深さ52cmを測る。断面形態は台形状を呈し、北･南側に段部を有する。埋土はⅢ層で、Ⅰ層目は灰黒色粘質土、Ⅱ層目は黒灰色腐葉土、Ⅲ層目は黒色腐葉土である。

遺物は細片を含めて約300点を出土しており、部分的な集中がみられる。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（25）、甕（26～29）であり、床面からの出土がみられる。



第18図　SK15・16平面・断面・エレベーション図（S=1/40）



第19図　SK17平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）

SD（溝状遺構）

上面での検出高は8.97～9.67mであり、下面の検出高8.51～8.74mとは明らかに分かれる。SD1（上面）とSD4（下面）はほぼ同位置に所在し、周溝の体を成すも性格は不明である。下面から検出したSD5は他の遺構に先行する時期であり、弥生後期の可能性がある。

なお、SD1－1とSD1－2は一連の溝状の遺構SD1だと捉えているが、地点により区別して調査が進められており、それに即して報告する。SD2－1とSD2－2、SD4－1・SD4－2・SD4－3も同様にそれぞれ一連の遺構SD2とSD4の地点による区分である。

SD1－1（第20・21図）

調査区（上面）D3・4／E3・4グリッドに位置する。東端はトレンチにより未検出である。隣接するSD1－2に接続すると考えられるが、約15cmの比高差が認められる。検出高は北端で9.31m、東端で9.22mを測る。北端は土坑状遺構と切り合い関係にある。主軸方向はN－54°－Wで、検出規模は5.02×1.95m、床面高は北端で9.12m、東端で9.07mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で24cmを測る。床面から溝状遺構を検出している。

遺物は細片を含めて約150点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（30～32）と弥生後期の壺（42）である。

SD1－2（第20・21図）

調査区（上面）B4・5／C4・5グリッドに位置する。西端はトレンチにより未検出である。隣接するSD1－1に接続すると考えられるが、約15cmの比高差が認められる。検出高は東端で8.97m、西端で9.07mを測る。西端南側はSK14・15に切られている。主軸方向はN－70°－Eで、検出規模は7.86×1.61m、床面高は東端で8.62m、西端で8.68mを測る。断面形態は箱形状を呈し、最深部で39cmを測る。

遺物は細片を含めて約300点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（37～41）、甕（33～36）である。

SD2－1（第22図）

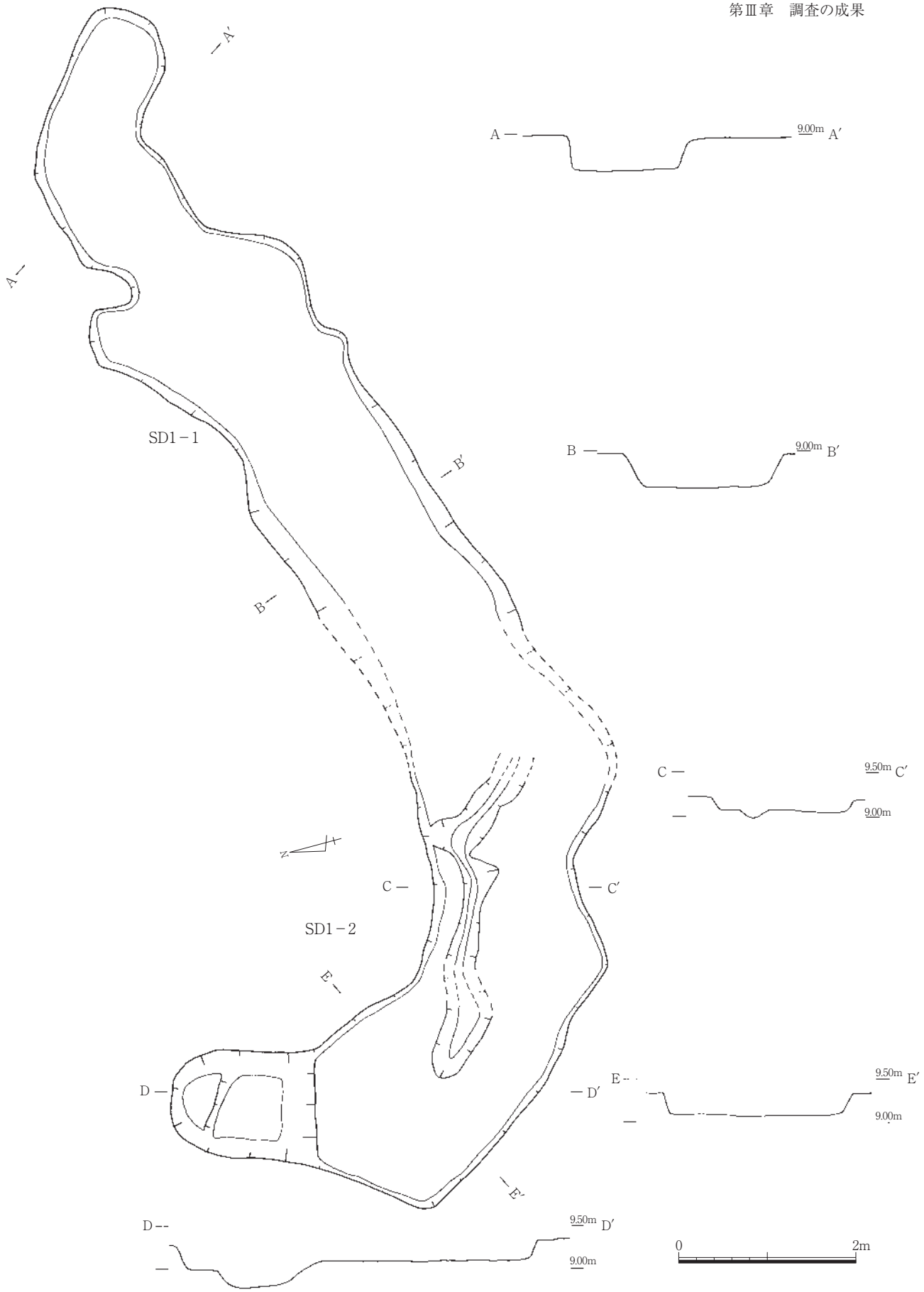
調査区（上面）F9／G9／H9グリッドに位置する。検出高は9.41mを測る。東端からN－83°－Wで約3.5m検出し、N－37°－Eで東に方向を変える。検出規模は6.10×0.51m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈し、床面に小規模な落ち込みを有する。

遺物の出土は確認していない。

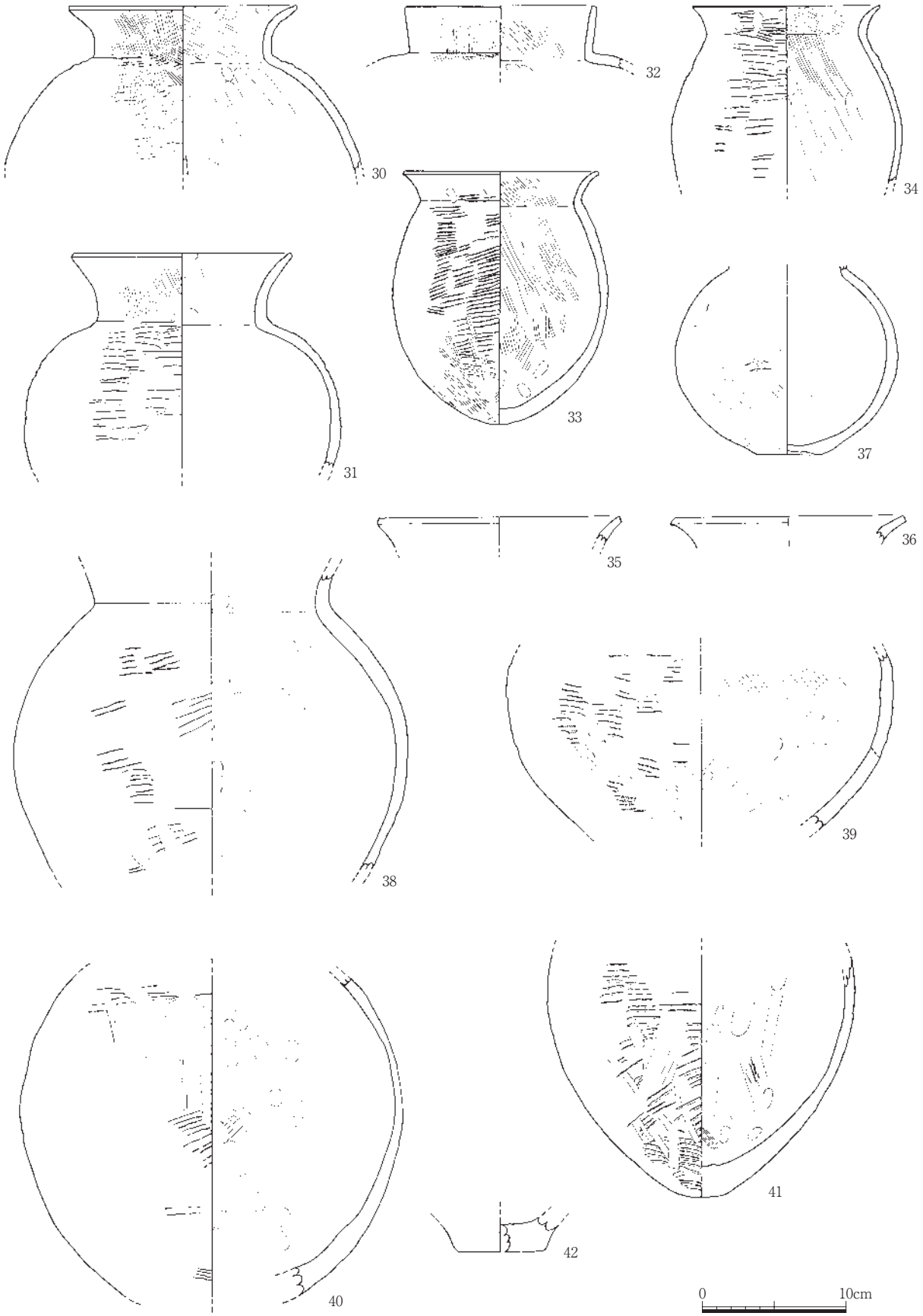
SD2－2（第22図）

調査区（上面）C8・9／D8・9グリッドに位置する。検出高は東端で9.17m、西端で9.32mを測る。検出規模は7.22×0.49m、床面高は東端で9.11m、西端で9.25mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で8cmを測る。

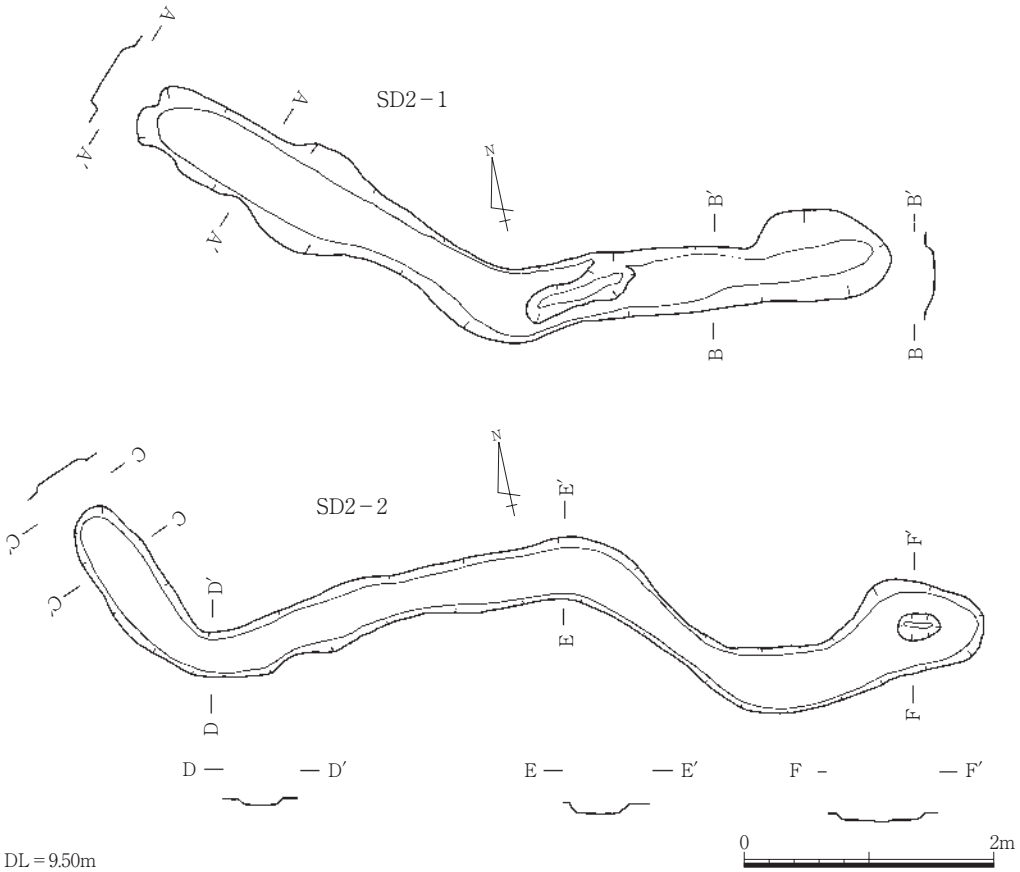
遺物の出土は確認していない。



第20図　SD１平面・エレベーション図（S=1/60）



第21図　SD１出土遺物実測図（S=1/4）

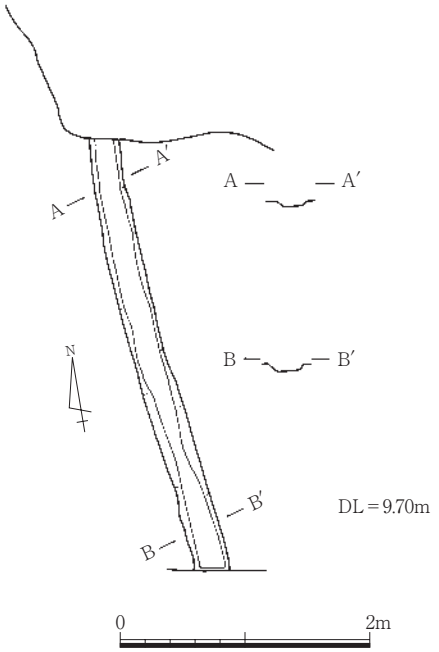


第22図　SD２平面・エレベーション図（S=1/60）

SD３（第23図）

調査区（上面）Ｆ３・４／Ｇ３・４グリッドに位置する。北端はSK11と切り合い関係にあり、南端は調査区外へ続いている。検出高は北端で9.57m、南端で9.67mを測る。主軸方向はＮ－1°－Ｅで、ほぼ直線的に検出している。検出規模は3.55×0.24m、床面高は北端で9.53m、南端で9.61mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で６㎝を測る。

遺物の出土は確認していない。



第23図　SD３平面・エレベーション図（S=1/60）

2. 中面（2面目）の遺構

中面遺構としてはマウンド状遺構2箇所と土坑1基（SK23）が確認されている。SK23については下面遺構の中で報告し、ここではマウンド状遺構とその周辺の遺構の位置関係についての報告を行う。

マウンド状遺構は中面（検出高8.93～9.12m）から検出された性格不明遺構である。マウンド1・2は近接して所在している。遺構下面から検出された土坑群（袋状土坑）との関連性は不明である。

マウンド状遺構1

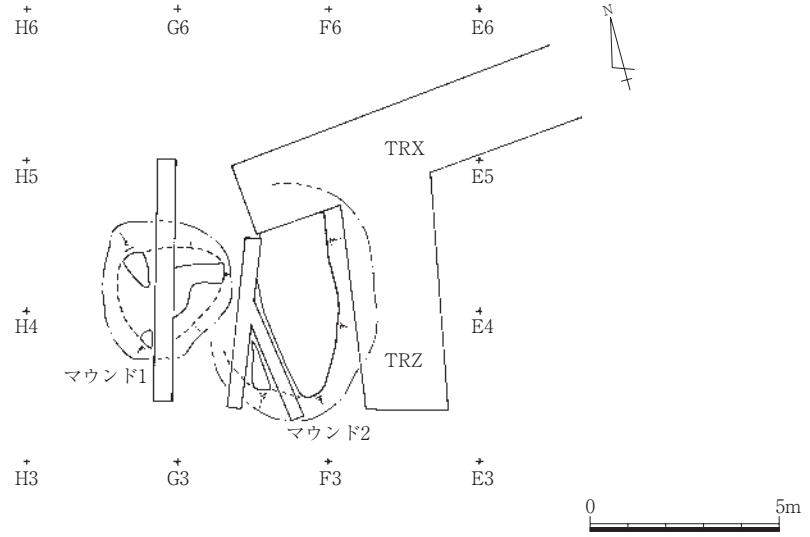
調査区（中面）G4・5／H4・5グリッドに位置する。東側に隣接してマウンド状遺構2が所在する。検出高（下端）は9.12mを測る。平面形態は歪な台形状を呈し、上端径約3.1m、下端径約3.8m、高さ27cmを測る。SK2に切られ、さらにトレンチにより旧態を存せず、上端径・下端径は復元値を記している。埋土は黄・灰・黒色粘土が混ざっている。

遺物は細片を含めて36点を出土している。遺物から弥生後期終末から古墳時代初頭頃の遺構と考えられる。

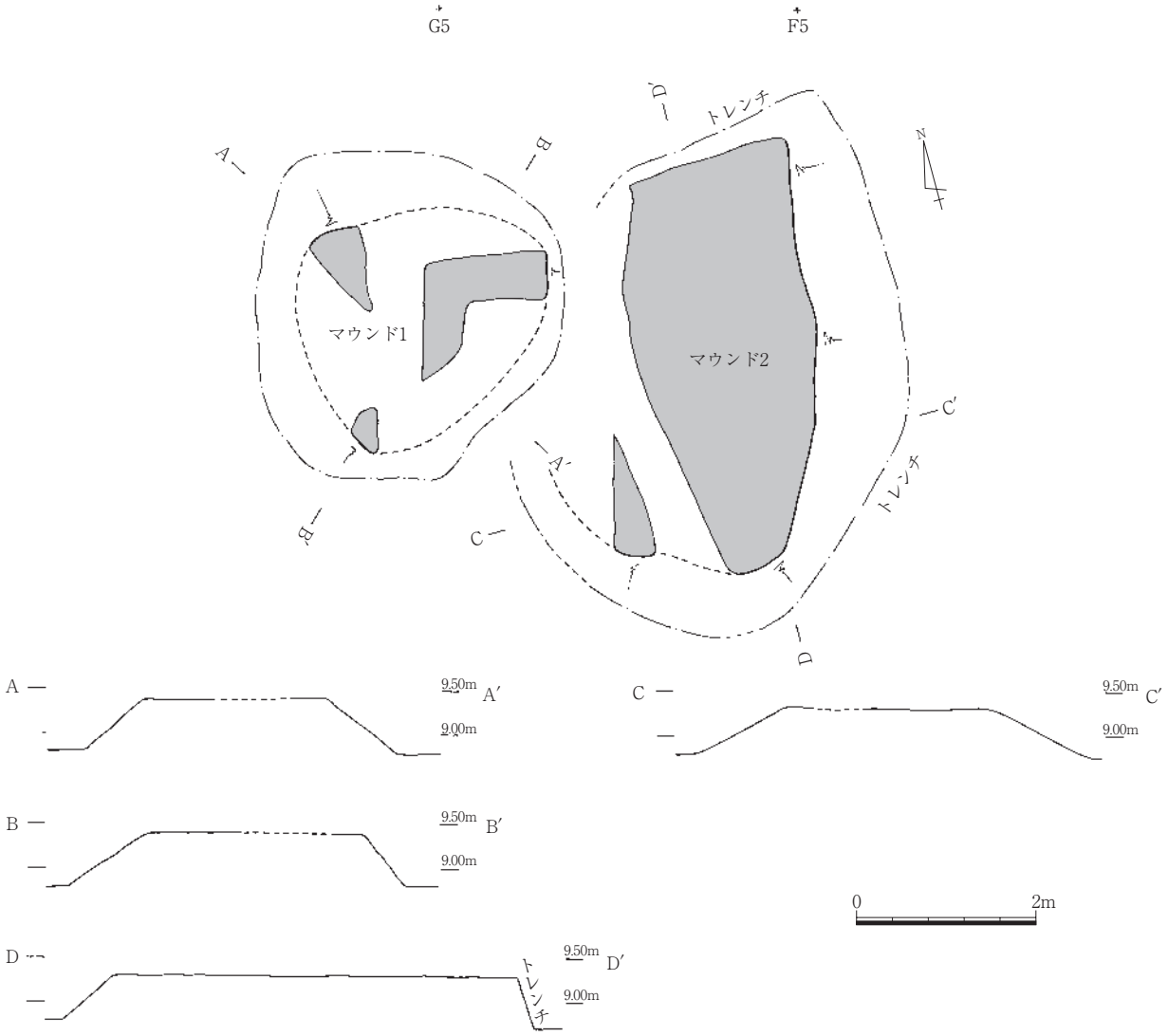
マウンド状遺構2

調査区（中面）F4・5／G4・5グリッドに位置する。西側に隣接してマウンド状遺構1が所在する。検出高（下端）は8.93mを測る。主軸方向はN－16°－Eで平面形態は歪な長台形状を呈し、上端径約5.0m、下端径約6.4m、高さ38cmを測る。トレンチにより旧態を存せず、上端径・下端径は復元値を記している。埋土は黄・灰・黒色粘土が混ざっている。

遺物は細片を含めて約350点を出土している。図示したものは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（43）、甕（44～50）である。

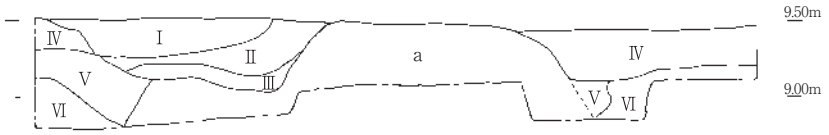


第24図　中面遺構　マウンド遺構と周辺トレンチの位置（S=1/200）



第25図　マウンド１・２平面エレベーション図（S=1/80）

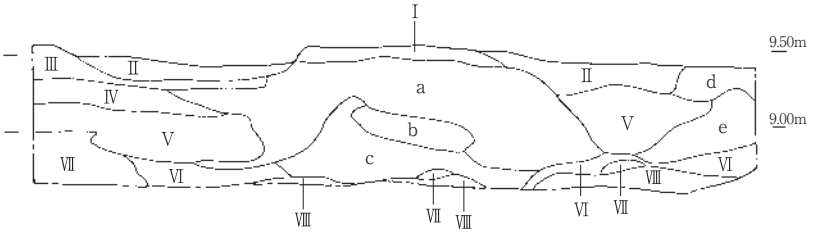
サブトレA 東壁セクション



Ⅰ　黒褐色シルト（SK3）
Ⅱ　灰茶色粘質土
Ⅲ　黒色粘砂土
Ⅳ　灰黄色シルト～粘質土
Ⅴ　黄灰色粘土
Ⅵ　灰色粘土

a　黒・灰・茶・黄色粘土がブロック状にまじる

TRZ 西壁セクション

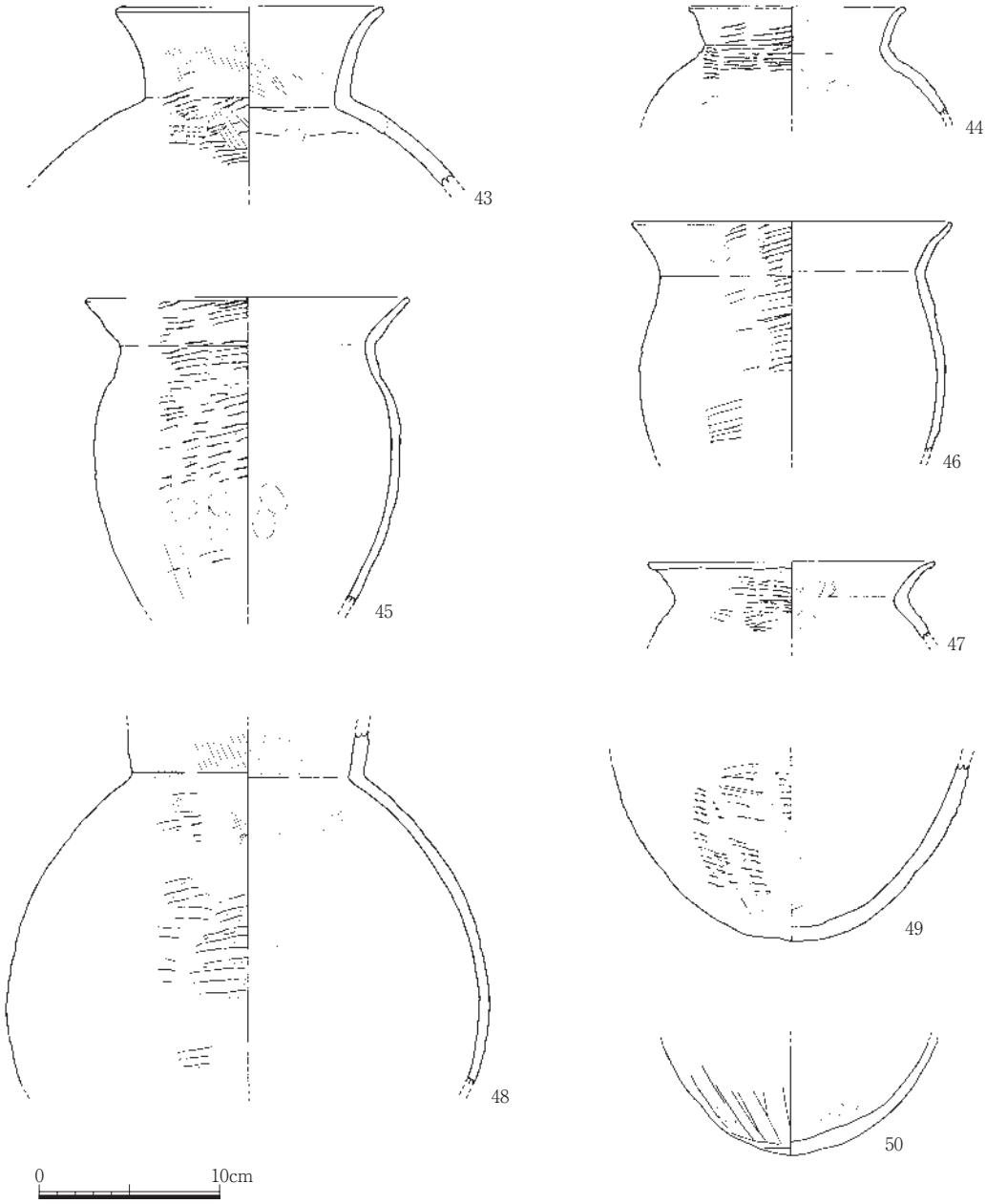


Ⅰ　濃茶色シルト
Ⅱ　茶褐色シルト
Ⅲ　橙褐色シルト
Ⅳ　灰黄色シルトに茶褐色シルトがまじる
Ⅴ　灰黄色シルト～粘質土
Ⅵ　灰色粘土
Ⅶ　黒色粘土
Ⅷ　白緑色シルト～砂質土

0　1m

a　黒・灰・茶・黄色粘土がブロック状にまじる
b　黒色粘砂土（腐植土）
c　黒・灰色粘土がブロック状にまじる
d　黒・灰・茶・黄色粘土がブロック状にまじり黒色腐植土が多くまじる
e　　〃　　がブロック状にまじる

第26図　マウンド状遺構付近のセクション図（S=1/50）



第27図　マウンド２　出土遺物実測図（S=1/4）

３．下面（3面目）の遺構

土坑が29基と溝が3条確認されている。ここではSK18からSK47までを下面検出の土坑として報告するが、SK23の検出標高は上面と中面の間に位置しており、2面目のマウンド状遺構に伴う可能性がある。また溝の中でSD5は、さらに下層の遺構である。

土坑（SK）

下面の土坑は2基が1セットの単位で把握可能なものが多い。

SK18（第29図）

調査区（下面）H８・９グリッドに位置する。検出高は8.74mを測る。平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径1.71m、短径1.17m、深さ92cmを測る。SK1に切られていると考えられる。断面形態は逆台形状（袋状）を呈し、床面は1.92 cmを測る。埋土は灰褐色粘土と黒色腐葉土である。

遺物は土器片4点と木製品を出土している。図示したのは鋤状の木製品（W1～3）である。

SK19（第29図）

調査区（下面）H８グリッドに位置する。検出高は8.72mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.70m、短径0.54m、深さ71cmを測る。断面形態は箱形状を呈する。埋土は灰褐色粘土と黒色腐葉土である。SK1の下面に位置する。

遺物は細片を含めて約10点を出土している。

SK20（第30図）

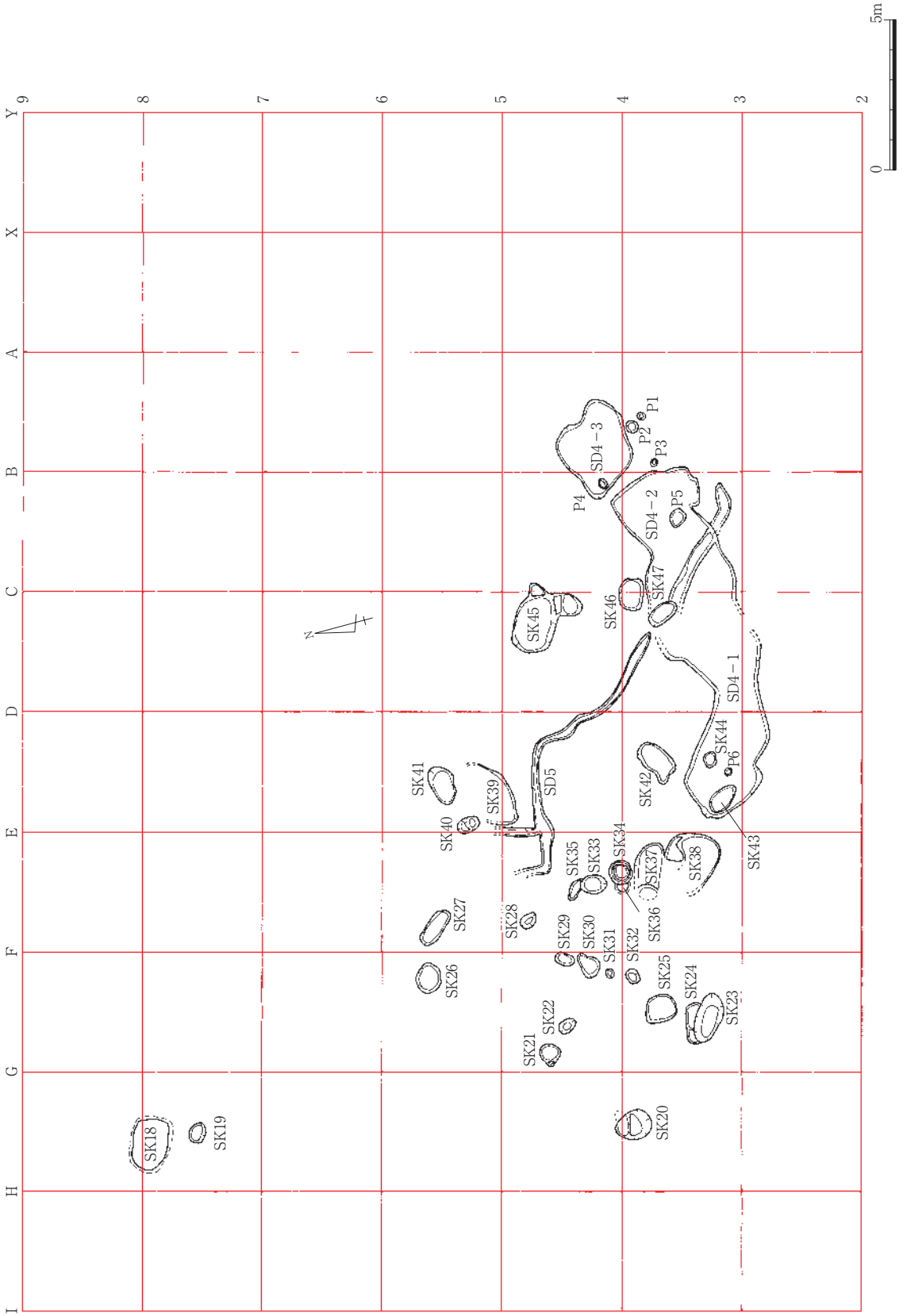
調査区（中～下面）H４・５グリッドに位置する。検出高は8.98mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.25m、短径0.97m、深さ1.10mを測る。断面形態は逆台形状（袋状）を呈し、段部を有する。埋土は黒色腐葉土と灰色砂質シルト、灰色粘土が混じっている。SK2の下面に位置する。

遺物は土器片3点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（51）であり、床面からの出土がみられる。

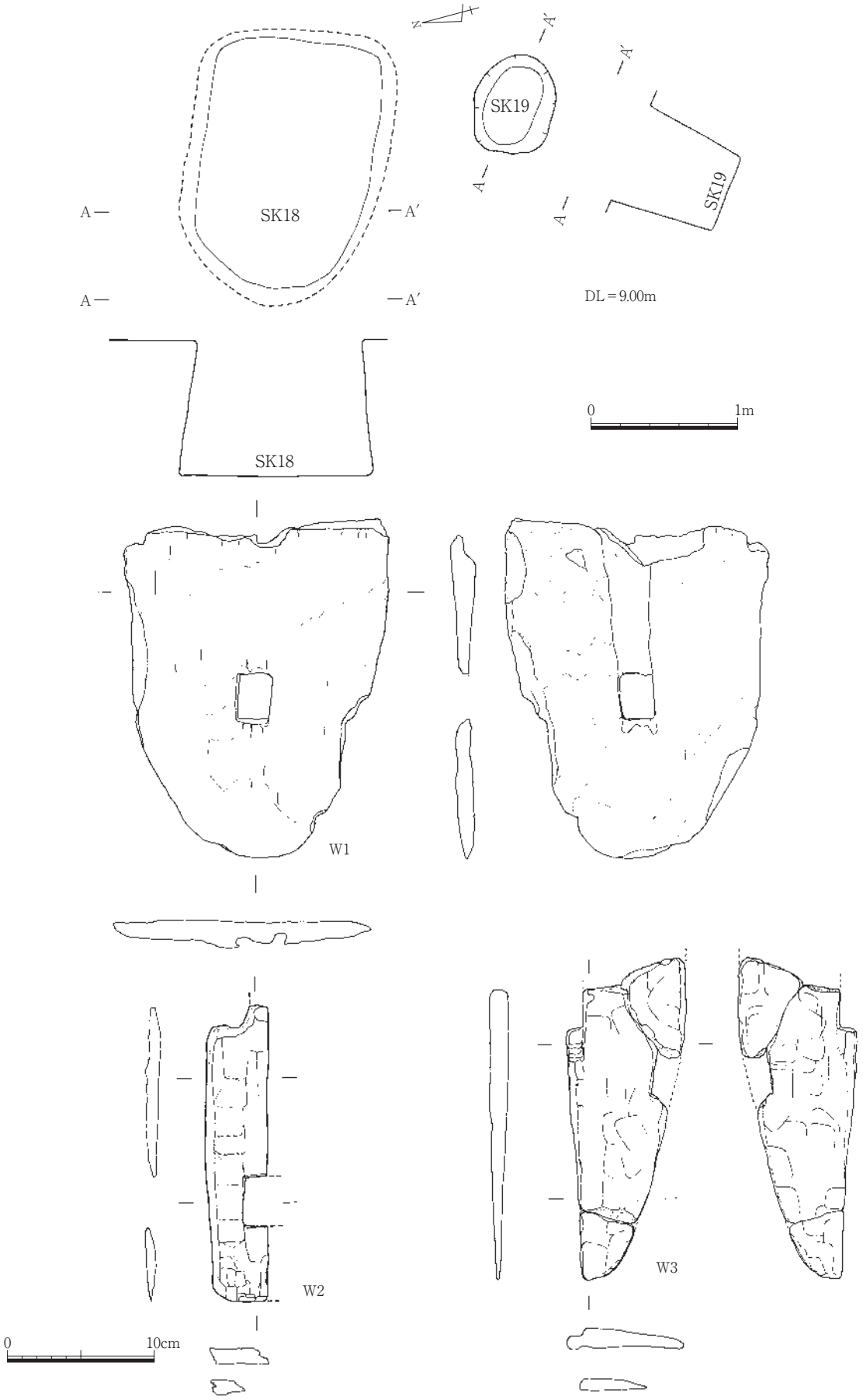
SK21（第30・33図）

調査区（下面）G５グリッドに位置する。検出高は8.72mを測る。平面形態は歪な方形状を呈し、長径0.75m、短径0.64m、深さ72cmを測る。断面形態は箱形状を呈し、東側に段部を有しているが、形状から切り合いの可能性が考えられる。SK3の下面に位置する。

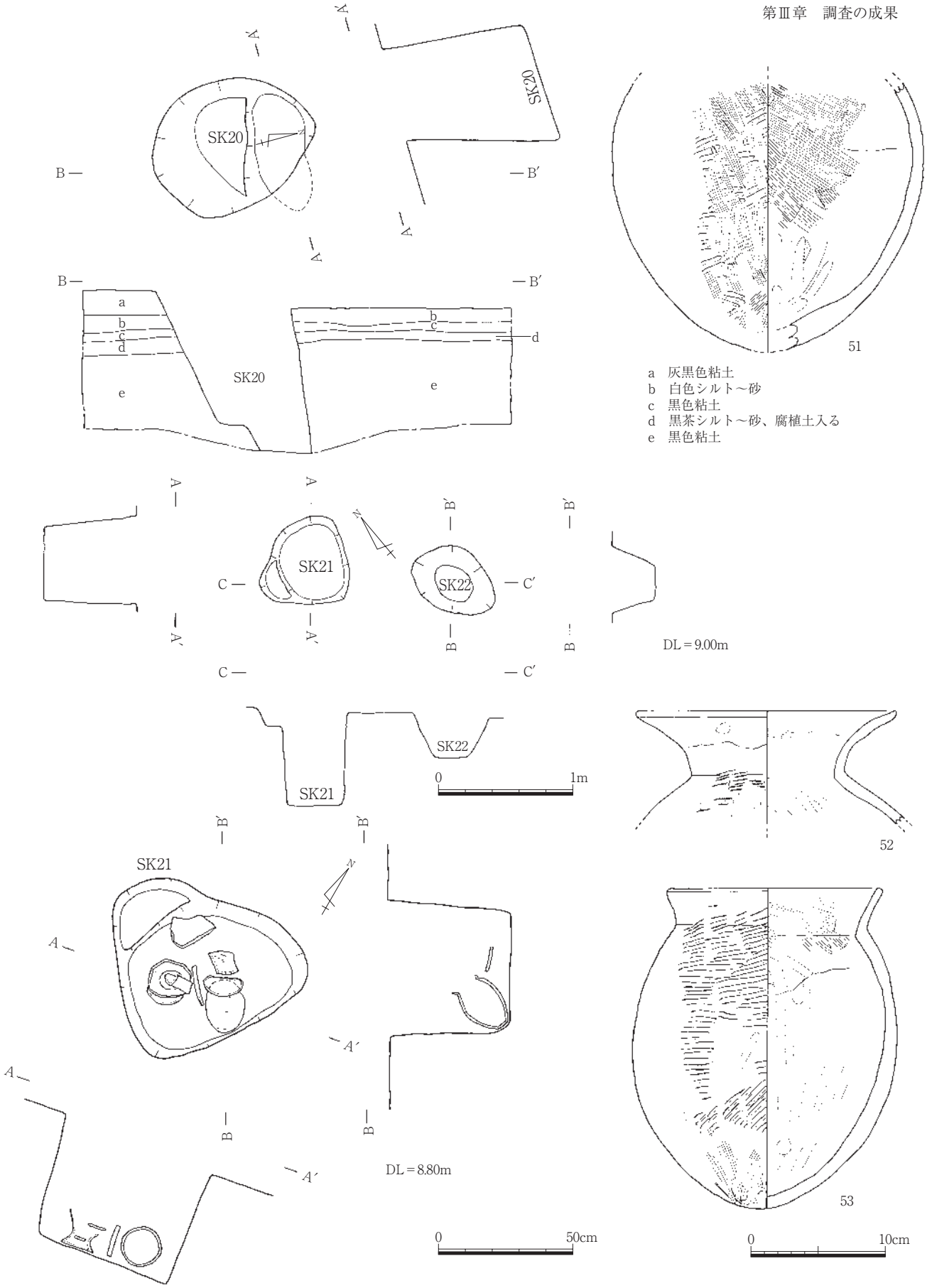
遺物は土師器片を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（52）、甕（53）と板状の木製品（W4）であり、床面からの出土がみられる。



第28図　下面遺構配置図 (S=1/200)



第29図　SK18・19平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）



a　灰黒色粘土
b　白色シルト～砂
c　黒色粘土
d　黒茶シルト～砂、腐植土入る
e　黒色粘土

第30図　SK20～22平面・断面・エレベーション図（S=1/40）　SK20・21出土遺物実測図（S=1/4）

SK22（第30図）

調査区（下面）Ｇ５グリッドに位置する。検出高は8.69ｍを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.67ｍ、短径0.48ｍ、深さ32㎝を測る。断面形態は台形状を呈する。SK３の下面に位置する。

遺物の出土は確認していない。

SK23（第31図）

調査区（中～下面）Ｇ４グリッドに位置する。検出高は9.10～9.32ｍを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.70ｍ、短径0.79ｍ、深さ57㎝を測る。SK24とは切り合い関係にある。断面形態は台形状を呈する。SK６の下面に位置する。

遺物は細片を含めて25点を出土しており、煤けがみられる。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の甕（54・55）、鉢（56）であり、床面からの出土がみられる。

SK24（第32図）

調査区（下面）Ｇ４グリッドに位置する。検出高は8.62ｍを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.37ｍ、短径0.62ｍ、深さ55㎝を測る。SK23に切られている。断面形態は箱形状を呈すが、西側に段部を有し、東側に向かって床面が傾斜している。埋土は黒色腐葉土である。SK６の下面に位置する。

遺物の出土は確認していない。

SK25（第32・33図）

調査区（下面）Ｇ４グリッドに位置する。検出高は8.61ｍを測る。平面形態は隅丸方形状を呈し、長径1.04ｍ、短径0.87ｍ、深さ69㎝を測る。断面形態は箱形状を呈する。SK５の下面に位置する。

遺物は細片を含めて約10点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（57・58）、甕（59）と鋤状の木製品（Ｗ５）であり、床面からの出土がみられる。

SK26（第32図）

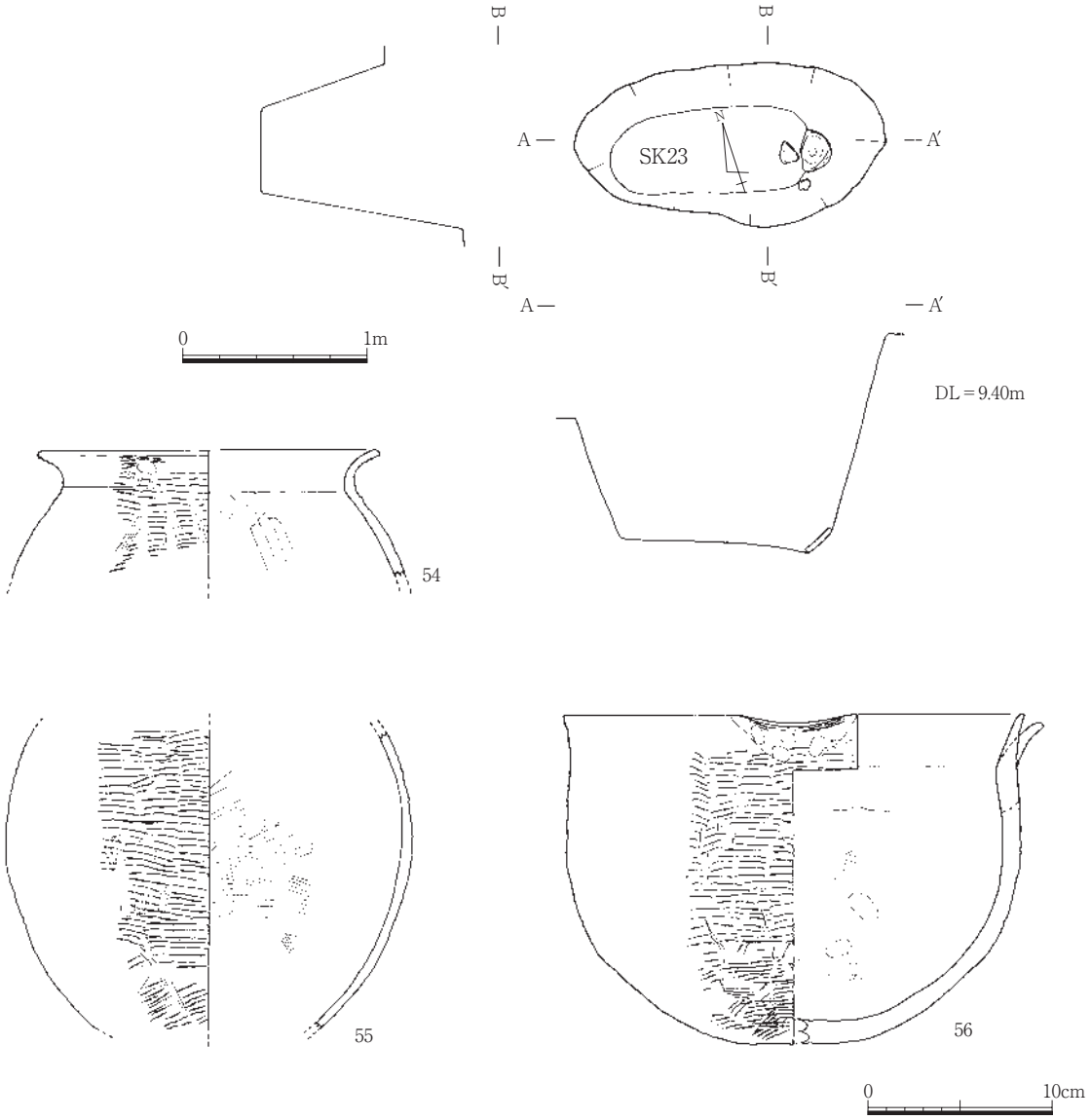
調査区（下面）Ｇ６グリッドに位置する。検出高は8.62ｍを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.88ｍ、短径0.85ｍ、深さ61㎝を測る。断面形態は箱形状を呈する。

遺物は土器片２点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（60）である。

SK27（第32図）

調査区（下面）Ｆ６グリッドに位置する。検出高は8.50ｍを測る。平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径1.33ｍ、短径0.57ｍ、深さ50㎝を測る。断面形態は箱形状を呈する。

遺物は土器片３点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の甕（61・62）で、庄内式土器と考えられる。同一個体の可能性を含んでおり、埋土下層からの出土がみられる。



第31図　SK23平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）

SK28（第34図）

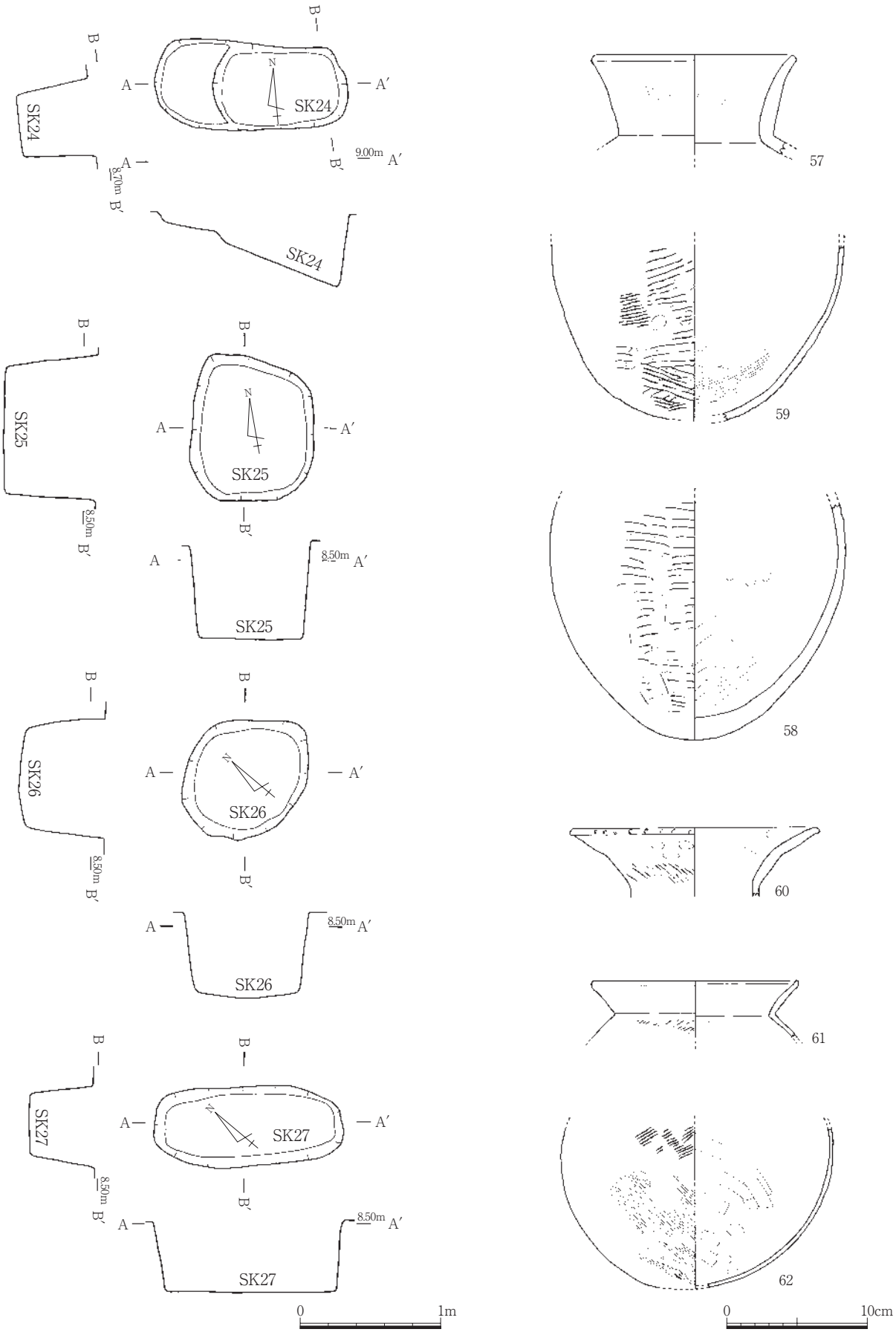
調査区（下面）Ｆ５グリッドに位置する。検出高は8.47ｍを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.62ｍ、短径0.48ｍ、深さ60㎝を測る。断面形態は台形状を呈する。

遺物の出土は確認していない。

SK29（第34図）

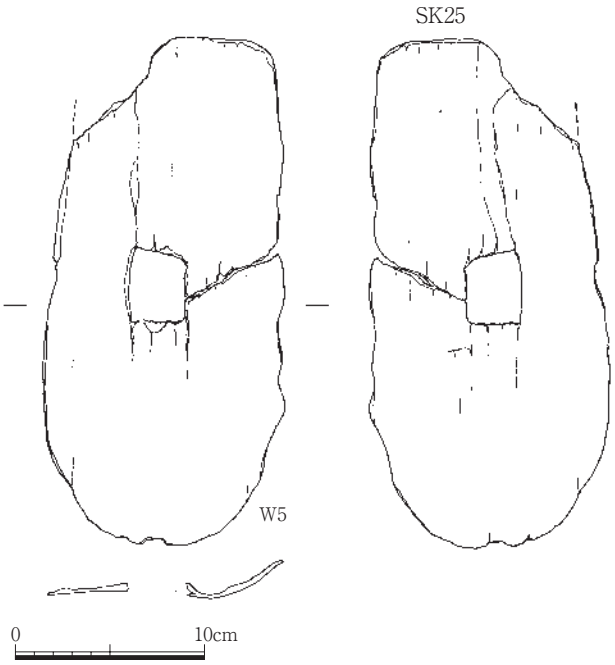
調査区（下面）Ｇ５グリッドに位置する。検出高は8.82ｍを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.69ｍ、短径0.45ｍ、深さ51㎝を測る。断面形態は袋状を呈し、最大径75㎝を測る。SK４の下面に位置する。

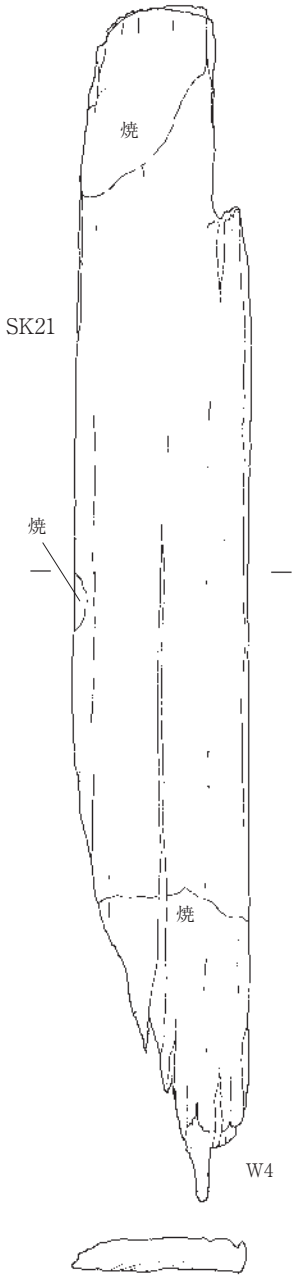
遺物の出土は確認していない。



第32図　SK24～27平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）

SK25





第33図　SK21・25出土遺物実測図（S=1/4）〈木製品〉

SK30（第34図）

調査区（下面）Ｇ５グリッドに位置する。検出高は8.61ｍを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径0.92ｍ、短径0.68ｍ、深さ46㎝を測る。断面形態は箱形状を呈する。

遺物は土器片４点を出土している。

SK31（第34図）

調査区（下面）Ｇ５グリッドに位置する。検出高は8.65ｍを測る。平面形態は円形状を呈し、長径0.42ｍ、短径0.41ｍ、深さ73㎝を測る。断面形態は袋状を呈し、最大径54㎝を測る。

遺物の出土は確認していない。

SK32（第34図）

調査区（下面）Ｇ４グリッドに位置する。検出高は8.62ｍを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.56ｍ、短径0.44ｍ、深さ39㎝を測る。断面形態は袋状を呈し、最大径65㎝を測る。

遺物は土器片１点を出土している。

SK33（第34図）

調査区（中～下面）Ｆ５グリッドに位置する。検出高は9.10ｍを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.89ｍ、短径0.67ｍ、深さ13㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。SK35とは切り合い関係にある。SK９の下面に位置する。

遺物は土器片８点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（63）、甕（64）である。

SK34（第34図）

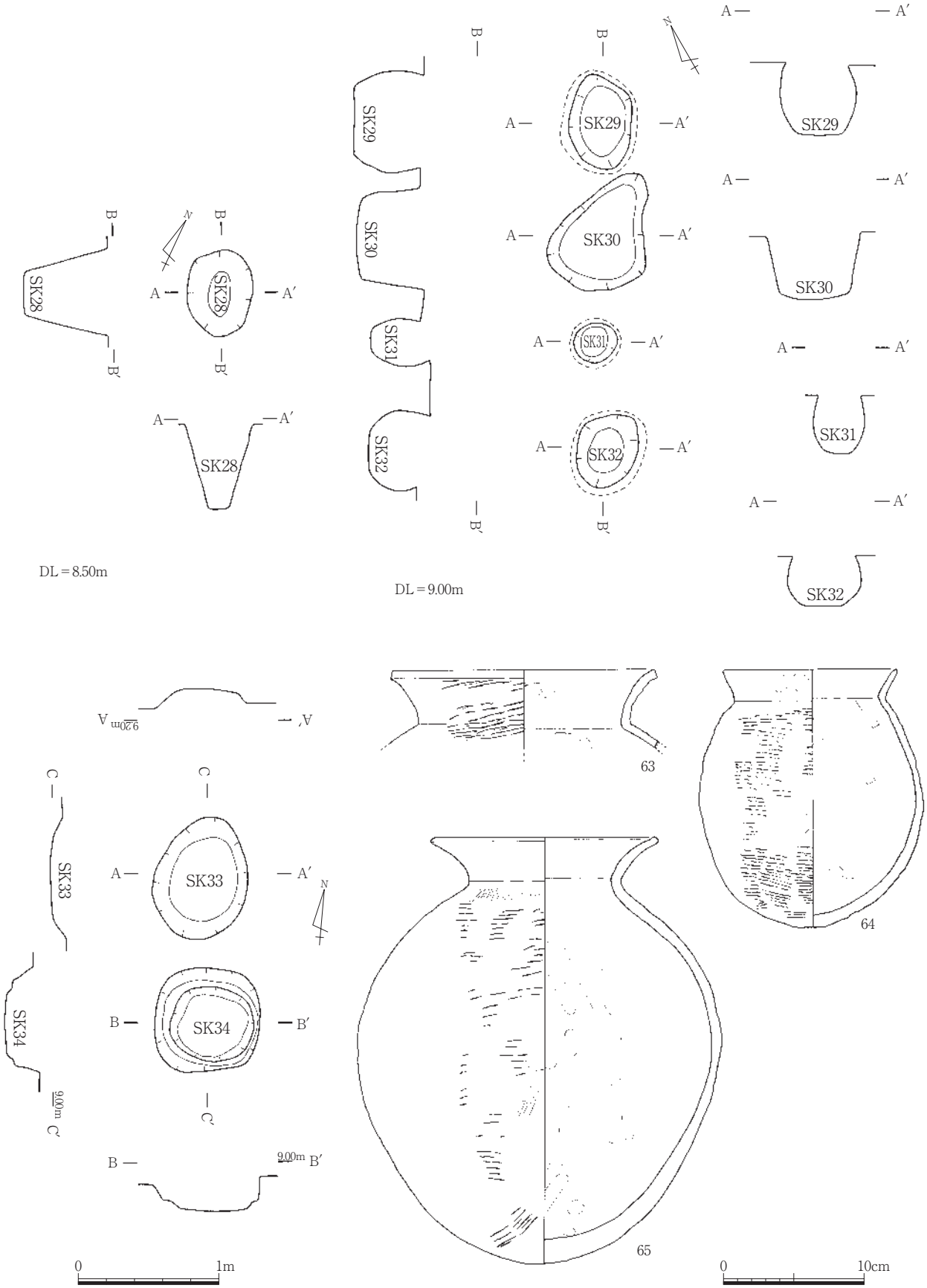
調査区（下面）Ｆ４・５グリッドに位置する。検出高は8.88ｍを測る。平面形態は歪な隅丸方形状を呈し、長径0.75ｍ、短径0.74ｍ、深さ23㎝を測る。断面形態は台形状を呈し、周辺に段部を有する。SK36とは切り合い関係にある。

遺物は細片を含めて約50点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（65）である。

SK35（第35図）

調査区（下面）Ｆ５グリッドに位置する。検出高は8.63ｍを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径0.77ｍ、短径0.35ｍ、深さ54㎝を測る。断面形態は箱形状を呈する。SK33に切られている。SK９の下面に位置する。

遺物は細片を含めて約10点を出土している。



第34図　SK28～34平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）
63・64（SK33）、65（SK34）

SK36（第28図）

調査区（下面）Ｆ４・５グリッドに位置する。検出高は8.57㎝を測る。平面形態は円形状を呈し、長径0.31m、短径0.29m、深さ42㎝を測る。断面形態は袋状を呈し、最大径36㎝を測る。SK34に切られている。

遺物の出土は確認していない。

SK37（第35図）

調査区（下面）Ｆ４グリッドに位置する。検出高は8.77mを測る。平面形態は隅丸方形状を呈するが、西側は未検出である。長径（検出長）1.66m、短径0.88m、深さ22㎝を測る。西側に深さ9㎝を測る落ち込みを有する。断面形態は皿状を呈する。SK10の下面に位置する。

図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の甕（66）で、庄内式土器と考えられる。

SK38（第35図）

調査区（下面）Ｆ４グリッドに位置する。検出高は8.74m を測る。平面形態は不整形状を呈するが、西側は未検出である。長径（検出長）1.61m、短径1.72m、深さ15㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、北側に段部を有する。SK11の下面に位置する。

遺物は細片を含めて約110点を出土している。土器集中部がみられ、在地産と考えられる二重口縁状を呈したものや、搬入品である東阿波型の胴部も含まれている。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（67～69）、甕（70）、鉢（71）で、（70）は東阿波型土器と考えられる。

SK39（第36図）

調査区（下面）Ｅ５・６グリッドに位置する。検出高は8.74mを測る。平面形態は不整形状を呈するが、北側は未検出である。長径（検出長）2.57m、短径（検出長）1.41m、深さ15㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。SK８の下面に位置する。

遺物は土器片16点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の甕（72）である。

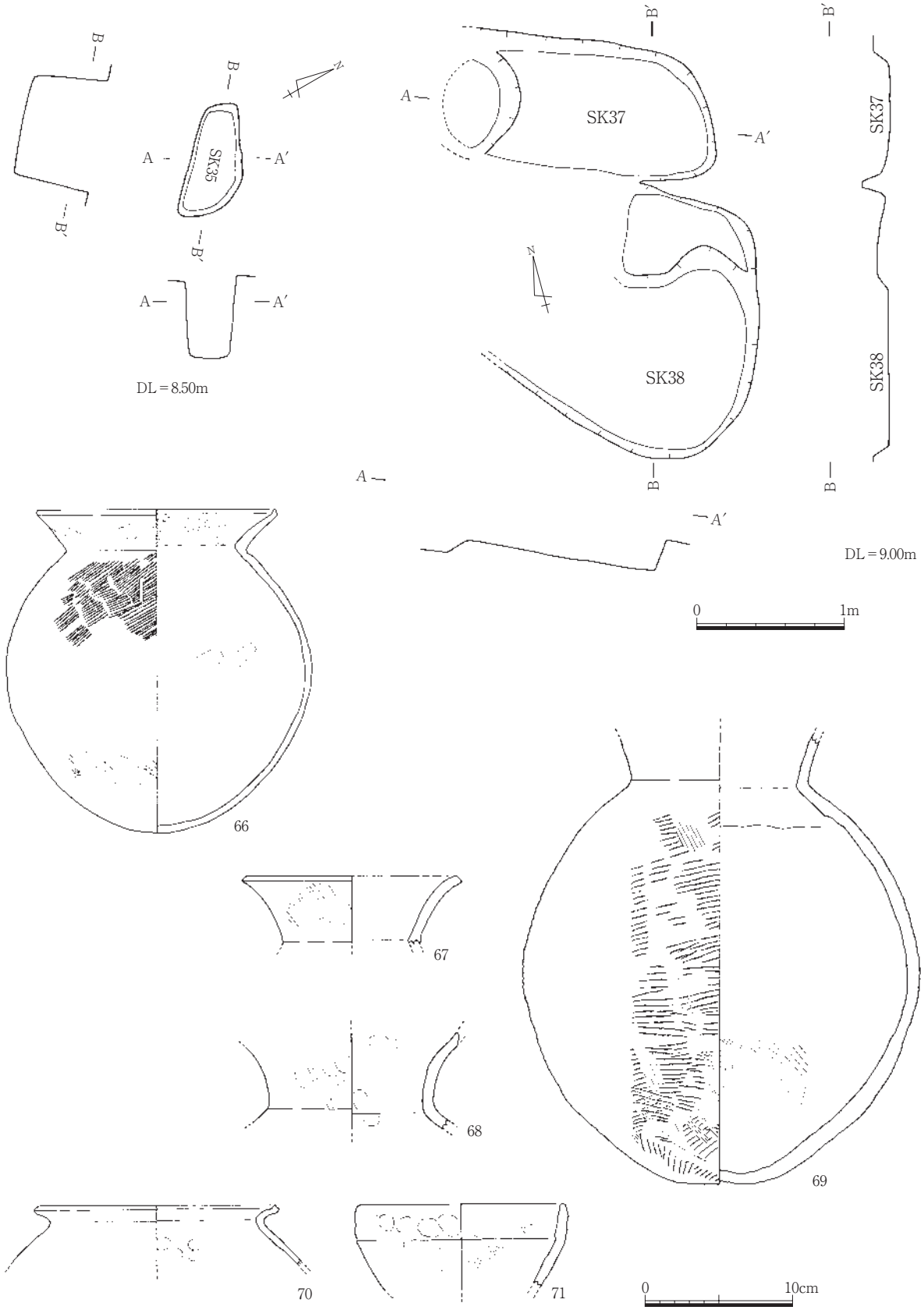
SK40（第36図）

調査区（下面）Ｅ６･Ｆ６グリッドに位置する。検出高は8.49mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.78m、短径0.53m、深さ41㎝を測る。断面形態は台形状を呈し、北側に段部を有する。SK８の下面に位置する。

遺物の出土は確認していない。

SK41（第36・37図）

調査区（下面）Ｅ６グリッドに位置する。検出高は8.45mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径1.44m、短径0.73m、深さ41㎝を測る。断面形態は箱形状を呈する。SK８の下面に位置する。



第35図　SK35・37・38平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）
66（SK37）、67～71（SK38）

遺物は土器片５点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の甕（73・74）と木製品（W６）であり、床面からの出土がみられる。

SK42（第39図）

調査区（下面）Ｅ４グリッドに位置する。検出高は8.76mを測る。平面形態は不整形状を呈し、長径1.34m、短径0.79m、深さ20cmを測る。断面形態は皿状を呈する。SD１－１北端の土坑状落ち込み部の下面に位置する。

遺物は土器片５点を出土している。

SK43（第39図）

調査区（下面）Ｅ４グリッドに位置する。検出高は8.52mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.10m、短径0.63m、深さ32cmを測る。SD４の床面から検出されるが、切り合い関係は不明である。断面形態は箱形状を呈する。

遺物の出土は確認していない。

SK44（第39図）

調査区（下面）Ｅ４グリッドに位置する。検出高は8.49mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.56m、短径0.41m、深さ23cmを測る。SD４の床面から検出されるが、切り合い関係は不明である。断面形態は箱形状を呈する。

遺物の出土は確認していない。

SK45（第38図）

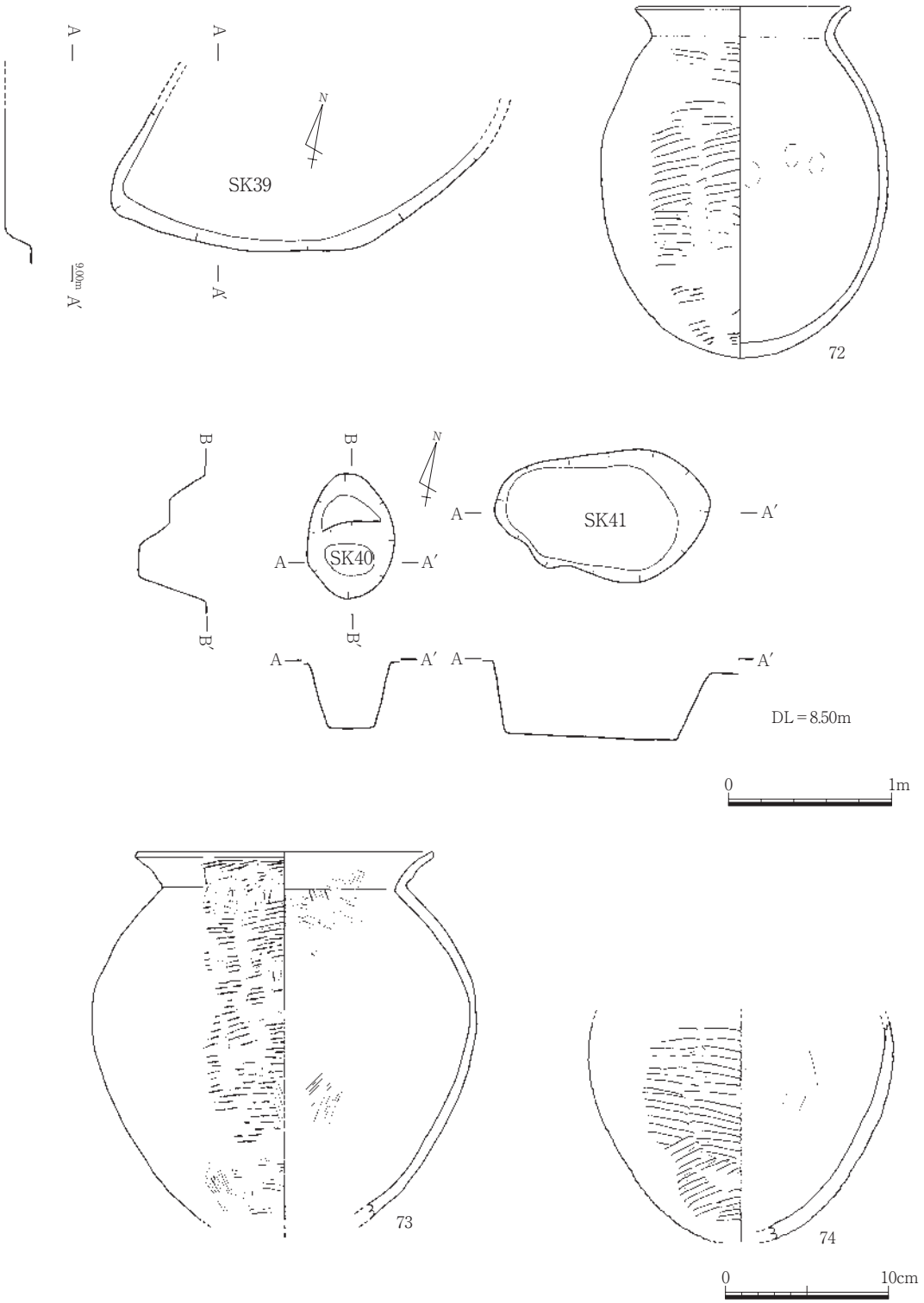
調査区（下面）Ｄ５グリッドに位置する。検出高は8.48mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径2.45m、短径1.34m、深さ58cmを測る。南・東側は土坑状遺構と切り合い関係にある。断面形態は台形状を呈する。SK13の下面に位置する。

遺物は東阿波型の口縁部を含む土器片８点を出土している。図示したものは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（75）と木製品（W－７・８）であり、床面からの出土がみられる。

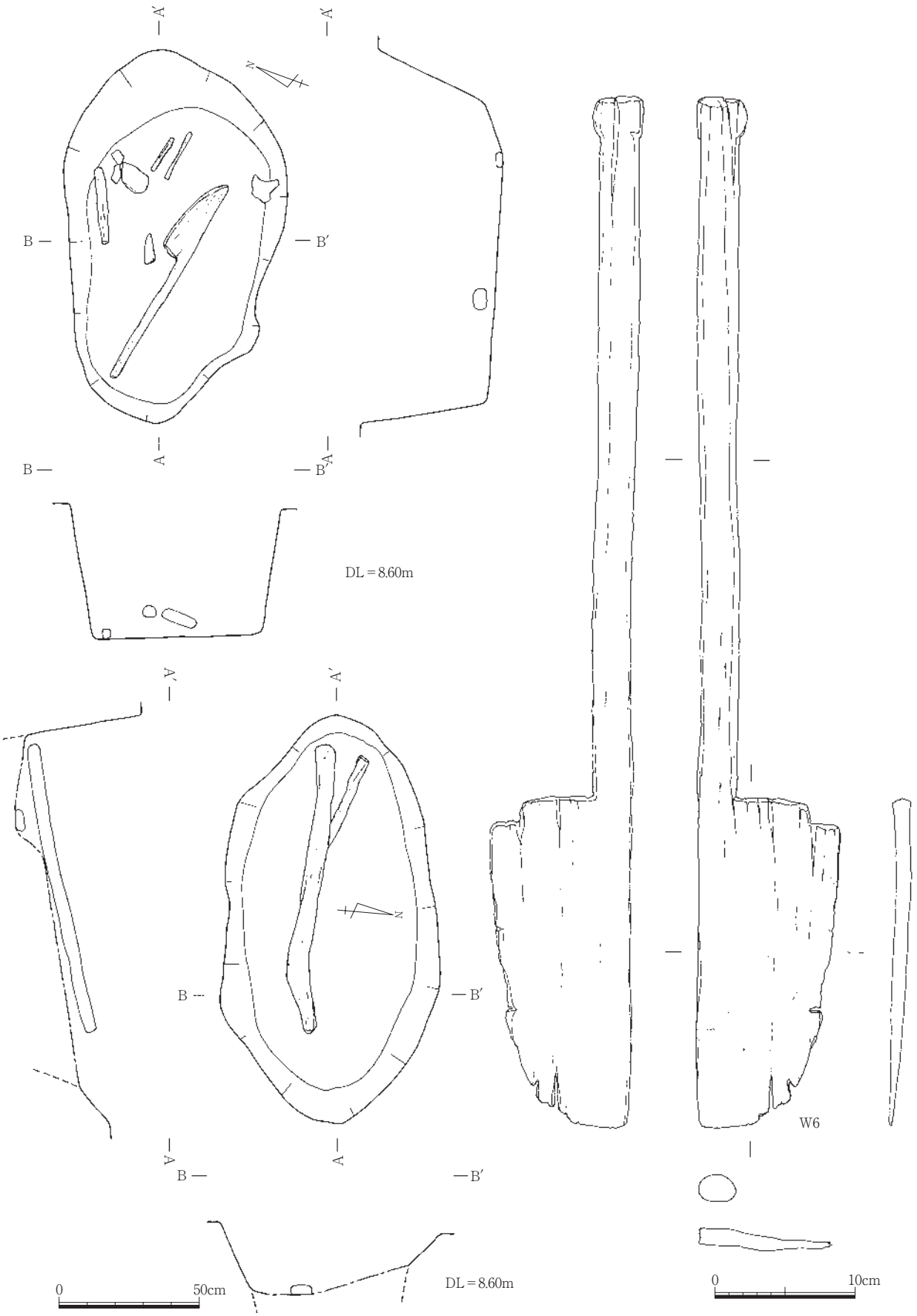
SK46（第39図）

調査区（下面）Ｃ４・５／Ｄ４・５グリッドに位置する。検出高は8.42mを測る。平面形態は隅丸長方形状を呈し、長径1.05m、短径0.81m、深さ1.06mを測る。断面形態は箱形状を呈する。

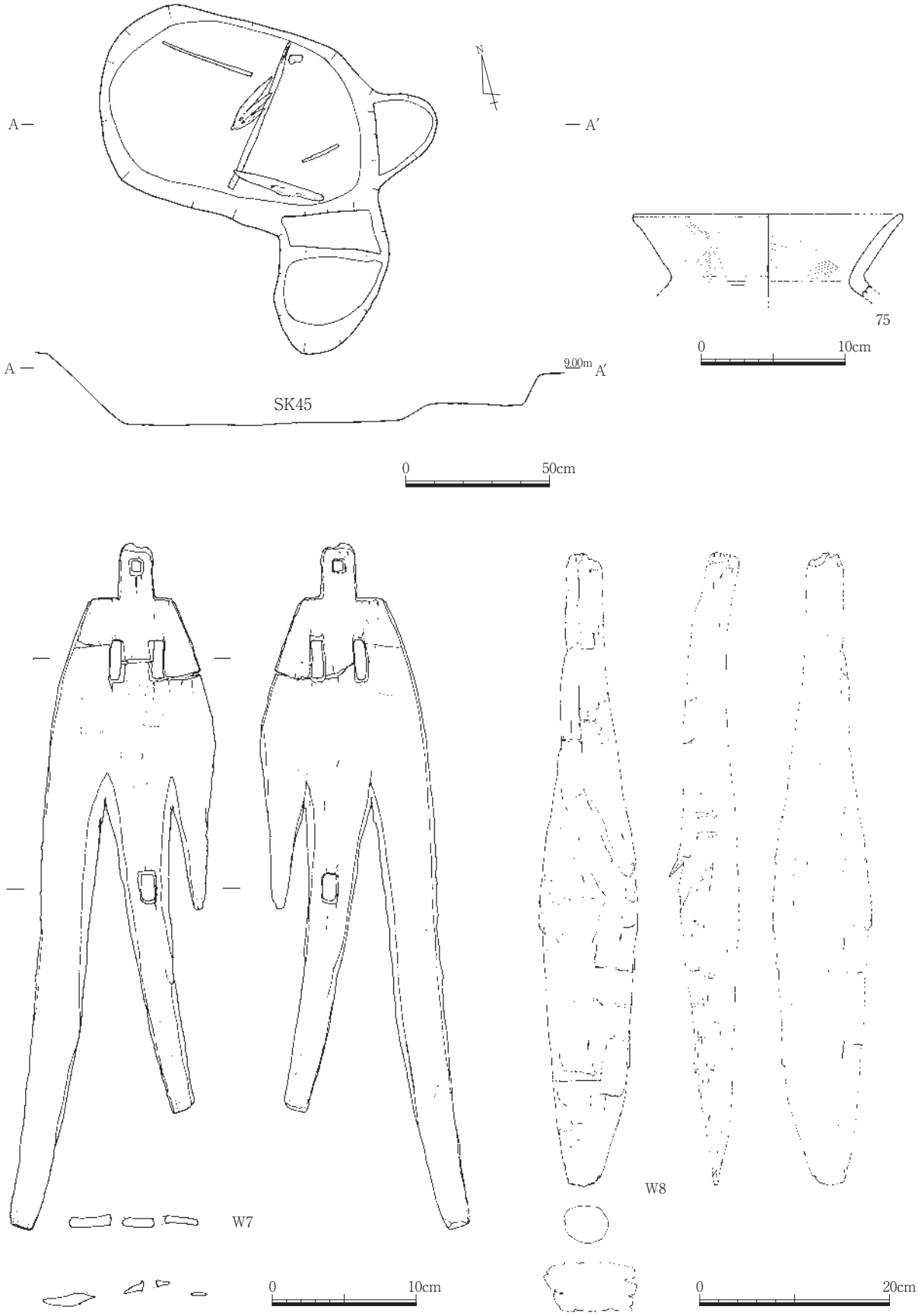
遺物の出土は確認していない。



第36図　SK39～41平面・エレベーション図（S=1/40）　出土遺物実測図（S=1/4）



第37図　SK41遺物出土状況平面・エレベーション図（S=1/20）　出土遺物実測図（S=1/4）

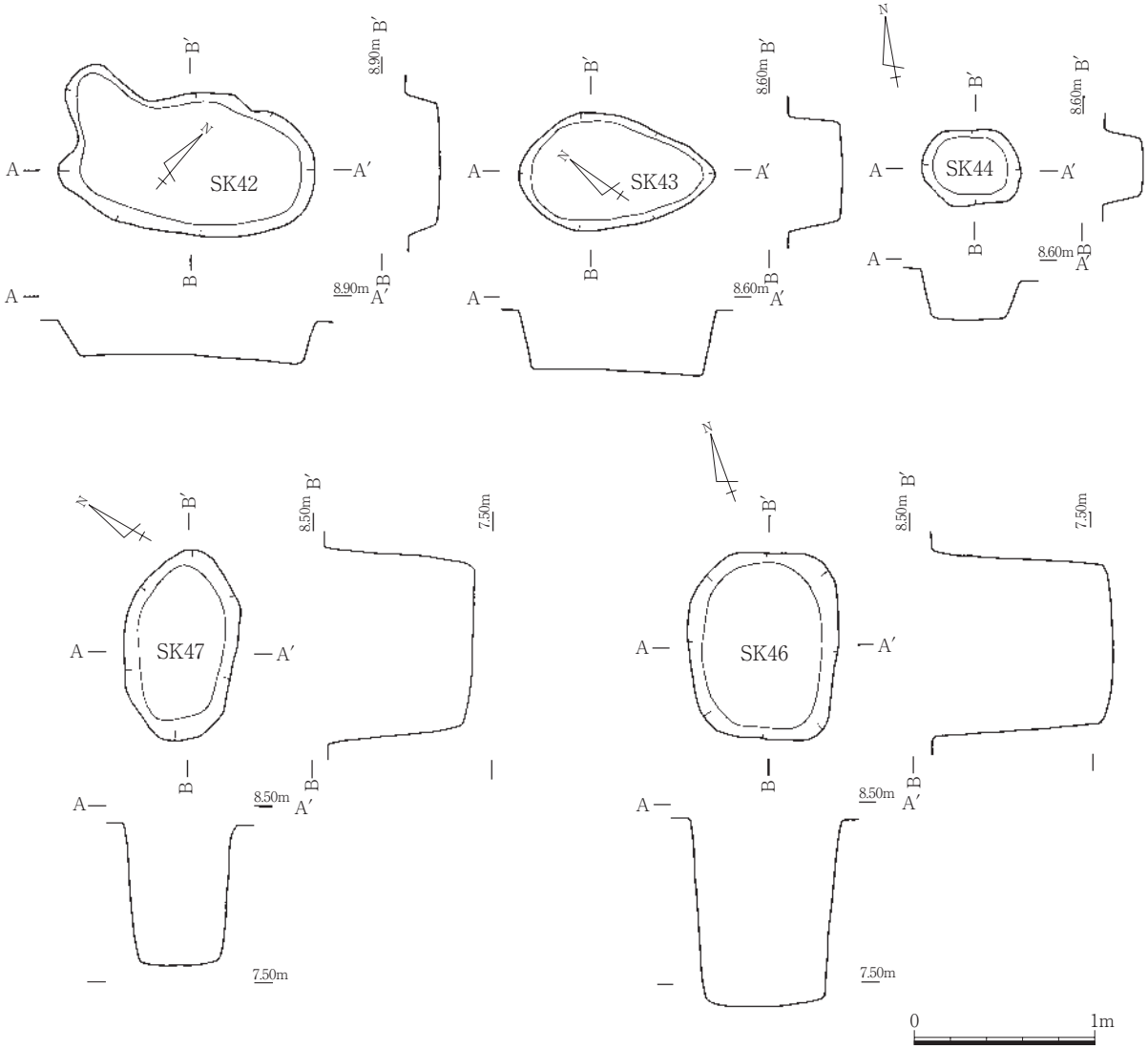


第38図　SK45遺物出土状況平面・エレベーション図（S=1/20）　出土遺物実測図（S=1/4、1/6）

SK47（第39図）

調査区（下面）Ｄ４グリッドに位置する。検出高は8.38mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径1.06m、短径0.61m、深さ78cmを測る。SD４・５と切り合い関係にある。断面形態は箱形状を呈する。SD１－２の下面に位置する。

遺物の出土は確認していない。



第39図　SK42～44・46・47平面・エレベーション図（S=1/40）

溝（SD）

SD4－1（第41・42図）

調査区（下面）Ｄ３・４／Ｅ３・４グリッドに位置する。東端はトレンチにより未検出である。隣接するSD4－2に接続すると考えられる。西側の床面からSK43・44を検出しているが、切り合い関係は不明である。検出高は東端で8.74m、西端で8.68mを測る。主軸方向はＮ－52°－Ｗで、検出規模は5.74×1.56m、床面高は東端で8.50m、西端で8.39mを測る。断面形態は箱形状を呈し、最深部で31cmを測る。床面からＰ６を検出している。

遺物は土器片２点を出土している。図示したのは敲石（89）である。

SD4－2（第40～42図）

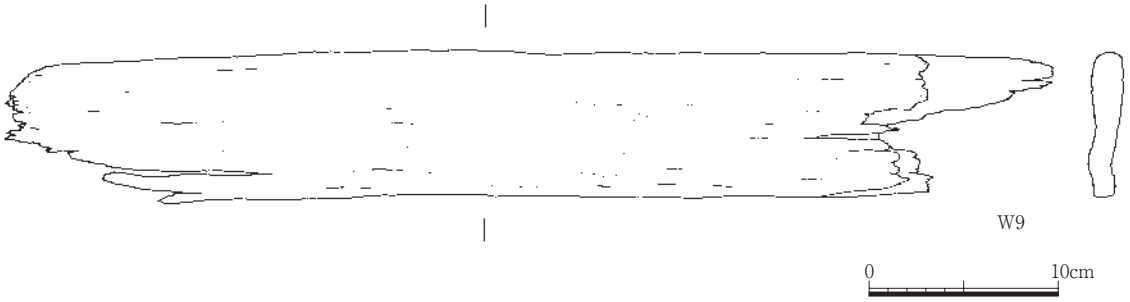
調査区（下面）Ｃ４／Ｄ３・４グリッドに位置する。西端はトレンチにより未検出である。隣接するSD4－1に接続すると考えられる。SK47・SD5と切り合い関係にある。検出高は東端で8.51m、西端で8.52mを測る。主軸方向はＮ－79°－Ｅで、検出規模は4.61×2.07m、床面高は東端で8.34m、西端で8.43mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で9cmを測る。床面からＰ５を検出している。

遺物は細片を含めて44点を出土している。図示したものは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（79）、甕（82～84）、高杯（88）と板状の木製品（Ｗ９）である。

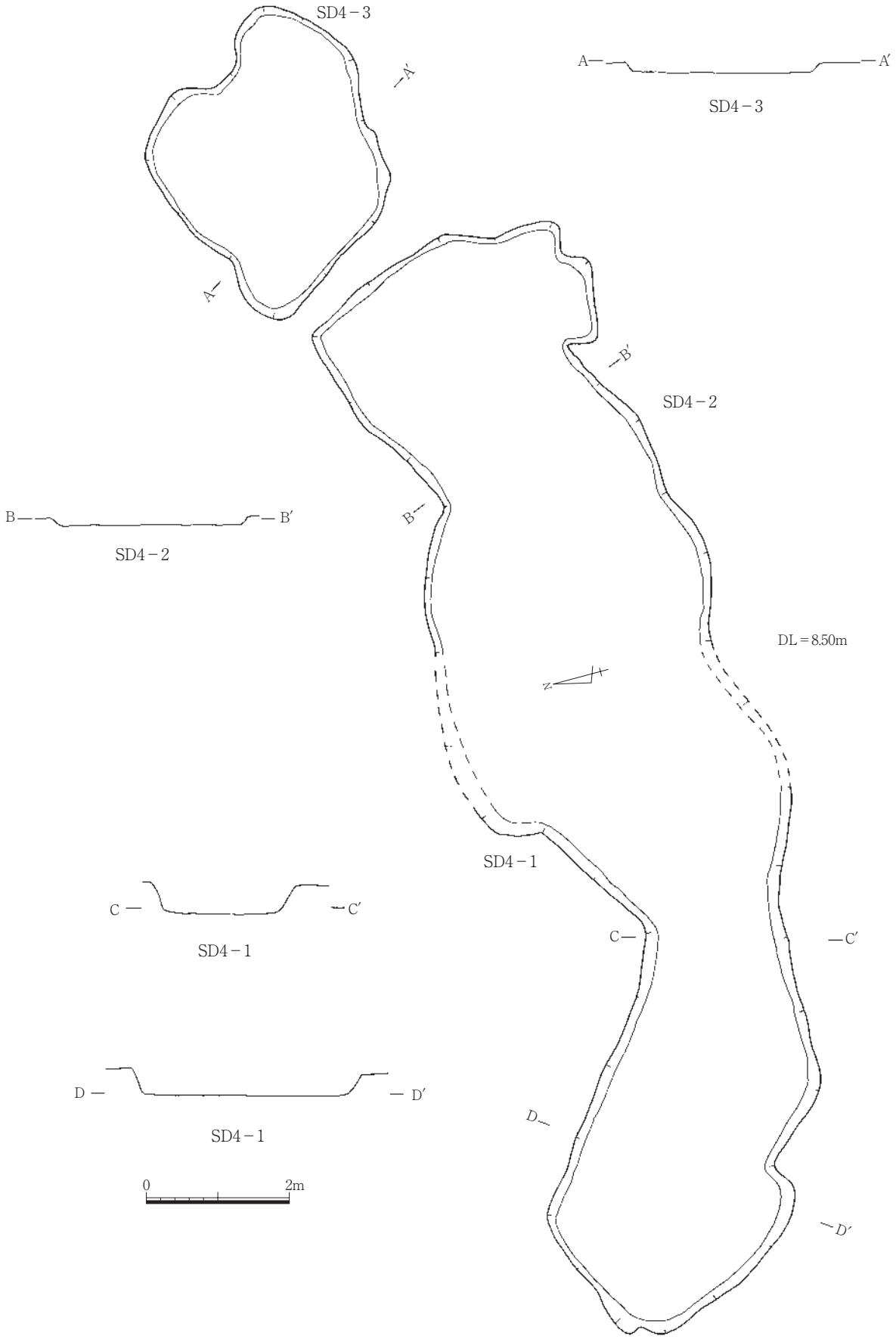
SD4－3（第41・42図）

調査区（下面）Ｂ４・５／Ｃ５グリッドに位置する。検出高は8.52mを測る。平面形態は不整形状を呈し、検出規模は2.21×2.20mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で18cmを測る。床面からＰ４を検出している。

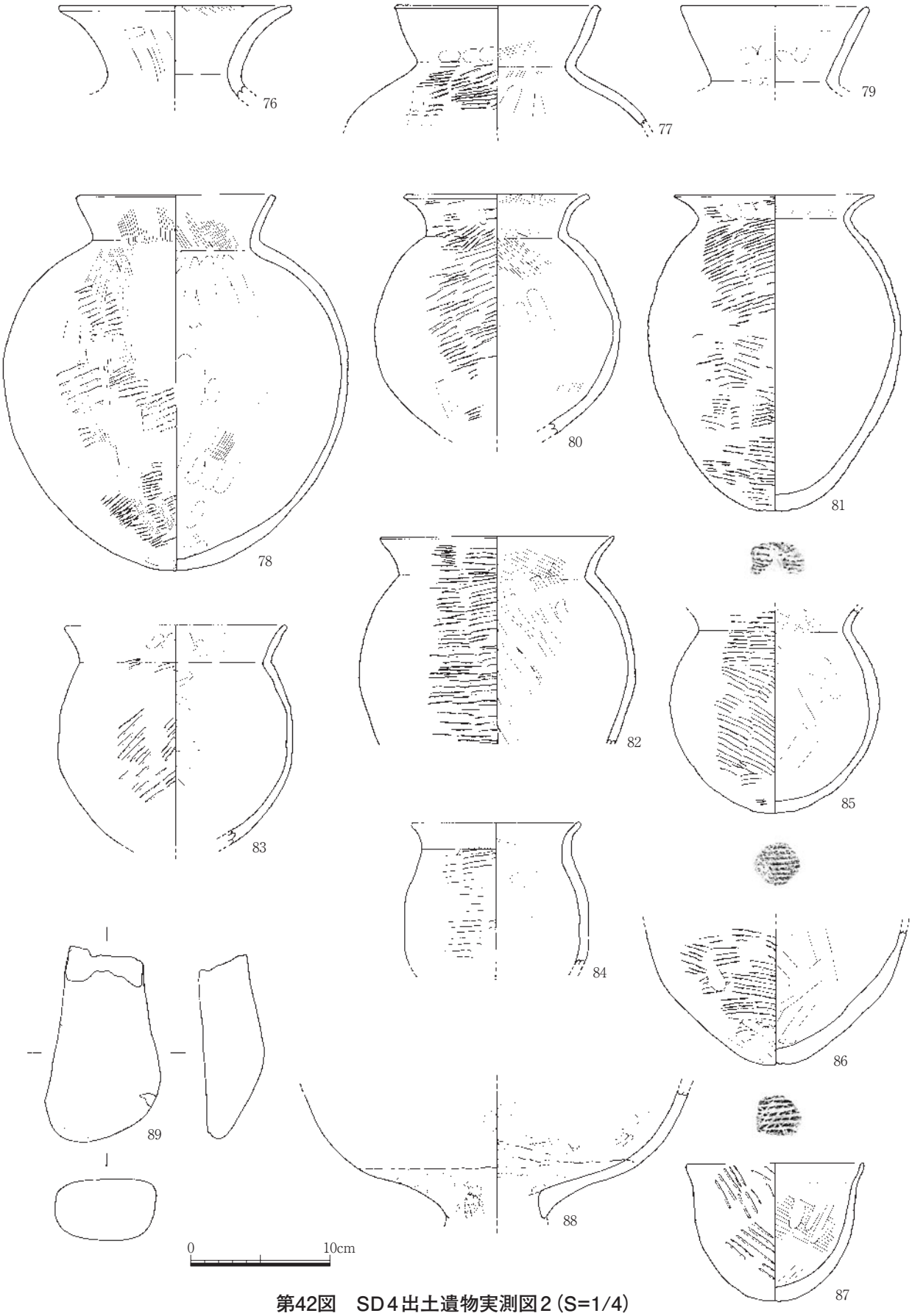
遺物は細片を含めて約90点を出土している。図示したのは弥生後期終末から古墳時代初頭頃の壺（76～78・86）、甕（80・81・85 ）、鉢（87）である。



第40図　SD４出土遺物実測図１（S=1/4）〈木製品〉



第41図　SD４平面・エレベーション図（S=1/80）

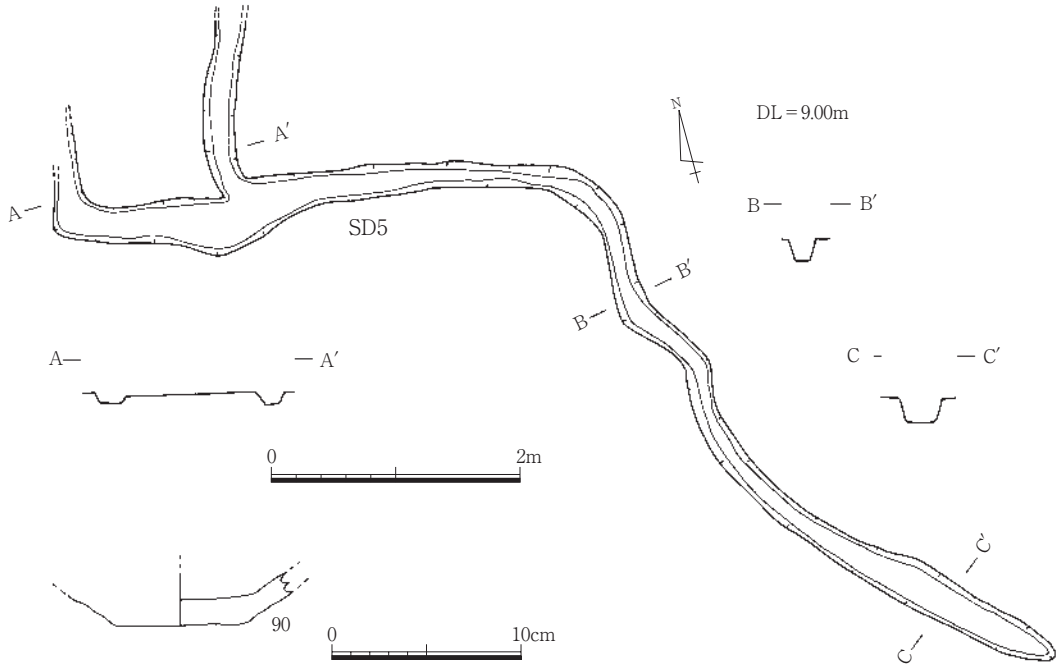


第42図　SD４出土遺物実測図２（S=1/4）

SD５（第43図）

調査区（下面）Ｄ４・５／Ｅ５／Ｆ５グリッドに位置する。南側はSD４－２と切り合い関係にある。北端は分岐し、トレンチにより検出を終える。検出高は北端で8.72m、南端で8.55mを測る。検出規模は14.55×0.30m、床面高は北端で8.65m、南端で8.26mを測る。断面形態は皿状を呈し、最深部で19cmを測る。

遺物は細片を含めて弥生土器片を中心に15点を出土している。図示したのは弥生後期の壺（90）の底部である。



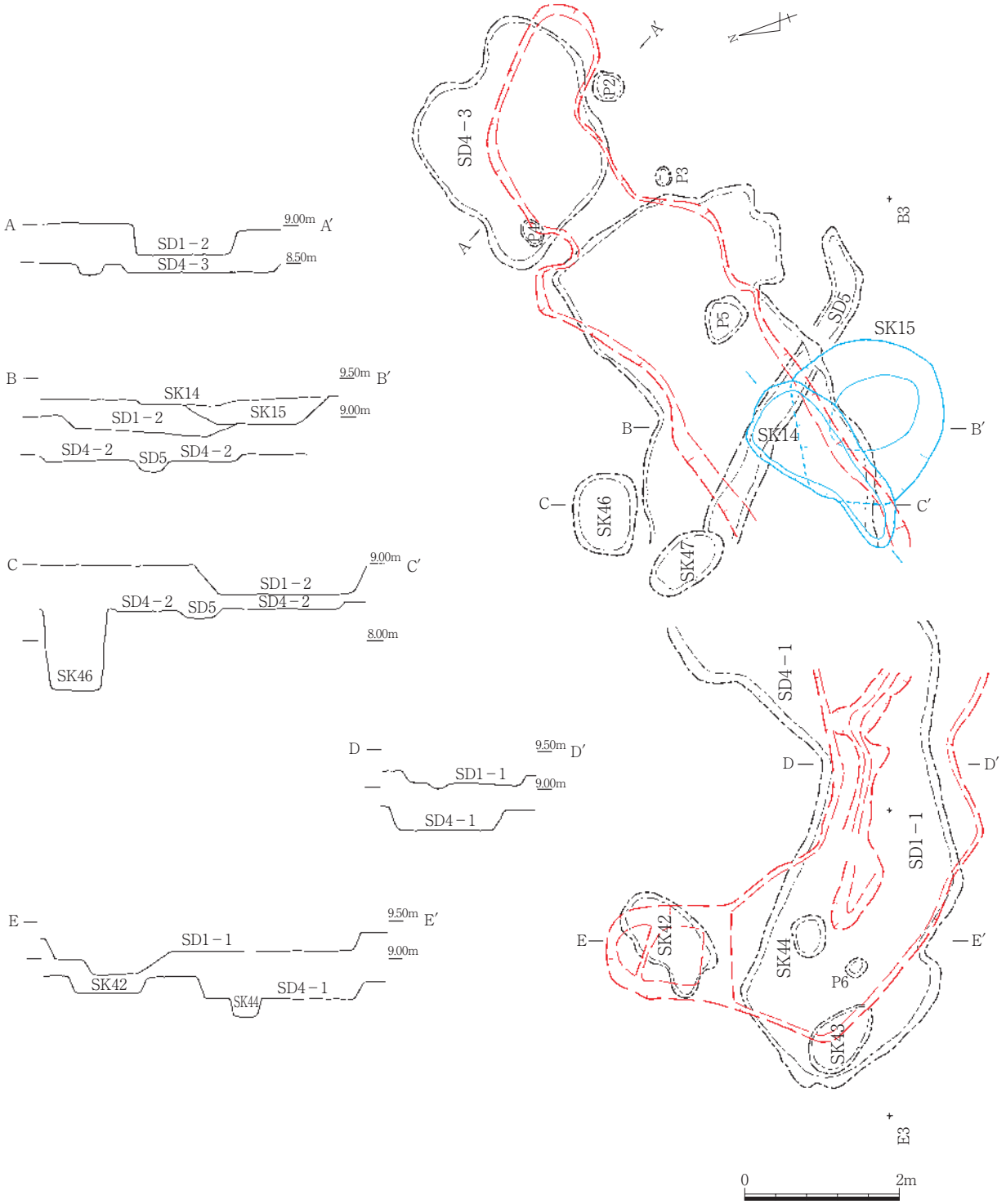
第43図　SD５平面・エレベーション図（S=1/60）　出土遺物実測図１（S=1/4）

４．遺構の新旧関係

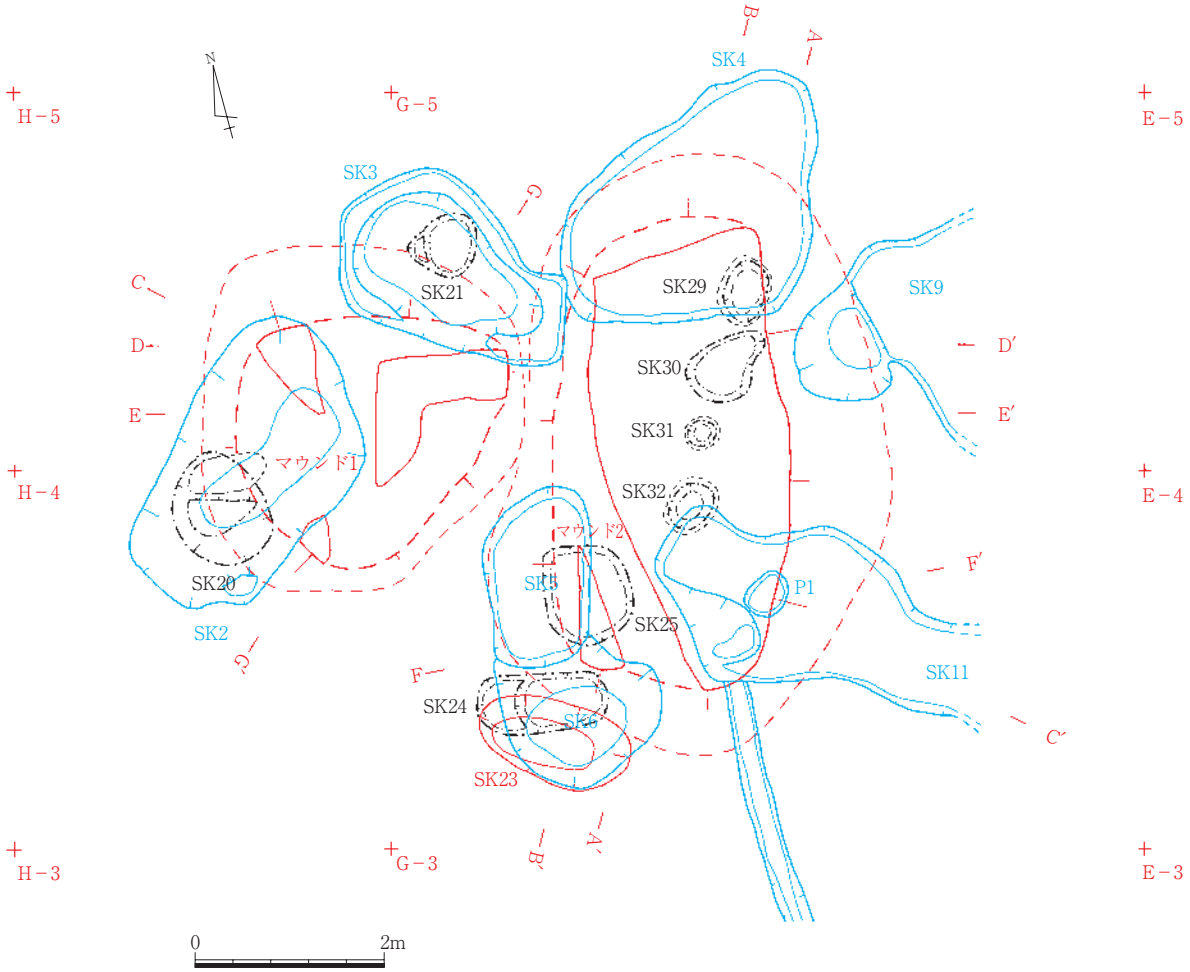
SD１・SD４周辺とマウンド１・２周辺の遺構の新旧関係を平面図・エレベーション図（第44図～第46図）によって示す。

SD１・SD４周辺（第44図）において、上面遺構として把握した遺構はSK14・SK15（青）とSD１（赤）である。遺構の切り合いから、（旧）SD１→SK15→SK14（新）の新旧関係が認められるが、出土遺物による時期差はほとんど認められない。一点破線（黒）で示したＰ2～Ｐ6、SK42～46、SD４、SD５が下面遺構である。SD５とSD４についてはSD５が先行する遺構であり、出土遺物（平底の壺・第43図－90）からも弥生時代後期後半以前の時期が想定されている。SK47はSD４に先行することが確認されているが、それ以外の遺構の新旧関係は明らかではない。

SD1（上面）・SD4（下面）は重なった地点に形成され、SD1の西北端の土坑状の落ち込み部の下にはSK42が形成されるなど、いくつかの地点で上面と下面での遺構の重なりが確認されている。

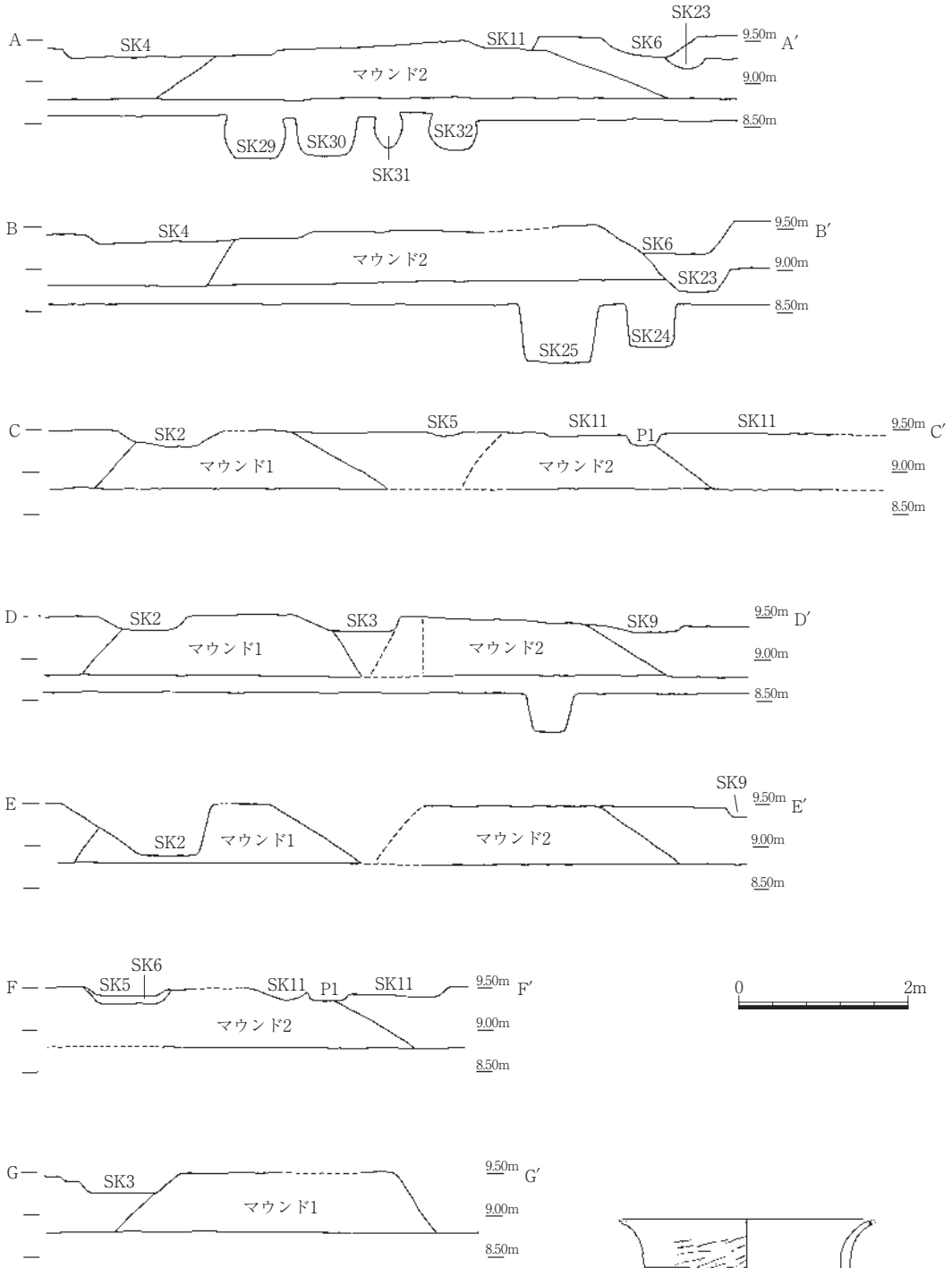


第44図　SD1・4と周辺遺構の新旧関係・平面・エレベーション図（S=1/80）

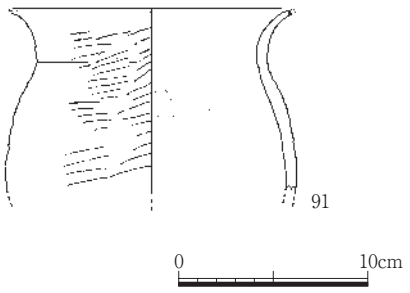


第45図　マウンド１・２と周辺遺構の新旧関係・平面図（S=1/80）

マウンド1・2周辺はさらに複雑に遺構が重なり合った状況を呈している。第45図に平面の重なりを、第46図に対応するエレベーションを示した。上面で確認された遺構は、青（実線）で示したSK2～6、SK9、SK11、P1、SD3である。これらの遺構の中で、SK5とSK6、SD3とSK11には切り合い関係がある。中面遺構は赤（実線及び点線）で示した。点線は推定復元部分である。マウンド1及びマウンド2、SK23が中面遺構である。下面遺構は黒（一点破線）で示したSK20・21・24・25・29～32の土坑である。



第46図　マウンド１・２と周辺遺構の新旧関係・エレベーション図（S=1/80）



第47図　包含層出土遺物実測図（S=1/4）

表３　遺構計測表

遺構 No.	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	肩部標高（m）	備　　考
P1	55.0	40.0	9.0	9.45	
P2	40.0	38.5	15.0	8.49	
P3	25.0	24.0	14.0	8.53	
P4	36.0	27.5	10.0	8.51	
P5	63.0	49.0	19.5	8.37	
P6	29.0	23.5	36.0	8.50	
SD1-1	(502.0)	195.0	24.0	9.27	
SD1-2	(786.0)	161.0	39.0	8.90	SD1－1と同じ遺構。Ｂ－4杭付近。
SD2-1	(610.0)	51.0	7.0	9.47	Ｇ－8・Ｆ－8杭付近。
SD2-2	(722.0)	49.0	8.0	9.17	Ｄ－8・Ｂ－8杭付近。西から東に向かって下がっている。
SD3	(355.0)	24.5	6.0	9.66	南側は調査区外に延びる。北側はSK11に切られる。南から北に向かって下がっている。遺物は無い。
SD4-1	(574.0)	156.0	31.0	8.70	
SD4-2	(461.0)	207.0	9.0	8.50	SK41・SD10-2として調査。
SD4-3	221.0	220.0	11.0	8.51	SK40・SD10-1として調査。
SD5	(1455.0)	30.0	19.0	8.75	北側は不明。南側は調査区外に延びる。
SK1	(642.0)	181.5	21.0	9.30	南側は試掘トレンチにより消滅。
SK2	326.5	162.0	60.0	9.50	土器Ｃ出土。
SK3	257.0	151.0	28.5	9.50	
SK4	265.0	244.0	12.5	9.40	
SK5	188.0	113.5	7.0	9.47	SK6を切る。
SK6	(172.0)	172.0	38.0	9.58	SK5に切られる。
SK7	324.0	197.0	12.5	9.33	SK8を切る。
SK8	(380.0)	287.0	7.5	9.26	SK7に切られる。
SK9	274.5	262.5	30.0	9.40	
SK10	126.0	(122.0)	17.5	9.41	
SK11	543.5	92.5	9.0	9.45	
SK12	97.5	88.0	45.0	9.65	
SK13	346.0	(117.0)	47.0	9.11	約半分が試掘トレンチにより消滅する。肩部は西から東に向かって低くなる。
SK14	256.0	103.0	10.5	9.23	SK15を切る。
SK15	216.0	92.5	33.0	9.24	SK14に切られる。
SK16	236.5	218.0	56.0	9.23	
SK17	549.0	240.0	52.0	9.06	
SK18	171.5	117.0	92.0	8.75	底面は135－192cm。
SK19	70.5	54.0	71.0	8.70	
SK20	125.5	97.0	110.0	8.80	底面の東部分オーバーハングする。
SK21	75.0	64.5	72.0	8.70	Ｇ－5杭付近の遺構。
SK22	67.0	48.5	32.0	8.68	
SK23	170.0	79.0	24.0	9.00	土器Ｄ出土。
SK24	137.0	62.0	52.0	8.60	
SK25	104.0	87.0	69.0	8.59	
SK26	88.5	85.0	61.0	8.60	
SK27	133.5	57.0	50.0	8.52	
SK28	62.0	48.0	60.0	8.47	
SK29	69.0	45.0	51.0	8.62	膨らみ部54.0-75.0cm。
SK30	92.5	68.0	46.5	8.60	
SK31	42.0	41.0	73.5	8.56	底面は51.5-53.5cmを測る。
SK32	56.0	44.0	39.0	8.57	膨らみ部51.5-65.0cm。
SK33	89.0	67.0	13.0	9.13	Ｅ－4杭付近の遺構。
SK34	75.0	74.0	23.0	8.90	
SK35	77.0	35.0	54.5	8.63	
SK36	31.5	29.5	42.0	8.67	膨らみ部36.5cm。
SK37	(166.0)	88.0	22.0	8.80	
SK38	(161.0)	172.0	15.0	8.70	
SK39	(257.0)	(141.0)	15.0	8.75	
SK40	78.0	53.0	41.0	8.48	
SK41	144.0	73.0	44.5	8.46	
SK42	134.0	79.0	20.0	8.70	
SK43	110.0	63.0	32.0	8.51	
SK44	56.0	41.5	22.5	8.49	
SK45	245.0	134.0	58.0	8.46	
SK46	105.0	81.0	106.5	8.42	
SK47	106.0	61.5	78.0	8.40	

遺 物 観 察 表

表４　遺物観察表（弥生土器・土師器・近世陶器・土製品・石器）

図版番号	遺構検出面・層位	種別	器種	部位および分類	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	色調 内面	外面	胎土	調整 内面	外面	形態上の特徴	備考
1	TR10 TR11	土師器	壺	口縁	(21.5)	(4.5)	—	—	灰黄褐	橙	チャート・微細粒砂多・2mm大の粗粒砂少	ヨコナデ、ハケ	ハケ	口唇は面をなす。口縁は大きくラッパ状に開く。	
2	TR10	土師器	甕	口縁～上胴部	(15.4)	(6.1)	—	—	灰黄褐	にぶい橙	チャート・1～2mm前後細粒砂含	指頭圧痕、ナデ	ナデ、タタキ（水平）	口唇は丸く仕上げる。口縁はわずかに外反。	
3	TR10 TR11	土師器	甕	口縁～上胴部	(14.4)	(9.9)	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	チャート・1～3mm大の粗粒砂多・微細粒砂多	ナデ、指頭圧痕	タタキ	口唇は丸く仕上げる。口縁はわずかに外反。	
4	TR10 TR11	土師器	壺	胴部～底部	—	(18.3)	26.2	5.0	にぶい黄橙	橙	チャート・1mm未満の微細粒砂多量	ユビナデ、ハケ	胴部タタキ、底部タタキ＋ハケ	底面はわずかに平坦面を残し、底面方向からのタタキ目あり。	底厚14mm。
5	TR12	土製品	土錘	管状土錘	全長 4.9	全厚 1.8	孔径 0.5	—	橙	橙	精選された胎土で砂粒をほとんど含まない	孔径は5mmで、中央が膨らむ。			
6	TR14	近世陶器 唐津灰釉	皿	底部	—	(2.3)	—	5.15	オリーブ黄	灰白	唐津胎土の特徴を探し、転写	ケズリ	ケズリ	見込みに4箇所胎土目が残る。高台外面は露胎。	近世前期。
7	SK1・B	土師器	壺	口縁～上胴部	(17.2)	(11.8)	—	—	灰白	灰白	チャート・1～3mm前後の粗粒砂含・微細粒砂多量	ナデ、指頭圧痕	タタキ、ハケ、ナデ	口縁は大きくラッパ状に開く。口唇は面をなす。	磨耗顕著。
8	SK1	土師器	甕	口縁	(14.0)	(2.8)	—	—	浅黄橙	にぶい橙	チャート・1～2mm前後の細粒砂少	ユビナデ（タテ）	タタキ	頸部で稜をなしてくの字状に強く屈曲、口縁部は直線的に延びる。口唇は面をなす。	
9	SK1 №17	土師器	甕	胴部	—	(14.0)	(17.0)	—	浅黄橙	浅黄橙	チャート・2～4mm前後の粗粒砂少量・微細粒砂多量	ユビナデ（タテ）	タタキ	胴部は卵型。	外面炭化物付着。
10	SK1 №14・15 SK48	土師器	壺	底部	—	(12.4)	—	—	褐灰	浅黄橙	チャート・1～2mm前後の細粒砂含	ハケ（ヨコ方向）	タタキ＋ハケ	丸底。	底厚20mm。
11	SK1 №2	土師器	甕	胴部～底部	—	(19.4)	18.0	4.0	オリーブ黒	灰黄褐	チャート・1mm前後の細粒砂多・微細粒砂含・粗粒砂をほとんど含まない	ユビナデ（タテ）	ナデ、タタキ、底部タタキ＋ハケ、底面はナデによりタタキ目の痕跡を留めない。	丸底で卵型。	外面胴部中位より上に炭化物付着。
12	SK1 A	土師器	甕	胴部～底部	—	(12.8)	17.3	5.0?	灰白	浅黄	チャート・1～3mm前後の粗粒砂多	ハケ、ナデ、指頭圧痕	タタキ、ナデ	中位より上に炭化物付着。	磨耗顕著　底厚15mm。
13	SK1	土師器	鉢	完形・椀状	(14.2)	(5.9)	—	3.2	浅黄橙	浅黄橙	チャート・精選された胎土で1～2mm前後の粗粒砂少量含む・微細粒砂あり	指頭圧痕、ナデ	ナデ、底部付近タタキ	椀状に内湾し、丸く仕上げた口唇に至る。底部はわずかに突出する。	底厚10mm。
14	SK1	土師器	鉢（甕）	底部	—	(1.6)	—	3.9	にぶい黄橙	灰白	チャート・2mm前後の粗粒砂少	ナデ、指頭圧痕	タタキ	突出した底部	底厚11mm。
15	SK2 20	土師器	壺	完形	12.0	17.5	15.3	5.0	浅黄	浅黄	胎土は精選されており、砂粒をほとんど含まない	ナデ	ハケ、ナデ	若干扁平気味の球形の胴部から、口縁は直線的に外上方へ立ち上がる。	搬入品（東阿波型土器）。
16	SK2 21	土師器	壺	口縁	(18.0)	6.5	19.6	5.0	褐灰	暗灰黄	胎土は精選されており、チャート粗粒砂2mm大わずかに含むのみ	ハケ、ナデ	強いヨコナデ、ナデ、タタキ若干のこる	口唇丸く外反気味に開いて立ち上がり。	
17	SK2 底	土師器	甕	上胴部～頸部	—	(6.9)	—	—	灰黄	灰黄	チャート・1～2mm前後の粗粒砂多	ハケ、ナデ	タタキ、指頭圧痕		磨耗顕著。
18	SK4	土師器 庄内	甕	口縁	(16.0)	(3.9)	—	—	灰褐	褐灰	角閃石およびガラス質の鉱物を含む微細粒砂多量	ヘラケズリ（左→右）	ヨコナデ	口唇は丸みを帯び、上方へわずかに立ち上がる。	庄内式。
19	SK9 SK9底	土師器	壺	口縁～上胴部	12.4	(10.9)	—	—	明褐灰	橙	チャート・1～2mm前後の粗粒砂多	ハケ、ナデ、指頭圧痕	タタキ、ハケ、指頭圧痕	口唇水平面をなす。直線的に上方へ立ち上がる。	
20	SK9	土師器	壺	口縁下～頸部	—	(8.0)	—	—	黒	にぶい褐	チャート・1～2mm前後角礫細粒砂多量	ユビナデ、ハケ	タタキ、ハケ、ナデ	口縁は大きく開き外面に突帯（断面三角形）をめぐらせる。	口縁端部形状不明。
21	SK9 SK9底	土師器	壺	胴部～底部	—	(15.8)	23.0	6.0	黒	浅黄橙	チャート・1～2mm前後細粒砂多量	ユビナデ（下→上）	タタキ、ハケ		底厚14mm。
22	SK11 SK11底	土師器	壺	頸部～上胴部	—	(16.8)	(30.0)	—	灰白	灰白	チャート・粗粒砂多、3～5mm前後の小レキが目立つ	ハケ、ナデ	タタキハケ	卵形の胴部から口縁は直立、屈曲した後開く。口縁端部は欠けており形態不明。	
23	SK14 上層	土師器	壺	口縁～胴部	13.6	(19.1)	(35.2)	—	浅黄	浅黄	チャート・1～2mm前後の粗粒砂多量・微細粒砂多量	ハケ、ナデ	ハケ（頸部下）タタキ（水平）ナデ	口縁は短く口唇ナデによりわずかに凹状を呈する。	
24	SK14 底	土師器	壺	口縁～上胴部	15.8	(11.0)	—	—	オリーブ黒	浅黄橙	チャート・1mm前後の細粒砂多、2～3mm大の粗粒砂含	ハケ、ナデ、ユビナデ（タテ）	ヨコナデ、タタキ＋（タテ）ハケ	ラッパ状に開く　面Ｂ-3 口唇は面をなす。	
25	SK17 №2 SK17 集中	土師器	壺	口縁	15.0	(7.6)	—	—	赤橙	赤橙	チャート・1～3mm前後の粗粒砂多量	ハケ、ナデ	タタキ＋ハケ＋ナデ	口唇は面をなす。	
26	SK17 №2 SK17 集中	土師器	甕	口縁～上胴部	(15.2)	(9.1)	—	—	にぶい黄橙	浅黄橙	チャート・1～3mm前後の粗粒砂多・6mm、10mmの小礫含	ハケ	タタキ（わずかに右上り）、ハケ	口唇は面をなす。	炭化物口縁外面に付着。

図版番号	遺構検出面・層位	種別	器種	部位および分類	法量(cm)				色調		胎土	調整		形態上の特徴	備考
					口径	器高	胴径	底径	内面	外面		内面	外面		
27	SK17 №2	土師器	甕	口縁～胴部	15.0	(14.7)	18.6	—	浅黄橙	浅黄橙	チャート・1～3mm前後の粗粒砂多	ハケ、ヨコナデ、ユビナデ	タタキ(水平)	口唇は丸みを帯びる。	炭化物口縁外面、上胴部に部分的に付着
28	SK17 №2	土師器	甕	口縁	(15.8)	(4.0)	—	—	浅黄橙	浅黄橙	チャート・細粒砂多	ヨコナデ	ナデ、タタキ(水平・右上り)	頸部は稜をなさずに、丸みを帯びて屈曲。	炭化物　口縁外面
29	SK17 №2	土師器	甕	口縁	(16.0)	(3.9)	—	—	浅黄橙	浅黄橙	チャート・1～3mm前後の粗粒砂多	ハケ、ナデ	ヨコナデ、タタキ	短く直線的面をなす、屈曲強い。	
30	SD1-1	土師器	壺	口縁～上胴部	(14.8)	(11.8)	—	—	にぶい黄橙	にぶい橙	チャート・粗粒砂3～4mm大	ハケ、ユビナデ、指頭圧痕	タタキ＋ハケ(水平・わずかに右上り)	口縁は直立した後、大きく外反(ラッパ状)。	
31	SD1-1 バンク他	土師器	壺	口縁～上胴部	15.0	(15.0)	(22.2)	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	チャート・粗粒砂2～3mm前後多・微細砂あり	口縁部ハケ、胴部ナデ	ヨコナデ、ハケ、タタキ(水平)	口縁は直立した後、大きく外反(ラッパ状)。	胴部は球形に近い
32	SD1-1 埋土	土師器	壺	口縁	(12.8)	(4.4)	—	—	浅黄橙	浅黄橙	チャート・細粒砂1～2mm前後・多	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ユビオサエ	口縁は短く直立し、面をなす口縁端部に至る。	
33	SD1-2	土師器	甕	完形	(13.4)	17.7	(15.0)	5.0?	浅黄橙	浅黄橙	チャート・粗粒砂2～3mm前後多	ハケ、ナデ、ユビオサエ	タタキ(水平・右上り)、底部(タテ)ハケ	卵形の胴部から口縁は屈曲して外反。	丸底13mm
34	SD1-2	土師器	甕	口縁～胴部	(13.0)	(12.5)	(16.0)	—	にぶい黄橙	にぶい橙	チャート・2mm前後の細粒砂多・微細粒砂多量	ハケ、ナデ	タタキ(水平)、ユビオサエ	口唇は丸く収める。	胴部外面全体に炭化物付着
35	SD1-2	土師器	甕	口縁	(16.8)	(2.0)	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	チャート・細粒砂2mm前後・少	ナデ	ナデ	口唇は面をなし、わずかに凹状を呈する。	口縁部小片
36	SD1-2	土師器	甕	口縁	(16.0)	(2.1)	—	—	にぶい橙	にぶい橙	チャート・細粒砂2mm前後・少	ナデ	ナデ	口縁端部面下端が若干拡張する。	口縁部小片
37	SD1-2	土師器	壺	胴部～底部	—	(13.1)	15.6	4.5	黒褐	浅黄橙	チャート・粗粒砂2～3mm前後多・微細粒砂多・角レキ	ハケ＋ナデ	(タテ)ハケ、ナデ	球状の胴部。底部は上げ底で、面をなす。	底厚4～8mm
38	SD1-2	土師器	壺	頸部～胴部	—	(21.2)	17.6	—	浅黄橙	にぶい橙	チャート・粗粒砂2～4mm前後多・微細砂多	胴部ユビナデ(タテ方向)、胴部下半に指頭圧痕	タタキ(水平・右上)、ハケ、ナデ	胴部は大きく張り、球形に近い形状を示す。	
39	SD1-2 SK15 底	土師器	壺	下胴部	—	(12.4)	(26.0)	—	黒	浅黄	チャート・1～2mm前後の細粒砂多・微細粒砂含む	胴部ハケ＋ナデ、ユビナデ	タタキ、ハケ	胴部は大きく張り、球形に近い形状を示す。	接合痕が観察される
40	SD1-2	土師器	壺	胴部	—	(22.4)	(26.8)	—	浅黄橙	浅黄橙	チャート・細粒砂2mm前後少・粗粒砂4～6mm・微細粒砂極多	ハケ、ナデ、指頭圧痕	タタキ、ハケ	胴部は大きく張り、球形に近い形状を示す。	
41	SD1-2	土師器	壺	胴部～底部	—	(17.0)	21.4	4.0	浅黄橙	にぶい橙	チャート・粗粒砂2～3mm前後多・微細砂多	ハケ、ナデ、指頭圧痕	タタキ(水平・右上)＋板ナデ	卵形。	底厚22mm
42	SD1-1 埋土	弥生土器	壺？	底部	—	(1.9)	—	(6.0)	黄灰	灰白	チャート・細粒砂2mm前後・少	–	ハケ	しっかりした平底。	底厚19mm
43	マウンド2	土師器	壺	口縁～上胴部	(14.5)	(10.0)	—	—	淡黄	橙		ヨコナデ、ハケ、指頭圧痕	ヨコナデ、タタキ、ハケ	口唇面をなし、外方わずかに肥厚。	
44	マウンド2	土師器	甕	口縁～上胴部	(12.0)	(6.0)	—	—	にぶい黄橙	にぶい橙	チャート・粗粒砂	ハケ、ナデ、指頭圧痕	タタキ、ナデ	外反弱い。	わずかに肥厚
45	サブトレ30	土師器	甕	口縁～胴部	17.8	(17.0)	—	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	チャート・2～3mm大の粗粒砂多・微細粒砂含	ナデ	ナデ、タタキ、ハケ	口唇は面をなす。	胴部中位下半に炭化物付着
46	マウンド2	土師器	甕	口縁～胴部	(17.7)	(12.8)	(17.0)	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	チャート・2～3mm大の粗粒砂	ナデ	タタキ(右上)ナデ(平行)	口唇は面をなす。	
47	マウンド2	土師器	甕	口縁	(15.8)	(4.3)	—	—	浅黄	浅黄	チャート・2mm前後の粗粒砂	ハケ、ナデ	タタキ、ナデ	強くくの字状に外反。外面肥厚。	
48	マウンド2	土師器	甕	頸部～胴部	—	(19.8)	(26.8)	—	灰黄	浅黄橙	チャート・2～3mm大の粗粒砂	ハケ、ナデ(タテ)	タタキ、ハケ	頸部で屈曲後、上方へ立ち上がる。	口縁端部形状不明
49	サブトレ30 マウンド2	土師器	甕	底部	—	(9.8)	—		にぶい黄	にぶい橙	チャート・2～3mm大の粗粒砂	ハケ、ナデ	タタキ、ハケ、ナデ	丸底の底部 底面方向からのタタキ目のこる	底厚8mm
50	マウンド2	土師器	甕	底部	—	(6.1)	—	3.0?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	チャート・2～3mm大の粗粒砂	ナデ、指頭圧痕	ハケ、ナデ(タタキ目)	丸底(完全)ハケとナデによりタタキの底跡をのこさない。	
51	SK20 底	土師器	壺	胴部～底部	—	(19.9)	23.2		黒	にぶい褐	チャート・5mmを超える小礫散見・微細粒砂多量	胴部中位ハケ、下胴部ユビナデ	ナデ、タタキ(右上り)＋ハケ	卵形より球状にふくらむ形。	底厚(15～18mm) 底部なし
52	SK21	土師器	壺	口縁	19.3	(8.4)	—	—	浅黄橙	浅黄橙	チャート・精選された胎土・1mm前後の細粒砂若干と微細粒砂含む	ヨコナデ、ハケ＋ナデ、ヨコナデ、ユビナデ	強いヨコナデ、ハケ＋ヨコナデ、タタキ＋ハケ	大きくラッパ状に開く・口縁中位に接合痕のこる。	口唇、丸みを帯びる
53	SK21	土師器	甕	完形	15.5	25.0	18.8	6.0?	淡黄	にぶい黄橙		ユビナデ、ハケ(口縁)、指頭圧痕	タタキ(水平・右上り)、ハケ	卵形の丸底。	
54	SK24 底	土師器	甕	口縁～上胴部	18.4	(7.0)	—	—	灰黄	灰黄	チャート・1～2mm前後の粗粒砂	ハケ、ナデ	指頭圧痕、タタキ、ハケ	大きく外反、面をなす。	口縁外面と上胴部に炭化物(煤)付着
55	SK24 底	土師器	甕	胴部	—	(16.4)	(22.2)	—	淡黄	灰黄	チャート・2mm前後の粗粒砂多	ハケ、ナデ	タタキ、ハケ(下半)	タマゴ形(やや丸みを帯びる)の胴部。	胴部中位より下に炭化物(煤)の付着顕著
56	SK24 底	土師器	鉢	片口鉢完形	25.1	18.0	24.8	7.6	にぶい黄橙	灰黄	チャート・2mm前後の粗粒砂多	ハケ(ヨコ)、ヨコナデ	タタキ(水平・右上りで一部右下り)、ハケ(底部付近のみ)	つまみ出して、片口部分を成形する。端部は丸く収める。外面に土器焼成前(乾燥時)に生じた亀裂がある。丸底だが、平坦面の広がりをとらえられる。	

図版番号	遺構検出面・層位	種別	器種	部位および分類	法量(cm)				色調		胎土	調整		形態上の特徴	備考
					口径	器高	胴径	底径	内面	外面		内面	外面		
57	SK25	土師器	壺	口縁	14.2	(7.2)	—	—	橙	橙	チャート・2～3mm大の粗粒砂やや多・微細粒砂多量	ハケ＋ヨコナデ	ハケ(底付近)	口唇は面をなす。(わずかに丸みを帯びる)外上方へ開いて立ち上がる。	
58	SK25	土師器	壺	胴部～底部	—	(17.0)	21.6	6.0?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	チャート・2mm前後粗粒砂多・精選された胎土	ユビナデ(タテ)	タタキ＋ハケ(底より)	丸底、底面付近はナデで仕上げるタマゴ形。	
59	SK25	土師器	甕	下胴部	—	(12.5)	—	—	灰黄	灰黄	チャート・粗粒砂多量	ハケ、ナデ	タタキ、ナデ(指頭圧痕)	胴部中位に炭化物 4mm前後器壁うすい。	
60	SK26	土師器	壺	口縁	(17.2)	(5.0)	—	—	にぶい黄橙	橙	チャート・胎土は精選されており、2mm大の粗粒砂を少量含むのみ	ハケ＋ナデ	強いヨコナデ	口唇は丸みのある面をなす。半載竹管による刺突を連続させて加飾、口縁下半は板状原体の角を使って列点文状に加飾。	
61	SK27 2面目	土師器・庄内式	甕	口縁	14.6	(4.1)	—	—	にぶい黄橙	黒褐	ガラス質鉱物・角閃石など微細粒砂を含み、2mm大の粗粒砂確認されるものの含有量は少ない	ヨコナデ、ヘラケズリ	上胴部に細かいタタキ	端部を強いヨコナデにより仕上げ、上方へつまみあげる。	外面に炭化物
62	SK27 2面目	土師器・庄内式	甕	胴部～底部	—	(11.5)	19.6	5.0?	褐灰	暗灰黄	ガラス質鉱物・角閃石など微細粒砂を含み、2mm大の粗粒砂確認されるものの含有量は少ない	ヘラケズリ、ユビナデ、指頭圧痕	タタキ、ハケ	球状に近い胴部。	
63	SK33	土師器	壺	口縁	(18.7)	(5.7)	—	—	浅黄	にぶい黄橙	チャート・胎土は精選されており、粗粒砂を少量含むのみ	ハケ、ユビナデ	タタキ、ヨコナデ、ナデ	ラッパ状に開く面をなす。	
64	SK33	土師器	甕	完形	12.4	18.4	16.0	2.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	チャート・1mm前後細粒砂・2mm大粗粒砂	ユビナデ、ユビオサエ、下半強いナデにより砂粒の移動あり	タタキ(平行)、ナデ わずかに指頭圧痕	口唇は細く仕上げる強く屈曲、底面わずかに凹状の面がのこるがほとんど丸底。	
65	SK34	土師器	壺	完形	15.6	30.5	25.8	8.0?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	チャート・1～3mm大の粗粒砂を含む・微細粒砂多量	ユビナデ	ヨコナデ、タタキ、ハケ・ナデ	口唇わずかに上方に拡張、タマゴ形の胴部。	
66	SK37	土師器・庄内式	甕	完形	16.1	21.9	20.8	6.0?	黒褐	黒	ガラス質鉱物・角閃石など微細粒砂を含み、2mm大の粗粒砂確認されるものの含有量は少ない	なし	なし	なし。	庄内式
67	SK38	土師器	壺	口縁	14.2	(4.7)	—	—	にぶい黄橙	橙	チャート・1～3mm大の粗粒砂多	ナデ	ハケ＋ナデ	ラッパ状に開く。 端部面をなす。	磨耗顕著
68	SK38	土師器	壺	頸部	—	(6.6)	—	—	淡黄	淡黄	チャート・2～5mm大の粗粒砂	ナデ	ハケ＋ナデ		磨耗顕著、端部形状不明
69	SK38	土師器	壺	ほぼ完形・口縁端欠	—	(30.8)	27.4	5.5	にぶい黄橙	橙	チャート・微細粒砂多量・2～5mm大の粗粒砂多	ハケ、ナデ	タタキ、ハケ(底面より放射状)、ナデ	タマゴ形の胴部。底部、わずかに上げ底気味。	端部形状不明
70	SK38	土師器・東阿波型	甕	口縁～上胴部	16.0	(4.2)	—	—	にぶい黄橙	にぶい橙	チャート・1mm前後細粒砂・2mm大粗粒砂含	ユビオサエ	ヨコナデ	端部・上方に拡張 頸部・強く屈曲。	搬入品 (東阿波型土器)
71	SK38	土師器	鉢	口縁～胴部	14.0	(5.8)	—	—	灰黄	浅黄	チャート・1～2mm大の粗粒砂多	ハケ、ナデ	ハケ、ユビオサエ	内湾し、口縁、直立、接合痕あり。	
72	SK39	土師器	甕	完形	13.3	21.6	17.8	5.0?	にぶい黄橙	浅黄	チャート・粗粒砂多1～2mm前後多、3～4mm大含	ナデ、ユビオサエ	タタキ、ハケ、ナデ	丸底、卵形。	胴部中位と口縁外面に炭化物
73	SK41・SK41 2面目	土師器	甕	口縁～下胴部　底部欠	(20.9)	(22.6)	23.6	—	灰白	にぶい黄橙	チャート・2～3mm大の粗粒砂多	ハケ、ナデ	タタキ、ハケ、ナデ	強く稜をなしてくの字に屈曲。	
74	SK41 2面目	土師器	甕	胴部下半・底部欠	—	13.5	18.8	6.0?	にぶい黄橙	灰白	チャート・粗粒砂	ユビナデ(タテ)	タタキ(水平・右上り)	丸底　タマゴ形。	炭化物 内-底面付近 外-胴、中位
75	SK45 マ	土師器	壺	口縁	(18.7)	(5.85)	—	—	にぶい黄橙	浅黄橙	チャート・2～3mm大の粗粒砂を少量含む	ナデ、ハケ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ、タタキ	端部、丸み。	
76	SD4-3	土師器	壺	口縁	(16.6)	(6.7)	—	—	浅黄橙	浅黄橙	チャート・粗粒砂2mm前後少・精選される	ハケ、ナデ	タタキ、ハケ、ナデ	わずかに上方拡張。	類似65
77	SD4-3	土師器	壺	口縁	14.4	(8.8)	—	—	にぶい黄橙	橙	チャート・1mm前後の細粒砂多量、4～5mm大の小礫も含む	ハケ、ヨコナデ、ナデ	タタキ、ハケ、ユビオサエ	(面・ふくらむ) 端部外へつまみ出す。	
78	SD1-1 SD4-3	土師器	壺	完形	13.8	27.0	25.0	5.5	にぶい黄橙	浅黄橙	チャート・細粒砂1～2mm前後多	ヨコナデ、タテハケ　ユビオサエ、ユビナデ	タタキ、ナデ、ハケ	短く、外反気味に立ち上がる。球状に近い膨らんだ胴部。	
79	SD4-2	土師器	壺	口縁	13.5	(6.0)	—	—	にぶい橙	にぶい黄橙	チャート・角礫の微細粒砂(0.5mm以下)非常に多く、4～5mm大の小礫も含んでいる	ナデ	ヨコナデ、ユビオサエ	外上方へ直線的に開く。(端部・丸)	搬入品
80	SD4-3 №3	土師器	甕	口縁～胴部	13.0	17.3	(17.8)	—	にぶい橙	にぶい橙	チャート・粗粒砂2～3mm前後多・5mmあり	ハケ、ユビナデ	タタキ、ハケ、ナデ	球形の胴部からラッパ状に開く。	全面に煤付着(煤付着により黒色を呈する部位が多く占める)
81	SD4-3	土師器	甕	完形	14.4	22.8	18.3	3.8	にぶい橙	にぶい橙	チャート・2～3mm前後の粗粒砂多量	ハケ＋ナデ	タタキ、ユビオサエ	ほぼ丸底　タマゴ形から大きく開く。	底面方向からタタキ厚11mm、口縁から胴中位、煤(頸部少ない)

図版番号	遺構検出面・層位	種別	器種	部位および分類	法量(cm)				色調		胎土	調整		形態上の特徴	備考
					口径	器高	胴径	底径	内面	外面		内面	外面		
82	SD4-2	土師器	甕	口縁～上胴部	(17.0)	(15.0)	(20.0)	—	浅黄橙	にぶい橙	チャート・1～2mm前後の細粒砂多・微細粒砂含む	ハケ、ナデ	タタキ(水平・右上り)、ナデ	頸部は強い稜をなす。	
83	SD4-2	土師器	甕	口縁～胴部	(15.8)	(15.8)	(18.6)	—	灰黄	灰黄～黒	チャート・2mm前後の粗粒砂多量・円レキ	ハケ、ナデ	タタキ、ナデ	口唇は丸く収める。	上胴部以外の全面に炭化物付着
84	SD1-2 SD4-2	土師器	甕	口縁～胴部	(12.0)	(11.3)	(13.2)	—	浅黄橙	にぶい黄橙	チャート・粗粒砂2mm前後	ナデ、ハケ、ユビナデ	タタキ、ナデ、ハケ	頸部の屈曲はゆるやか。	
85	SD4-3	土師器	甕	胴部～底部	—	(14.7)	15.2	3.0	にぶい橙	にぶい橙	チャート・粗粒砂1～2mm前後	ハケ、ユビナデ	タタキ(水平)	球状の胴部、丸底ほんのわずか。	口縁端部欠ける面をなし、タタキ目残る
86	SD4-3	土師器	壺?	下胴部～底部	—	—	(9.8)	2.5	黒褐色	浅黄橙	チャート・粗粒砂1～2mm前後	ユビナデ	タタキ、ナデ	わずかに平底、タタキあり。	
87	SD4-3	土師器	鉢	完形	(12.6)	9.9	11.4	3.0	橙	にぶい橙	チャート・粗粒砂2～4mm前後・小礫5～8mm含む	ハケ、ユビナデ	タタキ(右下)	丸底。口縁下でくびれた後、内湾気味に口縁に至る。	接合痕が観察される
88	SD4-1 SD4-2	土師器	高坏	坏部	—	(9.3)	—	—	灰黄	浅黄橙	チャート・粗粒砂1～3mm前後多	ハケ、ユビオサエ	ハケ、ナデ、ユビオサエ		
89	SD4-1	石器	敲石	一端が欠けている可能性	全長14.1	幅8.4	厚4.4	重量(688g)	灰色		砂岩	自然円礫を使用。端部に敲打痕がのこる。			タタキ石
90	SD5 埋土上層	弥生土器	壺	底部	—	(2.8)	—	6.8	灰白	灰白	チャート・微細粒砂多量・2mm大粗粒砂多			平底の底部 大きく開いて立ち上がる。	胎土が特徴的
91	Ⅴ・Ⅵ層	土師器	甕	口縁～胴部	(15.0)	(9.7)	(15.4)	—	灰白	にぶい黄橙	チャート・3mm大の粗粒砂多	ナデ、ユビオサエ	タタキ、ユビオサエ	細く仕上げる ゆるやかな屈曲。	端部わずかに欠ける

表５　遺物観察表（木製品）

図版番号	出土地点	器種	法量(cm)			樹種	特徴	備考
			全長	全幅	全厚			
W1	SK18	鋤	23.1	18.0	1.9	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	中央部に2×3cmの方形孔あり。	
W2	SK18	鋤	(20.0)	(4.3)	1.1	樹種鑑定せず	−	
W3	SK18	鋤	(21.9)	(8.2)	1.4	樹種鑑定せず	−	
W4	SK29	板	63.2	9.3	1.8	ヒノキ科アスナロ属	板材。板目取り。	
W5	SK25	鋤	26.9	12.5	0.4	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	小判状の平面、中央に3×4cmの方形孔を穿つ。きわめて薄つくり。使用による磨耗も見られない。	遺構北側肩部付近で検出。遺構の南側からは環状の持ち手のある柄も出土している。
W6	SK41	鋤(柄付)	73.5 柄50.0 身23.5	身肩部(10.1)	柄2.0～3.0	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	鋤、長さ73.5cm(柄部:50cm、身部:23.5cm)身部現在巾肩部で10cm柄部:径2×2.5cm端部肥厚身部は半分が欠落、身先端は尖るが使用による磨耗なし、身の一方の面に鋭利な刃物の圧痕を認む	
W7	SK45	三叉鍬	47.6		0.9	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	柄との縛り部は凸状に作り出し1cm×1cmの方形孔を穿ち、その下にも2.8×0.8cmの方形孔を穿つ。中央刃の付根付近にも2×1cmの方形孔あり。全体に薄いつくりで、儀器の可能性がある。	
W8	SK45	ホゾ穴有材	65.5	10.3	6.1	ブナ科クリ属クリ	側面中央に2×2.5cm、深さ1cmの方形孔あり。	
W9	SD4-2	板	55.2	8.2	1.7	スギ科スギ属スギ	板材(杉)	

第Ⅳ章　まとめ

第１節　遺構と遺物

検出した遺構は、溝5条・土坑47基・柱穴6基で、形成された順番に第1段階（下面検出遺構）、第2段階（中面検出遺構）、第3段階（上面検出遺構）の3段階に大きく分けて捉えることができる。下面検出遺構の中に弥生時代後期の溝が1条確認される以外は、弥生時代終末～古墳時代初頭の短期間に形成された遺構である。報告書中では、溝の中でSD1を第3段階（上面）、SD4を第1段階（下面）の遺構として報告したが、調査時点では第2段階で溝が形成されたと捉えられている。調査時点での所見を以下にまとめて掲載する。

※調査時点での所見（１～３）

１．土坑を主体とする時期（第1面・下面）

埋土は、灰色粘質土・黒色腐植土が混じる。

土坑が、2つ並んでセットになっている。

長丸形と小さめの土坑に大きく分けることができる。

遺物に木製鋤や性格不明の木製品が出土。

２．マウンド状遺構・溝を造った時期（第2面・中面）

マウンド状の土：灰色粘土・黄粘土・黒色粘土がブロック状に混じる。

マウンド状の盛り土の中からも土器は出土する。

溝は意識的に出入り口のようなものが掘り残されている。

掘り残し部分周辺には柱穴がある。

３．土坑を主体とする時期（第3面・上面）

埋土は、黒茶褐色シルト～粘質土である。

土坑には、土器が置かれたように残っている。

土器の底部が極端に少ない。

土坑の形が不揃いである。

第1段階（下面検出遺構）

第1段階は、下面で検出された遺構であり、SK18～47およびSD4がこれに当たる。第1段階に先行する遺構として、出土遺物から弥生時代後期の遺構だと考えられるSD5が存在する。土坑が2基並んで検出されている。

第48図に示したように、確認された土坑のうち、はっきりと2基がセットだと捉え得るものは、SK18と19、SK21と22、SK24と25、SK26と27、SK29と30、SK31と32、SK33と34、SK35と36、SK37と38、SK40と41、SK43と44、SK46と47であり、下面で検出された30基の土坑のうち24基（80%）

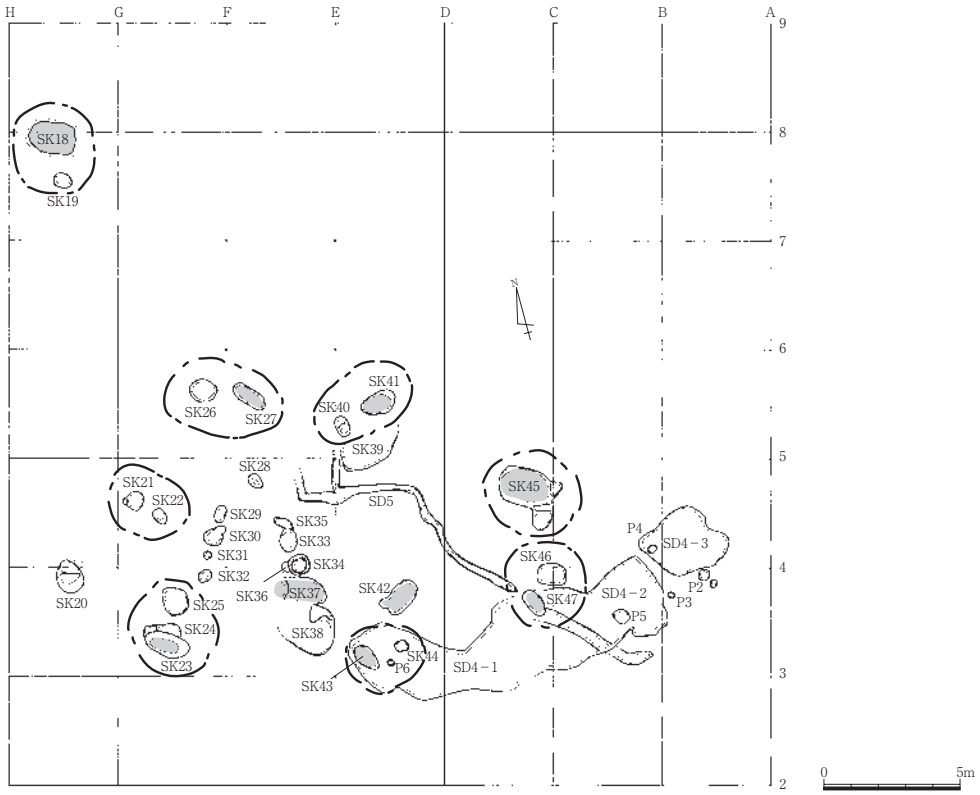
の土坑が2基1組の可能性がある。単独で存在する土坑もあり、SK20、SK42が挙げられる。

これらの土坑は、その平面形態と規模を基準に、いくつかに類型化される。遺構の幅（短軸）に対して長さ（長軸）が1.5倍以上の細長い形状のものをＡ類、幅と長さの長幅比が1.1～1.3前後の隅丸方形や円形に近い楕円形の遺構の中で長軸が70cm 以上のものをＢ類、70cm 未満のものをＣ類とする。Ａ類に分類した土坑は長軸の長さが1ｍ以上であり、130～170cm 前後の規模のものが多い。2基の土坑の組み合わせの中では、大半がＡ類とＢ類の組み合わせである。

ここで、Ａ類とした土坑は、調査時点で墓坑の可能性を指摘されている。

また、SK18・21・41・45と SD4からは木製品が出土している。木製品が出土する遺構は、この段階に限られている。木製品は、2基1組の土坑の中では規模の大きい方から出土している。用途や性格を特定できない木製品もあるが、今回の調査で6点の鋤先が確認されたことも注目される。柄の部分まで確認されたものも2点あり、うち1点は環状の持ち手部分が確認されている。厚さ数㎜ときわめて薄いつくりで、実用品として使用されたとは考えにくく、何らかの祭祀に使用された儀器ではないかという指摘もある。これらの鋤からは使用痕も確認されてない。また、板状木製品も SK21や SD4など遺構内から出土している。

SD4は周溝状の遺構であり、地点により SD4－1、4－2、4－3と3つに分けて調査が行われている。SD4－2と SD4－3の間に橋状の掘り残し部分があり、周辺からはピットが確認されている。



第48図　下面検出2基1組の土坑

第2段階（中面検出遺構）

第2段階は、Ⅵ層上面に形成される。この段階だと考えられるのは、2カ所のマウンド状の遺構である。このマウンドは「灰色粘土・黄粘土・黒色粘土がブロック状に混じる」堆積状況を示し、人為的に形成されたことがわかる。

このマウンド状遺構は、その下層に列状に並ぶ第1段階（下面）の土坑群SK29～32の上に形成されている。マウンドの高さは60㎝前後であり、推定される基底面の規模はマウンド1が長軸3.8m、マウンド2が長軸6.1mである。このマウンド状遺構に伴い、マウンドの上に土坑・ピットなどの遺構は形成されないが、上面で検出された遺構とは切り合い関係が認められる。基本層序のⅣ・Ⅴ層が堆積した後、Ⅳ層直上に第3段階（上面）の遺構が形成される。

本報告書中では、SD1（上面）とSD4（下面）と分けて報告したが、調査時点では第2段階（中面）で形成された遺構だと把握されている。

第3段階（上面検出遺構）

第3段階の検出面は灰黄色粘土であり、黒茶褐色シルト～粘質土を埋土とする。SK1～17の土坑17基とSD1～3の溝3条が検出されている。土坑は第1段階のものとは異なり、平面形は不整楕円形で規模が大きく、大半の土坑が長軸2mを超え、6mを超す規模のものもある。平面規模に較べ深さは浅く、最も深いSK2でも最深部60cmである。深さ10cmから30cm前後の皿状に落ち込んだ形の土坑が多い。第1段階の土坑とはまったく異なる土坑形状・規模だが、調査区内での分布地点をみると第1段階と第3段階の土坑が重なり、第3段階の土坑の遺構底面下に第1段階の土坑が確認される例が何箇所かある。下面遺構と上面遺構との関連については検討する必要がある。

これらの土坑内には、土器が埋納された形で置かれている例が多く、底部の数が極端に少なかったという調査時の所見からも、祭祀空間であった可能性が考えられる。

また、溝状遺構の中でSD1は下面検出のSD4と重なった形で確認されている。調査所見では、これらの遺構の検出面は離れている。一定の時間を置いて下面遺構（SD4）の上に上面遺構（SD1）が形成された可能性もあるが、同一の遺構だと捉えることも可能である。SD1は周溝だと考えられるが、部分的な検出にとどまっており、全貌をつかむことはできない。

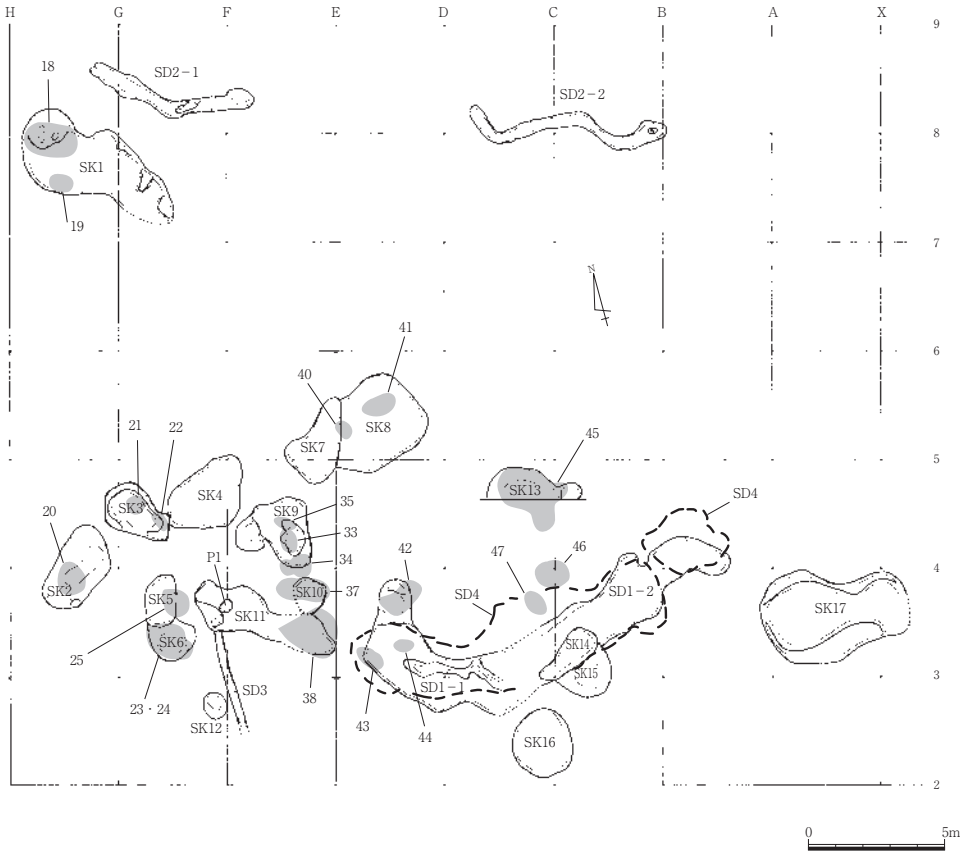
第1段階と第3段階の遺構の重なり

第1段階の遺構と第3段階の遺構の中には平面位置で重なっている例が認められる。溝状遺構のうちSD1とSD4についても、ほぼ同じ地点で検出されており、平面位置はほぼ重なり合った状態である。調査所見によると、上面遺構と下面遺構との間には、60～80㎝の標高差があり、両面の遺構は別遺構として調査されているが、調査途中の中間報告の時点では一部の遺構について「同一遺構と考えた方がよいかもしれない」と調査担当者が指摘している。

第2段階（中面）の遺構として把握されているマウンド状遺構においては、上下の遺構の位置関係がセクション上でも確認されている。しかし、マウンド状遺構の周辺においても、「上面の遺構底にさらに深い遺構がある」ことが指摘され、「別の遺構として報告するが、同一の遺構である可能

性もある」とされている遺構もある。

調査終了時点では別遺構と報告されているが、調査途上で上面と下面が一連の同じ遺構である可能性が指摘されている遺構に、SD1とSD4、SK1とSK18・19、SK2とSK20がある。それ以外にも図面上で見ると第1段階と第3段階の土坑の平面位置が重なるものは10ヶ所で確認されており、これらの遺構については上面の遺構と下面の遺構とを同一遺構と考えることもできる。（第49図）

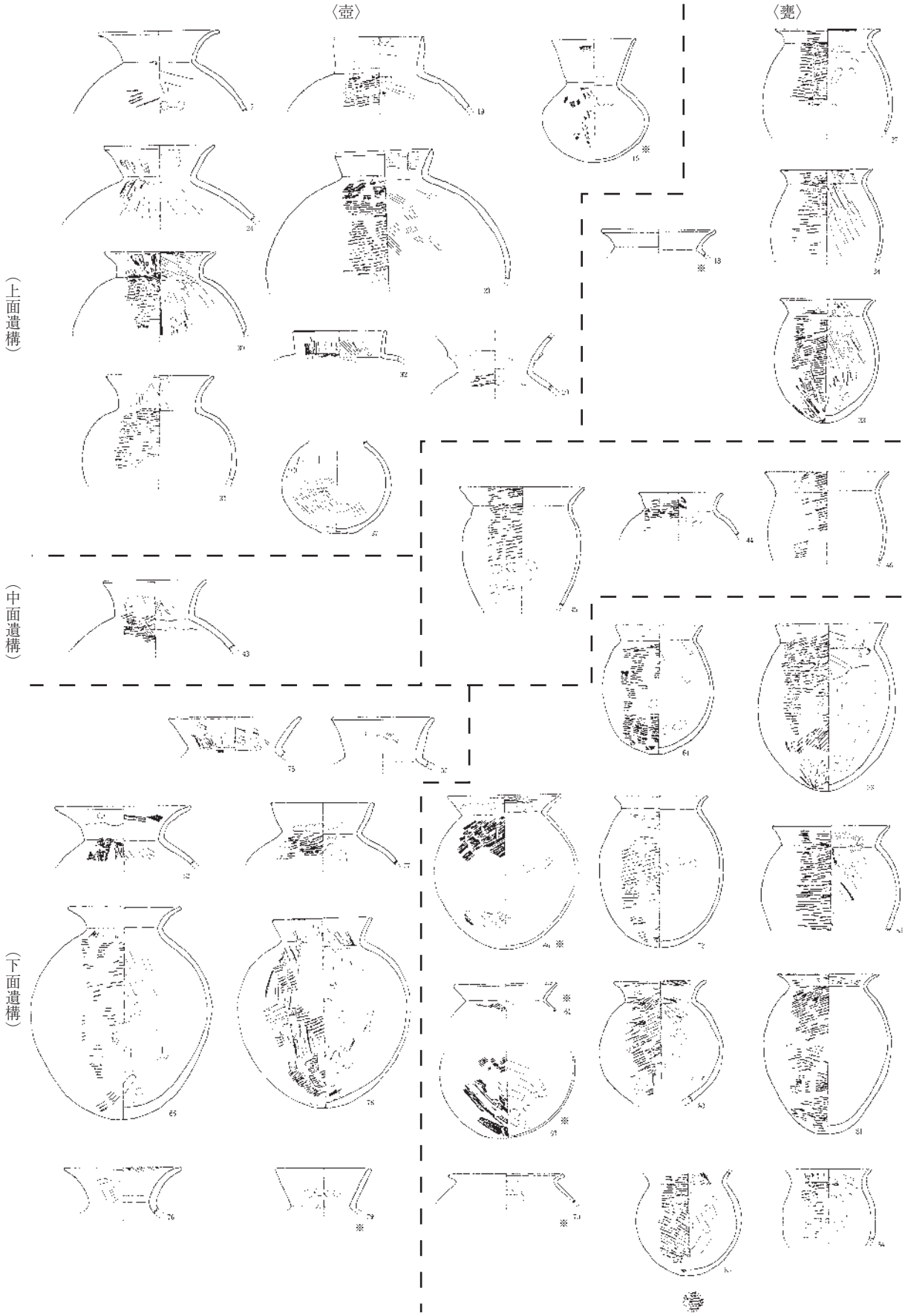


第49図　上面と下面の土坑の重なり

出土遺物

包含層出土の近世から近現代にかけての陶磁器・瓦・土師器等の細片資料を除くと、出土した遺物は弥生時代終末～古墳時代初頭に限定される。大半の遺物が遺構出土のものである。

共伴する搬入土器には、庄内式土器及び東阿波型土器があり、高知平野の当該期の他集落と同じ状況である。出土した庄内式土器は新段階の資料であり、布留式土器登場後の古墳時代初頭に位置づけることができる。高知平野では、併行する在地の土器型式であるヒビノキⅢ式土器を古式土師器のⅠ期に位置づけ、この時期より古墳時代が始まる古墳時代初頭の土器である、という編年観が示されてきた。先行するヒビノキⅡ式からヒビノキⅢ式への変化は漸移的であり、ヒビノキⅢ式も



第50図　兎田柳ヶ本遺跡　出土遺物（古墳時代初頭、壺・甕）　※印は搬入土器

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時間幅の中で捉え得る土器である。今回出土した土器にはヒビノキⅡ式の特徴は残っておらず、ほぼすべてヒビノキⅢ式に相当する。搬入遺物からも古墳時代初頭３世紀中葉の古式土師器として考察を進めていきたい。

今回出土した土器は、壺･甕･鉢･高坏であり、図版掲載遺物88点の弥生土器の中で、壺40点（45％）、甕43点（49％）、鉢４点（5％）、片口鉢1点（1％）、高坏１点（1％）である。

搬入遺物には壺と甕がある。壺は15（東阿波型土器）と79（産地不明）で、甕は18・61・62・66（庄内式土器）と70（東阿波型土器）である。搬入土器の比率は壺4％、甕11％と甕において搬入品の占める比率が高くなっている。

検出面ごとの器種構成比は、各面とも大差なく、甕が42～57％、壺が28～50％、鉢が８～14％だが、資料数の少なさもあり、検出面の違いによる時期差を見出すことはできない。

壺は頸部で屈曲した後大きくラッパ状に開くタイプと短く上方にたちあがるタイプ、わずかに膨らみながら短く上方へ立ち上がるタイプに分類できる。甕は頸部で強く「く」の字状に屈曲するものは少なく、屈曲の度合いは緩やかである。底部は、ほぼ丸底となり、長胴・卵形の個体と球形に近づく固体とがある。資料数が少ないものの、検出面ごとの構成比は似通っており、搬入品の様相も上下の検出面で同じ状況であり、これらの土器から時期差を抽出することは困難である。

タタキ目の方向は、右上がり及び水平方向が大半であり、右下がりのタタキ目はほとんど認められない。

石器類は少なく、図示し得た石器は敲石１点のみであった。

出土遺物の中で特筆すべき遺物に木製品がある。鋤先は6点出土しており、１点出土した三又鍬とともに、注目される遺物である。6点の鋤は「１本鋤」と「組み合わせの鋤」の2つのタイプに分類することができる。「１本鋤」は、現在のスコップに形が似ており、1つの木で、柄の部分から先まで一体型となっているタイプである。「組み合わせの鋤」は、柄の部分と先の部分が別々になっており、鋤先の中央付近にある穴に、柄を差し込んで使用するタイプで、先が5本分確認できた。これらの鋤は、穴を掘る時に使用した後、埋納されたと考えられる。

また、これらの鋤の中に、厚さ数㎜の極めて薄いつくりの鋤がある。これら鋤は、その薄さと使用痕が確認できなかったことから、実用品ではなく儀器ではないかという指摘もある[(1)]。ただし、薄いつくりであっても樫製の木製品は実用品として使用可能だとの指摘もあり[(2)]、儀器かどうかについては、さらに検討を要する課題である。

第２節　兎田柳ヶ本遺跡の性格

兎田柳ヶ本遺跡は、周溝を中心とした墓域および祭祀空間を持つ弥生終末期から古墳時代初頭の短い期間に形成された遺跡である。墓域は3段階に分けて捉えることが可能だが、それぞれの段階に時期差はほとんどない。土器型式でみれば一型式に収まる範囲であり、3世紀中葉を中心にした短い時間が想定される。堆積状況や遺構の位置関係から見れば、第1段階と第3段階とした遺構を同一の遺構として捉えた方が、より合理的である。下面土坑形成に先行して掘削された不整形土坑が上面の土坑であり、溝状の遺構（周溝）に連なるように、これらの上面の土坑が形成される地点もある。上面の土坑の中にはSD1・SD4などの周溝と同じ機能を果たしていたと考えることもできる土坑もある。これらの遺構が周溝だとすると主体部はSK13（上）・SK45（下）である可能性が高い。また、マウンド1・2の周囲には、SK2～6、SK9～11などの土坑がマウンド状遺構を取り囲むように形成されており、関連した遺構の可能性もある。

この墓域は集落と一定の距離を保っている。試掘調査およびA・B区の調査の結果、C区とした墓域・祭祀空間周辺に同時期の遺構は形成されておらず、集落と離れて形成された空間だったことがわかった。調査時点で、遺跡から磁北方向に「大岩」があることが確認されている[(3)]。この祭祀空間の位置選定にこの大岩が目印として利用された可能性は十分にある。

今回の調査で確認されたSD1・SD4の上下にほぼ重なる位置で検出した溝を「周溝」と捉え、中面で確認された「マウンド状遺構」も含めて、周溝墓を中心とした墓域、祭祀空間だと考えている。新段階の庄内式土器や東阿波型土器などこの時期の高知平野の遺跡の多くに認められる搬入品も出土しており、畿内との関係も考慮すれば、今回周溝の一部を把握することができたこの墓域は「方形周溝墓」だと考えられる。

高知平野周辺の方形周溝墓は、現在まで3遺跡での発掘調査例が知られているに過ぎない。

一例目は、高知市春野町西分増井遺跡の例であり、古墳時代初頭の方形周溝墓だと報告されている[(4)]。もう一例は南国市小籠遺跡の例であり、弥生時代後期前半という位置づけがなされている[(5)]。西分増井遺跡の例では周溝の内側に主体部である土坑が1基検出されており、単独埋葬であることがわかる。また未報告だが、南国市東崎遺跡でも古墳時代初頭の方形周溝墓が確認されている。兎田柳ヶ本遺跡の周溝墓は、高知平野では4例目の周溝墓であり、集落と離れた空間に営まれたという点において集落に近接して形成されていた前3例とは異なっている。

高知平野の弥生時代から古墳時代初頭にかけての墓制は山本純代氏によってまとめられており、弥生時代前期から古墳時代初頭にかけての墓制の変遷がわかる[(6)]。土坑墓・土器棺墓・尾根上の土坑墓群など報告された墓制からは弥生社会の変遷を看て取ることができるが、平野部の墓域全体が確認された例はほとんどない。平野部に営まれた墓域・祭祀空間の全体像を知り得る事例として、本遺跡の調査は他に類例がない。今後、他地域との比較検討により、当該期の高知平野の社会の一端を明らかにすることが可能な遺跡である。

註・引用文献

⑴出原恵三氏（高知県埋蔵文化財センター）の御教示による。
⑵中原計氏（徳島大学埋蔵文化財調査室）の御教示による。
⑶調査日誌より。調査時に調査担当の更谷大介氏が確認する。
⑷『西分増井遺跡群発掘調査報告書』　1990年　春野町教育委員会
⑸『小籠遺跡Ⅲ』　1997年　（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
⑹山本純代「高知平野の弥生墓制」
『犬飼徹夫先生古稀記念論集　四国とその周辺の考古学』2002年犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会

調査担当者の更谷大介氏は、堆積状況がわかりにくい困難な中、いくつものトレンチを設定、丁寧に遺構の切り合いを確認しながら調査を進めたようである。報告書の最後になったが、遺跡と誠実に向き合い、遺跡の性格を明らかにしようと懸命に取り組んでいた更谷氏に、あらためて敬意を表したい。

第Ⅴ章　付編　自然科学分析

香南市野市町兎田柳ヶ本遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

１．試　料

試料は野市町兎田柳ヶ本遺跡から出土した農具４点、用途不明品３点の合計７点である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結　果

樹種同定結果（針葉樹２種、広葉樹２種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）スギ科スギ属スギ（*Cryptomeria japonica* D.Don）

（遺物№2）

（写真№2）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

２）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）

（遺物№1）

（写真№1）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

３）ブナ科コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.）

（遺物№3,5,6,7）

（写真№3,5,6,7）

放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～200μm）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞がみられる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

４）ブナ科クリ属クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

（遺物№4）

（写真№4）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では導管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

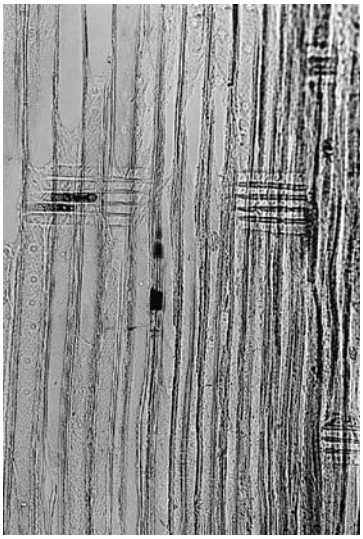
◆参考文献◆

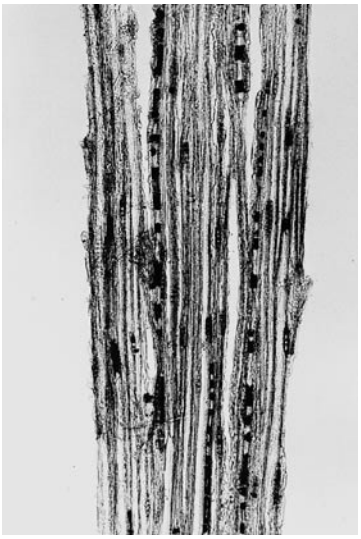
島地　謙・伊藤隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地　謙・伊藤隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
伊藤隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

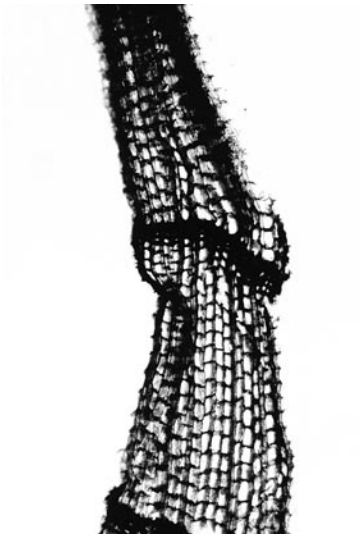
Nikon
MICROFLEX UFX-DX Type 115

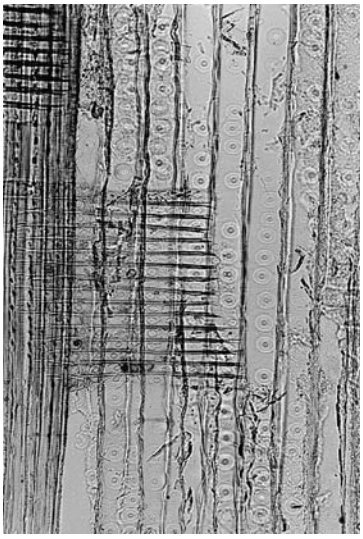
木口× 40

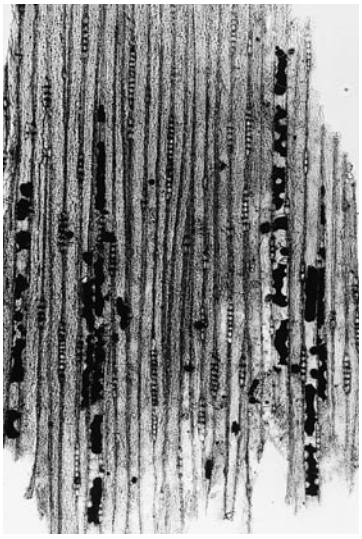

柾目× 100


板目× 40

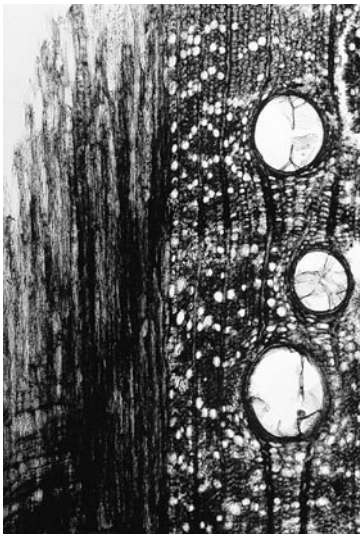
No－1　ヒノキ科アスナロ属


木口× 40


柾目× 100


板目× 40

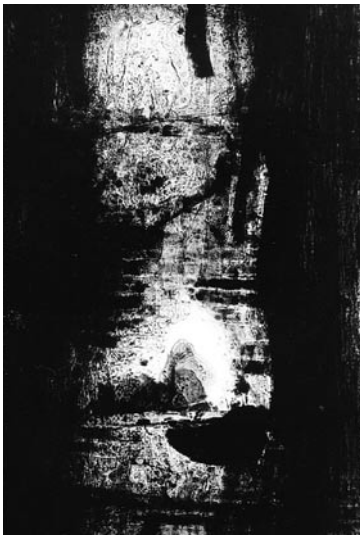
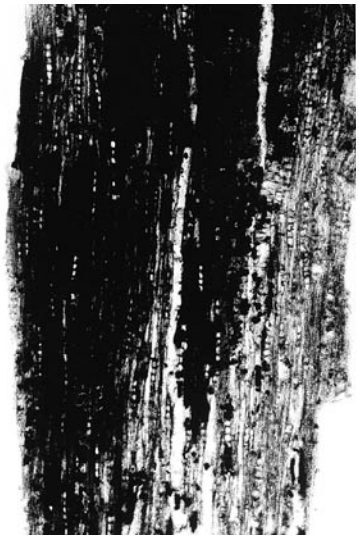
No－2　スギ科スギ属スギ


木口× 40

柾目× 100

板目× 40

No－3　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

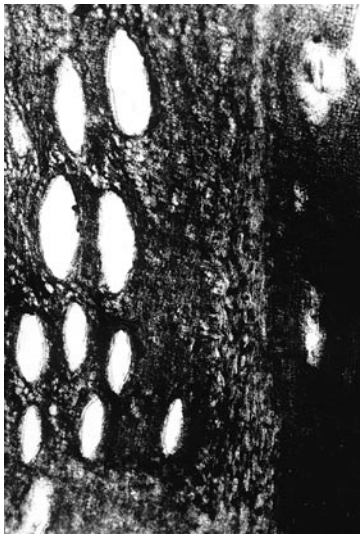
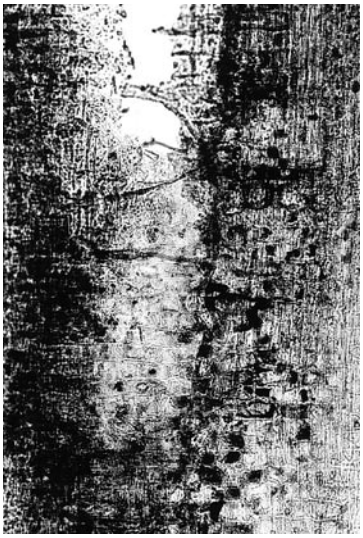



木口× 40　　柾目× 100　　板目× 40

No－4　ブナ科クリ属クリ

木口× 40　　柾目× 100　　板目× 40

No－5　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

木口× 40　　柾目× 100　　板目× 40

No－6　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

木口× 40

柾目× 40

板目× 40

No－7　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

野市町兎田柳ヶ本遺跡出土木製品同定表

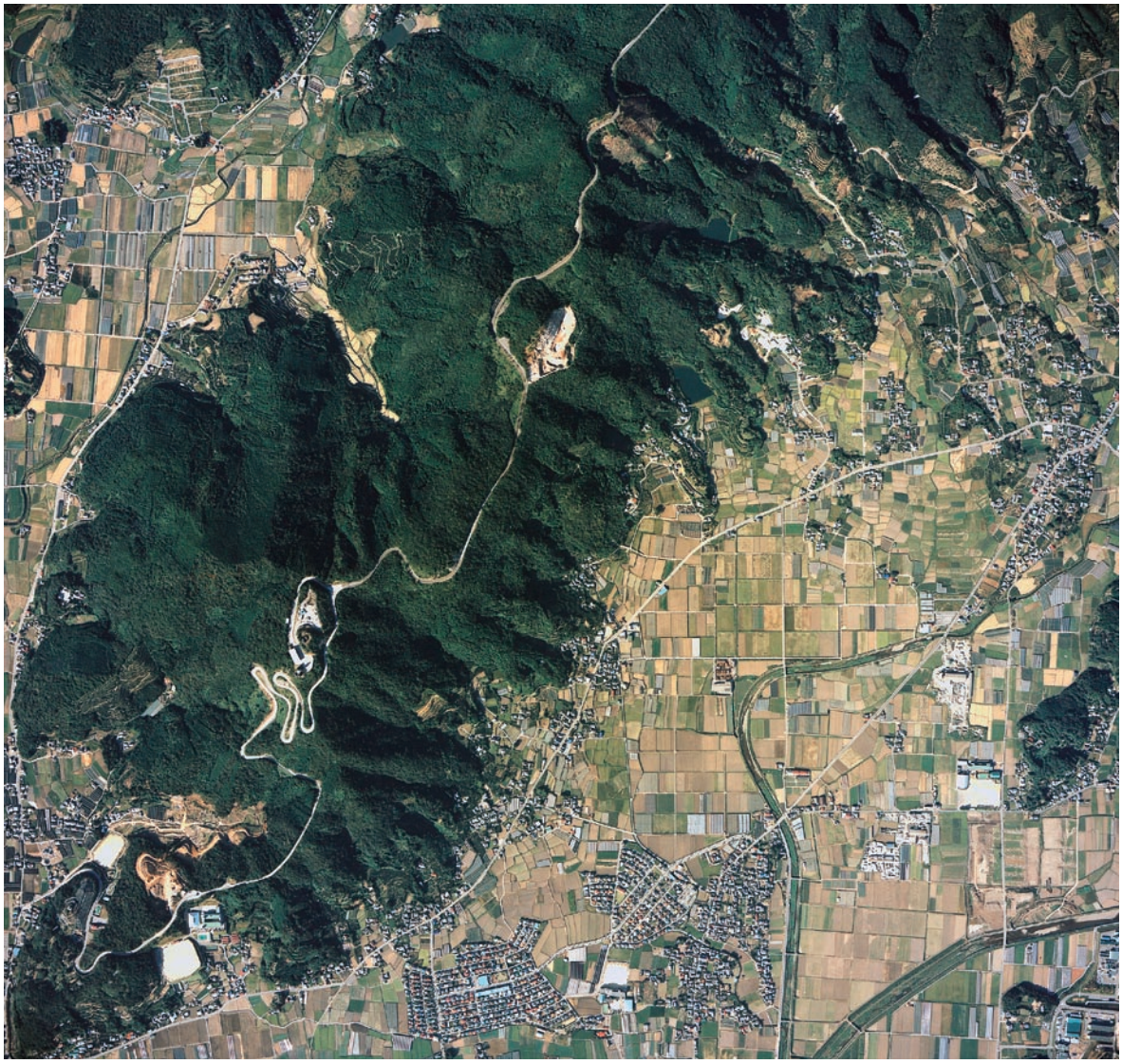
No.	品　　名	樹　　種	図版番号
1	不明	ヒノキ科アスナロ属	W4
2	不明	スギ科スギ属スギ	W9
3	鋤先	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W1
4	不明	ブナ科クリ属クリ	W8
5	三又鍬	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W7
6	鋤先	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W5
7	鋤	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	W6

写　真　図　版

三宝山スカイラインより見た調査区と周辺の景観（北西方向より）

調査前風景（南から）

図版２



遺跡周辺の地形（空中写真・平成元年撮影）

調査前風景（西から）

TR10

TR10

TR10

TR13

試掘調査

C 区堆積状況（SK17東トレンチ）

図版４

A 区作業風景

A 区確認トレンチ

A 区の自然流路（SR）検出

A 区西壁セクション

A 区　自然流路（SR2・3）

B 区南壁セクション

A 区　自然流路

A・B 区の調査

1面目　遺構面完掘状況

1面目　遺構検出状況

図版６

SD1　検出状況

SD1　完掘状況

SK1 検出状況

SK1 遺物出土状況

SK1 堆積状況確認トレンチ

SK1 遺物出土状況

SK1 完掘

SK1の調査

図版８

SK1 と周辺の遺構

SK2 遺物出土状況

SK2

SK1・SK2の調査

SD2

SD2

SK9

SK9

SK9

SK15

SK15

SK16

1面目　遺構（SD および SK）

図版 10

SK17 検出状況

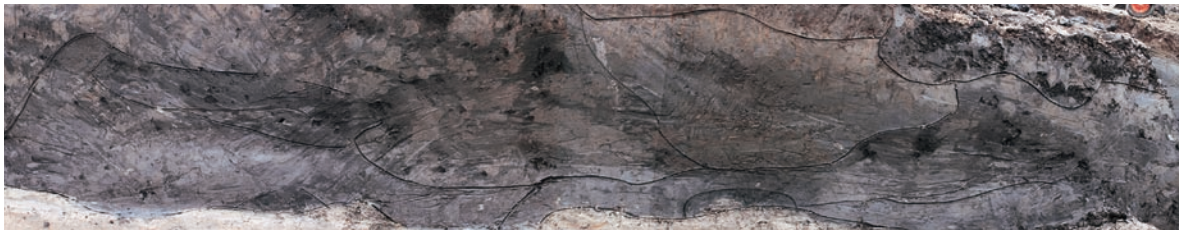
SK17（東から）

SK17 遺物出土状況

SK17（西から）

SK17の調査

マウンド状遺構（東から）



TRZ 西壁セクション

マウンド状遺構（南から）

図版 12

SK18 調査状況

SK18 鋤先出土状況

SK18 下層確認

SK18・19完掘状況

SK23・24

SK23・24 遺物出土状況

SK23・24 遺物出土状況

SK36

3 面目遺構面完掘

図版 14

SK41

SK41

SK45 検出

SK45

SK45 遺物出土状況

SK37 出土搬入土器

SK21

SK21

TRZ

SK2

SK1

サブトレ B

SK24

遺物出土状況（土器）

図版 16

SK25

SK25

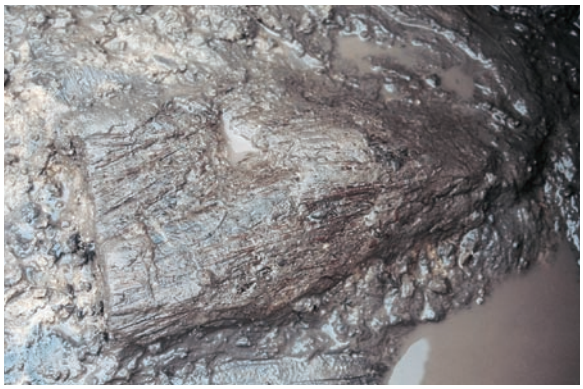
SK21

SK25

SK41

SD4

SK18

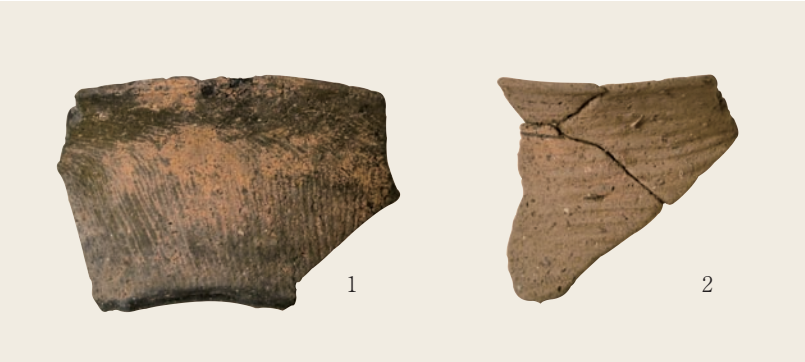


SD4

木製品出土状況

SD4　検出状況

調査に参加した人々



TR10　　TR10・11

TR10・11

TR10・11

TR12　土錘

TR14　唐津灰釉皿

試掘調査出土遺物

SK1・2・4　出土遺物

19

20

23

25

21

22

27

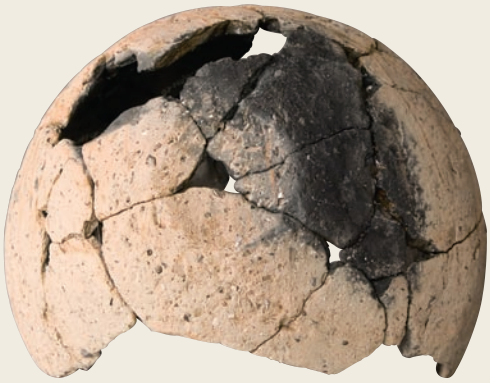
SK9・11・14・17　出土遺物

31

33

37

30



37

41

SD1　出土遺物

43

44

46

45

49

49

48

50

マウンド2　出土遺物

51

52

53

53

53

SK20・21　出土遺物

55

56

57

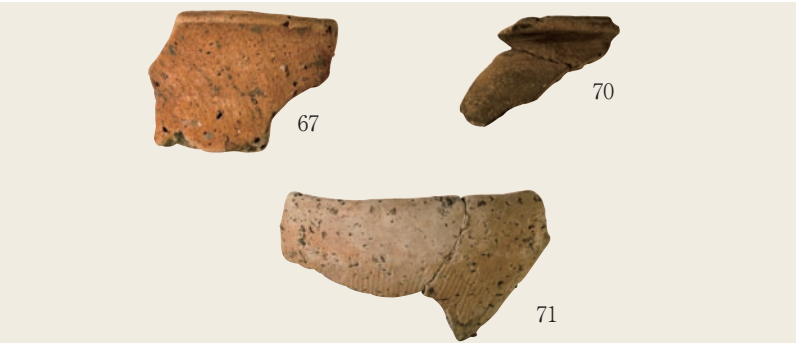
58

61 60

62

59

SK23～27　出土遺物



SK33～38・TRZ・土器集中　出土遺物

72

73

77

80

79

78

SK39・41　SD4　出土遺物

81

83

82

85

88

87

SD4　出土遺物

W7

W4

W1

W6

W5

W9

W8

出土遺物　－木製品－

報 告 書 抄 録

ふ り が な	うさいだやなぎがもといせき
書 名	兎田柳ヶ本遺跡
副 書 名	中山田地区農業集落排水事業に伴う発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	高知県香南市発掘調査報告書
シ リーズ 番 号	第4集
編 著 者 名	松村信博・宮地啓介
編 集 機 関	高知県香南市文化財センター
所 在 地	〒781-5453　高知県香南市香我美町山北1553-1　TEL 0887-54-2296
発 行 年 月 日	西暦2010年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うさいだやなぎがもと 兎田柳ヶ本 いせき 遺跡	こうちけんこうなんし 高知県香南市 のいちちょう 野市町 うさいだやなぎがもと 兎田柳ヶ本	39211	3050	33度 34分 16秒	133度 43分 25秒	平成14年 5月13日 ～ 8月30日	2,000	農業集落 排水事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
兎田柳ヶ本 遺跡	墳墓祭祀跡	弥生時代終末 ～ 古墳時代初頭	土坑 溝 マウンド状遺構 ピット	古式土師器 東阿波型土器 庄内式土器 木製品（鋤・三又鍬・板状木製品他）	古墳時代初頭の方形周溝墓の可能性を持つ墓域及び祭祀跡

高知県香南市発掘調査報告書第４集

兎田柳ヶ本遺跡

中山田地区農業集落排水事業に伴う発掘調査報告書

2010年３月

発行　高知県香南市教育委員会
香南市文化財センター
〒781-5453　高知県香南市香我美町山北１５５３－１
TEL 0887-54-2296

印刷　有限会社西村謄写堂